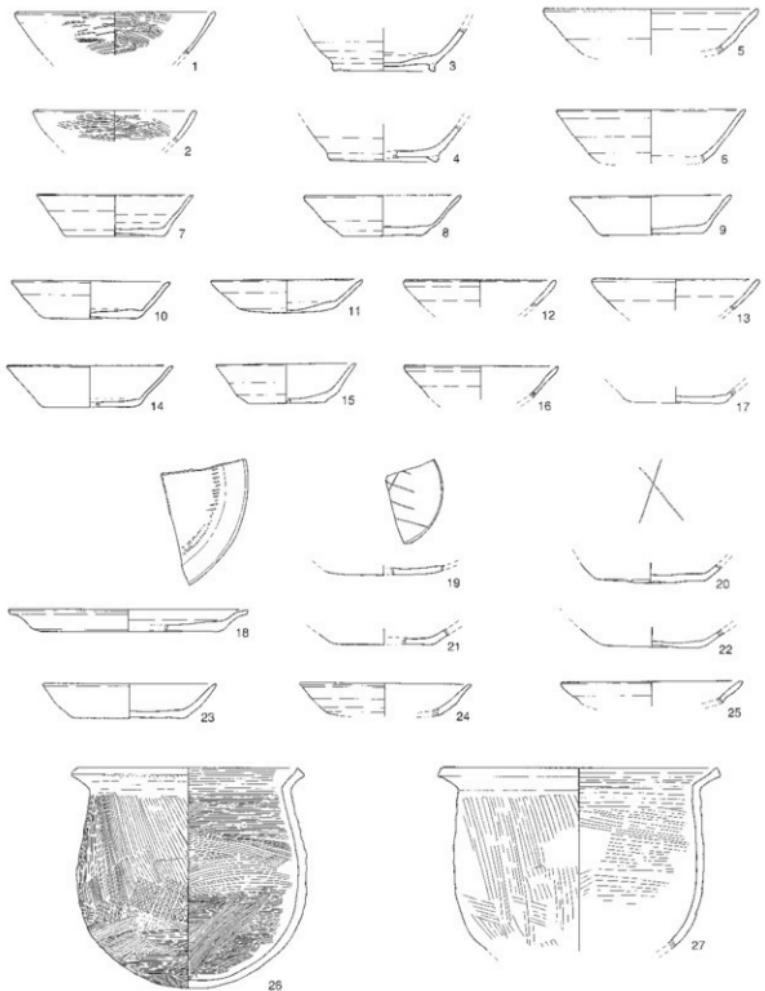
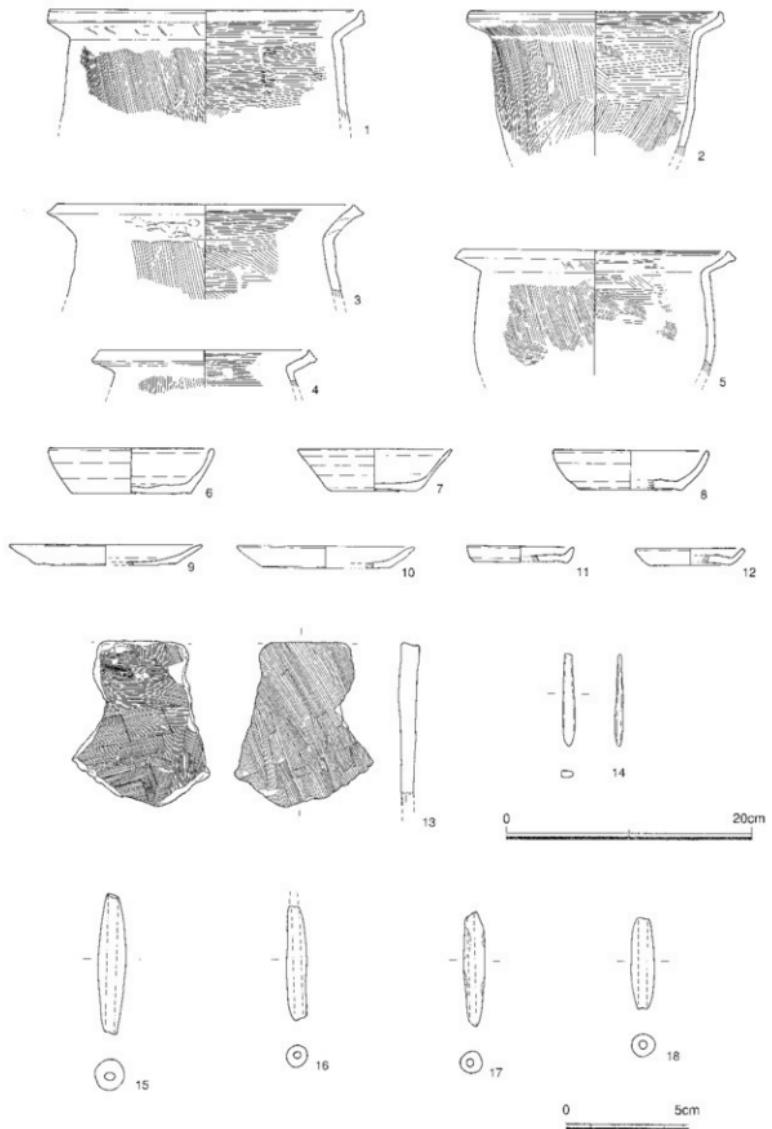


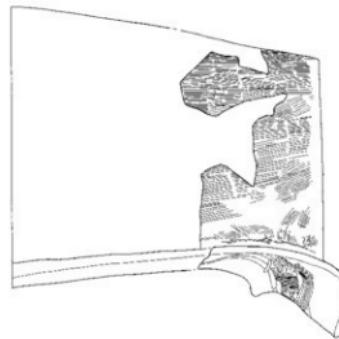
第251図 SX3001平・断面図



第252図 SX3001出土遺物1



第253図 SX3001出土遺物 2



0
30cm

第254図 SX3001出土遺物 3

(4) 第4遺構面（古墳時代後期）

第4遺構面（古墳時代後期：7世紀前半頃）

第4遺構面は、当初の試掘調査段階では未確認であった想定外の遺構面である。主に調査区西半でその拡がりが確認された。特に調査区西側に所在する寺山周辺において遺構密度が高くなる傾向がみられ、古墳時代後期の堅穴住居跡が密集して検出された。

出土遺構（第17図）

SR（自然流路）

調査区西側の「寺山」に近接する地点において確認された。第2遺構面で検出された大溝 SD2001は、この旧河道（流路）を踏襲したかたちで構築されている。

SR4001（自然流路）

SR4001は第4遺構面において検出された「寺山」に近接した旧河道である。南北方向の流路で、幅は南端部分で14mである。

堆積のうち下位の砂礫層からは、粒子サイズの混在が著しく淘汰性の低い様子が観察された。この状況からは、砂礫は園瀬川に由来するものではなく、遺跡の北側（下長谷）からの洪水性の堆積と見なすことができる。ただし、堆積層のうちには粘性の高いシルトや砂質の強いものなど各種がみられ、一概に北側から南側へのものと断定することも難しい。

堆積は北半と南半で様子が異なるが、堆積層上半は黄褐色のシルト～砂質土シルト混じりで遺物はほとんど含まれない。下半は青灰色土（第1層）・有機質を大量に含む暗褐色土（第2層）・砂性の強い暗褐色土（第3層）の3つに大別できるが、堆積については細かな観察によっては数十もの分層が可能である。先にも見たように各層位ごとに明瞭な特徴を有しており、土器を多く含む下位の層をいくつかの層位を、第1層は青灰色の粘土を含む層、第2層は自然木・枝材・種子などの有機物の集中的な堆積がみられる……、といった特徴によって大きく4つにまとめ、掘削を進めた状況である。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・木製品がある。上記のような分層に従い、年代ごとの分離を目指したが、ごく少量の弥生時代後期の土器・古墳時代前期の土師器・古墳時代後期後半の土師器・須恵器は、年代と層序との相関関係がない出土状況であった。出土遺物の多くは西肩付近に集中しており、東寄りでは少ない。第2層では若干の木製品が出土したが、量的には少なく、位置にも規則性は認められない。全般的に廃棄された状況であるが、遺物の多い層位は堆積土の砂礫ではなく、シルトあるいは砂質土であり、廃棄位置からの二次的な移動はほとんどなかったと推定される。

また SR4001は東側にも回り込み、これを調査時は SR4002としていたが基本的には同一の遺構である。南北方向に流れ、検出部北半は西側に大きく回り込んでいる。河道の西肩は第5遺構面の住居の一部を切っているため、古墳時代前期以降のものと判断される。また東肩については、SR以東にあるさらに後世の流路によって切られているため、古墳時代段階での幅は不明である。

なお、東肩を切っている流路の状況については、検出範囲の南東部の流路堆積土中に奈良時代の遺物が散見されること、この地点で9世紀頃には生活面が形成されていることから、8世紀段階のものとみ

られる。

出土遺物としては須恵器・土師器などの土器が中心で木製品はみられず、西側部分ほどの出土量はない。古墳時代前期にさかのほるものが若干含まれるが、ほとんどは後期に下るものである。層位的な序列による遺物の年代は分離できない。

SR の下層（砂性の強い暗褐色土）からは貝殻が出土した。分量的にさほど多くなく、貝のほとんどが膜状に薄く残るという遺存状態であった。肉眼のみによる観察では、二枚貝ではハマグリ・マガキ・ハイガイなどが、巻貝ではヘナタリがみられる。海水産の比率が高く、出土体位からみて、自然状態ではなく、人間が食用などに利用した後に廃棄した可能性が高い。

出土遺物（第255図）

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・木製品がある。年代ごとの分離を目指したが、ごく少量の弥生時代後期の土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期後半の土師器・須恵器などの遺物は、年代と層位との相関関係にない出土状況であった。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯などが出土している。時期的には概ね古墳時代後期初頭頃と思われる。

SD（溝・溝状遺構）

SDとしたものは5条あるが、不明瞭な平面プランであり、全容の把握できるものは少ない。

SD4001

南北に延びる溝状遺構である。平面プランは明瞭ではない。出土遺物等から、時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

出土遺物（第255図）

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。出土遺物には土師器・須恵器等がある。詳細な形状は不明であるが、時期的には概ね古墳時代後期初頭頃と思われる。

SD4002

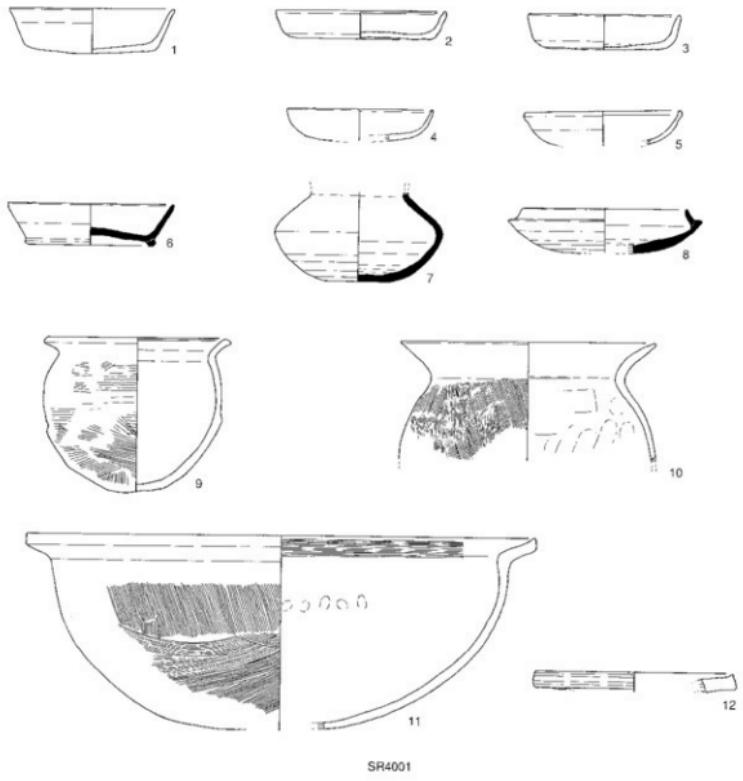
南北に延びる溝状遺構である。平面プランは明瞭ではない。出土遺物等から、時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

出土遺物（第255図）

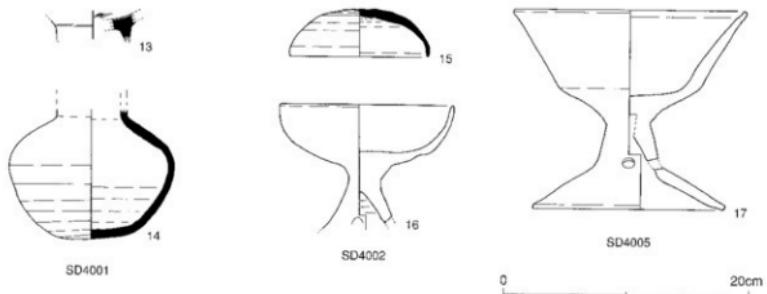
いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。出土遺物には土師器・須恵器等がある。詳細な形状は不明であるが、時期的には概ね古墳時代後期初頭頃と思われる。

SD4005

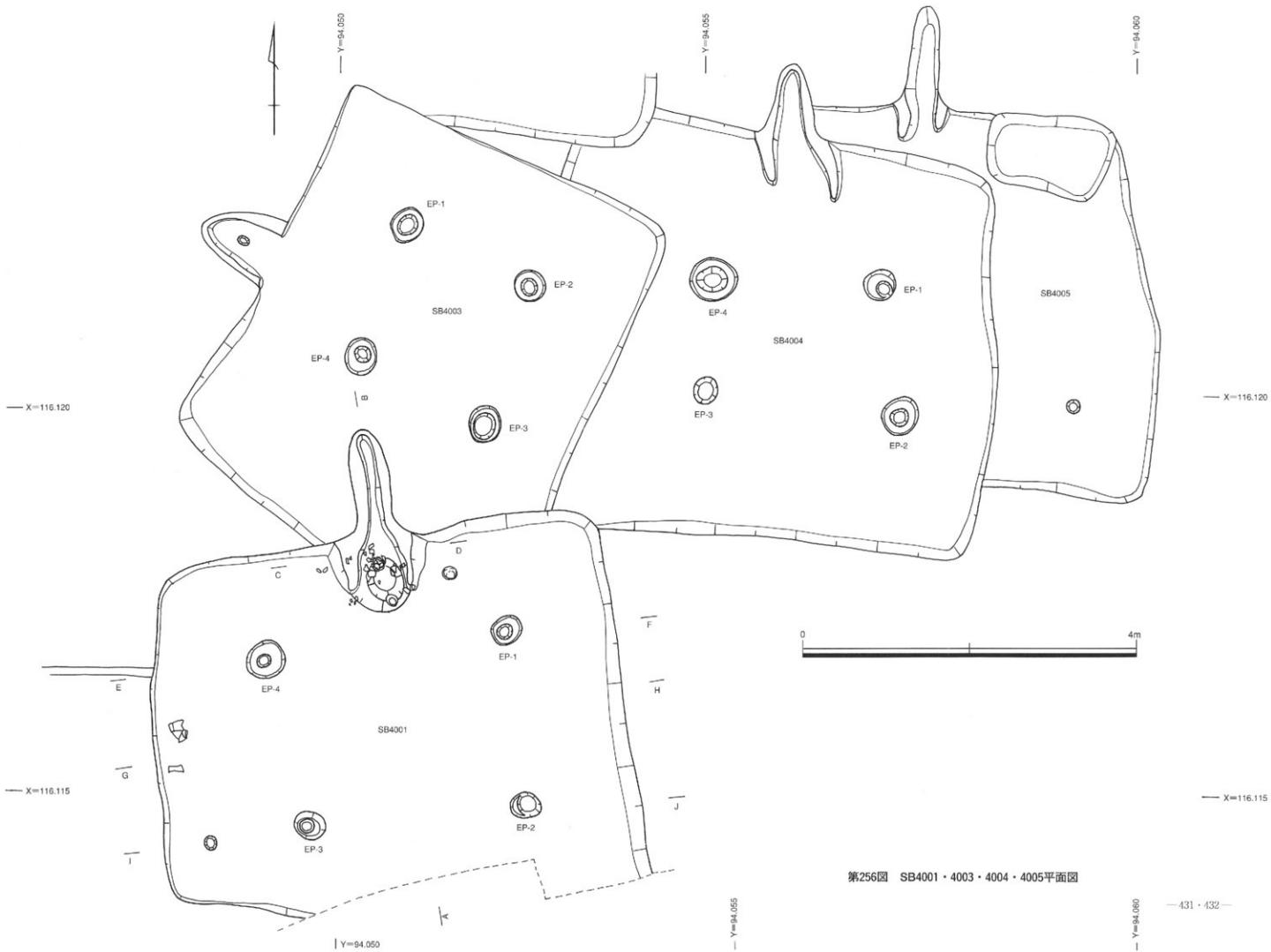
南北に延びる溝状遺構である。平面プランは明瞭ではない。出土遺物等から、時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。



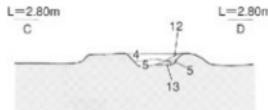
SR4001



第255図 SR・SD 出土遺物 (SR4001・4001・4002・4005)



第256図 SB4001・4003・4004・4005平面図



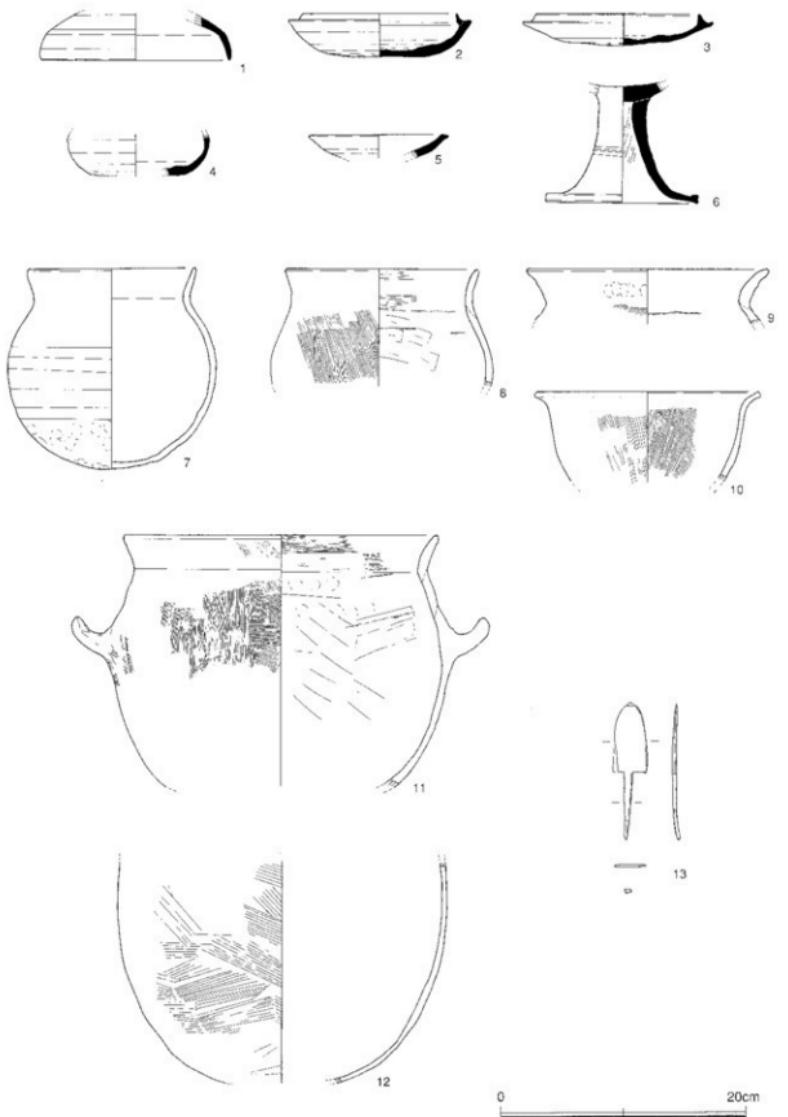
- 1 黄褐色2.5Y5/6砂質シルト しまりあり、粘性あり。マンガン粒状15%を含む。
 2 黄褐色2.5Y5/6砂質シルト しまりあり、粘性あり。マンガン粒状を少々含む。
 3 褐色10YR4/4シルト しまりあり、粘性あり。粘土を40%含む。
 4 オリーブ褐色2.5Y4/5シルト しまりあり、粘性あり。粘土を40%含む。
 5 褐色10YR4/4シルト しまりあり、粘性あり。粘土を40%含む。
 6 オリーブ褐色2.5Y4/5シルト しまりあり、粘性あり。灰、炭化物を含む。
 7 褐色10YR4/4シルト しまりあり、粘性あり。粘土を40%含む。
 8 褐色7.5YR4/4シルト 非塑土 固いドーナツ状。
 9 黄褐色2.5Y5/4シルト しまり弱い、粘性強い。
 10 オリーブ褐色2.5Y4/4シルト しまりあり、粘性あり。塊状、炭化物を含む。
 11 灰オリーブ色5Y5/2シルト しまり弱い、粘性弱い。
 12 黄褐色2.5Y5/3砂質シルト \pm 2~3mm3%。
 13 褐色7.5YR2/2泥土 \pm 2~20mm2%。
 14 褐色5YR4/6泥土 \pm 1~2mm3%。
 15 炭化物 \pm 2mm1%、鉄分 \pm 1~2mm2%
 マンガン粒状5%を含む。



- EP1
 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (しまりや強), 粘性あり, 反オーピー色5Y5/3シルト \pm 2~3mm10%, 矿物7.5YR4/2泥土 \pm 1mm10%, 炭化物 \pm 1mm1%。
 2 反オーピー色5Y5/3シルト (しまり弱), 粘性や強, 黄褐色2.5Y5/3砂質土 \pm 3~5mm10%, 灰化物 \pm 5mm1%, マンガン粒状 \pm 5%を含む。
 EP2
 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (しまり弱), 粘性や強, 反オーピー色5Y5/3シルト \pm 2~10mm15%, 灰化物 \pm 1~2mm1%。
 2 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (しまり有り), 粘性有り, 反オーピー色5Y2/2~3mm10%, 灰化物 \pm 1mm1%。
 3 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (しまり有り), 粘性有り, 反オーピー色5Y2/2~3mm5%, マンガン粒状5%を含む。)
- EP3
 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (しまり弱), 粘性や弱, 反オーピー色5Y5/2シルト \pm 2~3mm5%, 矿物 \pm 2mm2%。
 2 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (しまり弱), 粘性有り, 反オーピー色5Y5/2シルト \pm 2~3mm5%。
 EP4
 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (しまり弱), 粘性弱い, 反オーピー色5Y5/2シルト \pm 1~2mm10%。
 2 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (しまり弱), 粘性や強, 灰化物 \pm 1~2mm1%, マンган粒状5%を含む。
 EP2
 3 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (しまりや強), 粘性や強, 反オーピー色5Y5/2シルト \pm 3~5mm20%, 矿物7.5YR4/4泥土 \pm 5mm1%。
 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (しまり有り), 粘性有り, 反オーピー色5Y5/2シルト \pm 3~5mm20%, マンган粒状5%を含む。)

0 4m

第257図 SB4001断面図



第258図 SB4001出土遺物

出土遺物（第255図）

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。出土遺物には土師器・須恵器等がある。詳細な形状は不明であるが、時期的には概ね古墳時代前期頃と思われる。

SB（豎穴住居跡）

調査区西側に所在する寺山周辺において遺構密度が高くなる傾向がみられ、流路に囲まれたかたちで古墳時代後期の豎穴住居跡が密集して検出された。竪は住居北側あるいは西側に構築される。

SB4001（第256・257図）

G～I-17・18、5区の第4遺構面は中央において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれており、3号・4号・6号・9号・12号・23号の各住居と重複関係にあり、切合い関係からこれらすべての住居の埋没後に構築されたことが分かる。

平面形は隅丸方形（一边5.85m×4.58m）で、南側は先行する掘削すでに失われていた。竪に伴う煙道が北壁から張り出す。検出面から当初の掘り込みの深さは11cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつた（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の豎穴住居すべてで確認された。

主柱穴は4基確認され、それぞれの径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。

竪は焚き口とその両側前面に伸びる袖・トンネル構造に覆われた煙道からなるが、上面が相当部分削平で失われている。焚き口部分は床面よりも浅いスリバチ形に掘り詰められており、焼土面が形成されている。またこの浅い掘り詰めには灰層（第11層）・炭化物が集中的に確認された。袖は住居構築面や埋土と似通った土で構築されており、判別は非常に困難。まれに焚き口側に明瞭な焼け込み面が形成されている場合がある。その他の住居でも早い段階での断ち切りによって識別されるものがほとんどである。SB4001では壁面から60～70cmの突出が認められた。焚き口部には土師器の甕が伏せた状態で置かれており、煮炊具の下部の支えとして用いられていたことがわかる。同様に支えを有するものでは、須恵器のハソウ・高杯が伏せて用いたものや、棒状の片岩砾を用いたものなどがある。

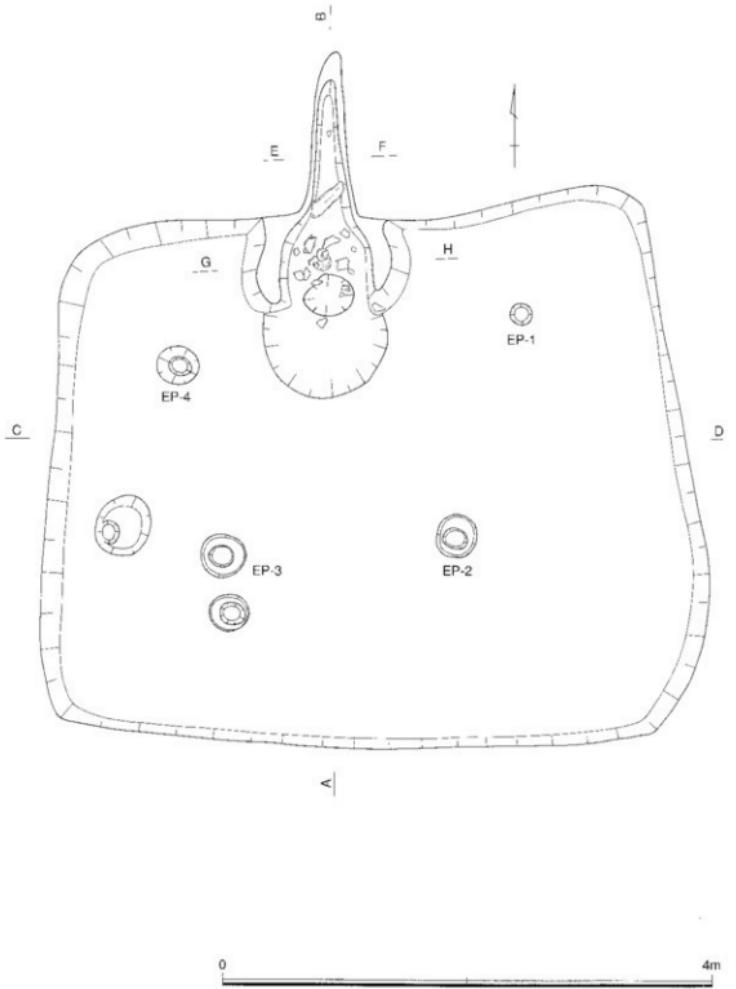
出土遺物（第258図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられるが、竪の周辺では形状をとどめる土器もみられ、使用（廃棄）の状況に近いと考えられる。

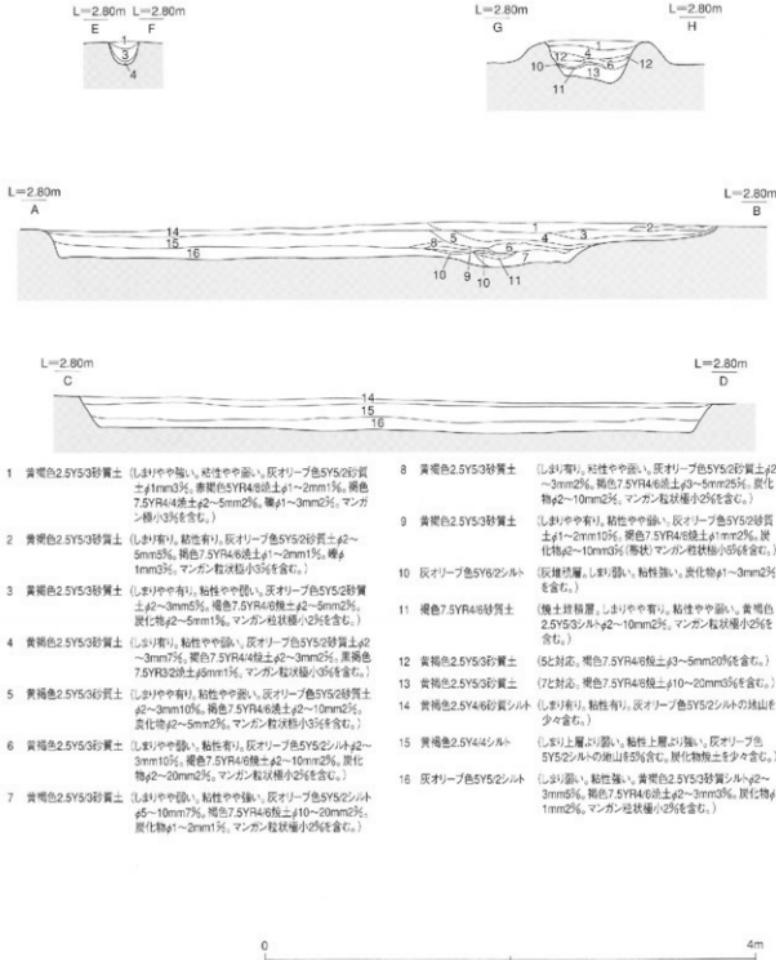
いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は甕・高杯が出土している。時期的には後期初頭頃と思われる。

SB4002（第259・260図）

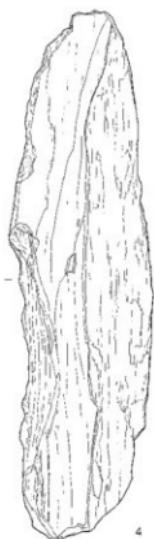
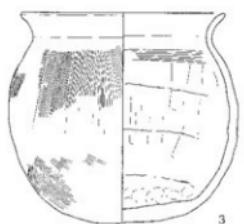
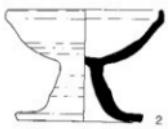
H～J-15～17、5区の第4遺構面は中央において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれており、7号・8号・18号・19号・20号・30号の各住居と重複関係にあり、切合い関係からこれらすべての住居の埋没後に構築されたことが分かる。



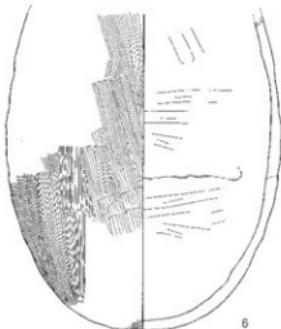
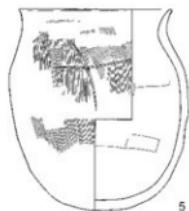
第259図 SB4002平面図



第260図 SB4002断面図



SB4002



SB4003



第261図 SB出土遺物 (4002・4003)

平面形は隅丸方形（一辺5.11m×4.23m）で、竈に伴う煙道が北壁から張り出す。検出面から当初の掘り込みの深さは24cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は4基確認され、それぞれの径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。

竈は焚き口とその両側前面に伸びる袖・トンネル構造に覆われた煙道からなるが、上面が相当部分削平で失われている。焚き口部分は床面よりも浅いスリバチ形に掘り窪められており、焼土面が形成されている。またこの浅い掘り窪めには灰層（第11層）・炭化物が集中的に確認された。袖は住居構築面や埋土と似通った上で構築されており、判別は非常に困難。まれに焚き口側に明瞭な焼け込み面が形成されている場合がある。その他の住居でも早い段階での断ち割りによって識別されるものがほとんどである。SB4002では煙道部は壁面から60～70cmの突出が認められた。焚き口部には須恵器の高杯を煮炊具の下部の支えとして用いられていた。同様に支えを有するものでは、土師器の壺が伏せて用いたものや、棒状の片岩礫を用いたものなどがある。

出土遺物（第261図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられるが、竈の周辺では形状をとどめる土器もみられ、使用（廃棄）の状況に近いと考えられる。

いずれも小片であるため、國化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4003（第256図）

G～J-15～18、5区の第4遺構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれており、4号・8号・9号・10号・12号の各住居と重複関係にあり、切合い関係からこれらすべての住居の埋没後に構築されたことが分かる。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺5.81m×4.44m）で、竈に伴う煙道が北壁から張り出す。検出面から当初の掘り込みの深さは18cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は4基確認され、それぞれの径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。

竈は焚き口とその両側前面に伸びる袖・トンネル構造に覆われた煙道からなるが、上面が相当部分削平で失われている。焚き口部分は床面よりも浅いスリバチ形に掘り窪められており、焼土面が形成されている。またこの浅い掘り窪めには灰層（第11層）・炭化物が集中的に確認された。袖は住居構築面や埋土と似通った土で構築されており、判別は非常に困難。まれに焚き口側に明瞭な焼け込み面が形成されている場合がある。その他の住居でも早い段階での断ち割りによって識別されるものがほとんどである。SB4003では煙道部は壁面から60～70cmの突出が認められた。焚き口部には土師器の壺が伏せた状

態で置かれており、煮炊具の下部の支えとして用いられていたことがわかる。同様に支えを有するものでは、須恵器のハソウ・高杯を伏せて用いたものや、棒状の片岩礫を用いたものなどがある。

出土遺物（第261図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の課程で廃棄されたとみられるが、竈の周辺では形状をとどめる上器もみられ、使用（廃棄）の状況に近いと考えられる。

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は甕・高杯が出上している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4004（第256図）

H・I-17・18・5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれており、1号・3号・10号の住居に切られる。5号・12号・31号の各住居と重複関係にあり、切り離し関係からこれらの住居の埋没後に構築されたことが分かる。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺5.29m×4.99m）で、竈に伴う煙道が北壁から張り出す。検出面から当初の掘り込みの深さは17cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5~7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は4基確認され、それぞれの径は約20cm、深度は床面から12~20cmを計る。

竈は焚き口とその両側前面に伸びる袖・トンネル構造に覆われた煙道からなるが、上面が相当部分削平で失われている。焚き口部分は床面よりも浅いスリバチ形に掘り詰められており、焼土面が形成されている。またこの浅い掘り詰めには灰層（第11層）・炭化物が集中的に確認された。袖は住居構築面や埋土と似通った土で構築されており、判別は非常に困難。まれに焚き口側に明瞭な焼け込み面が形成されている場合がある。その他の住居でも早い段階での断ち割りによって識別されるものがほとんどである。SB4004では煙道部は壁面から40~50cmの突出が認められた。焚き口部には棒状の片岩礫を煮炊具の下部の支えとして用いていた。同様に支えを有するものでは、須恵器の甕・高杯を伏せて用いたものや、土師器の甕が伏せた状態で置かれたものなどがある。

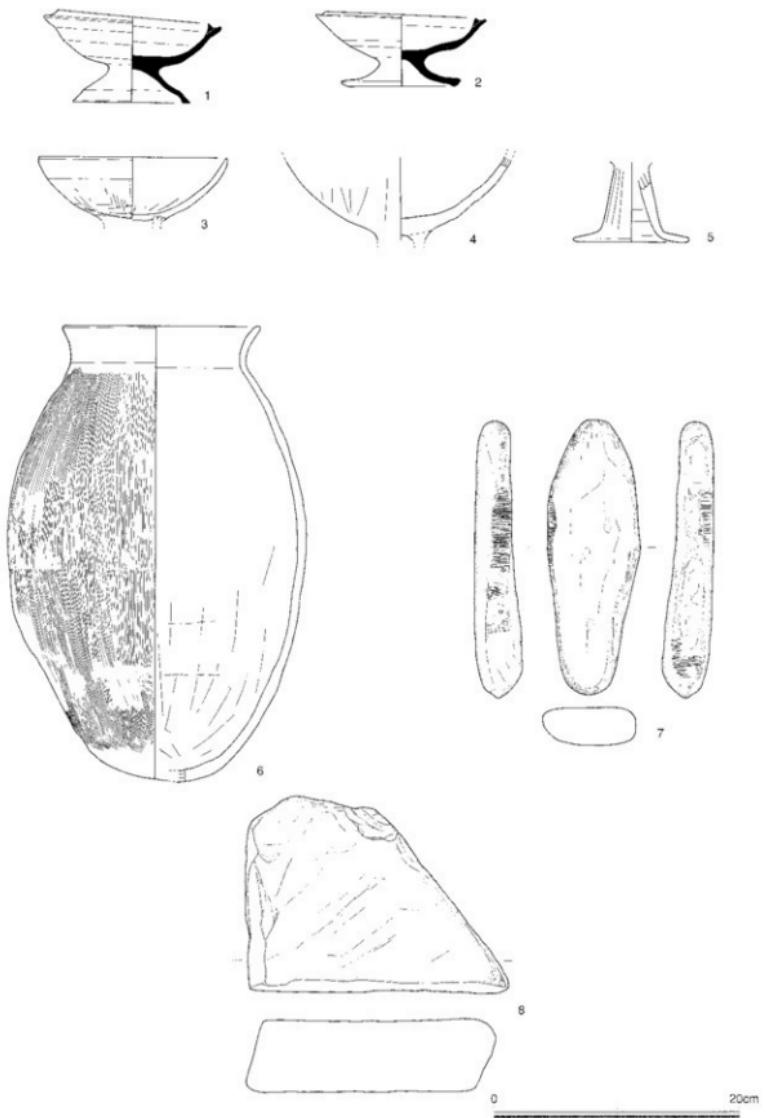
出土遺物（第262図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられるが、竈の周辺では形状をとどめる土器もみられ、使用（廃棄）の状況に近いと考えられる。

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は甕・高杯が出上している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4005（第256図）

H・I-18・19・5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築



第262図 SB4004出土遺物

かけており、4号の住居に切られる。12号・15号・31号の各住居と重複関係にあり、切合い関係からこれらの住居の埋没後に構築されたことが分かる。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺5.40m×4.65m）で、竈に伴う煙道が北壁から張り出す。検出面から当初の掘り込みの深さは29cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は1基確認され、それぞれの径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。

竈は焚き口とその両側前面に伸びる袖・トンネル構造に覆われた煙道からなるが、上面が相当部分削平で失われている。焚き口部分は床面よりも浅いスリバチ形に掘り窪められており、焼土面が形成されている。またこの浅い掘り窪めには灰層（第11層）・炭化物が集中的に確認された。袖は住居構築面や埋土と似通った土で構築されており、判別は非常に困難。まれに焚き口側に明瞭な焼け込み面が形成されている場合がある。その他の住居でも早い段階での断ち割りによって識別されるものがほとんどである。SB4005では煙道部は壁面から60～70cmの突出が認められた。

出土遺物（第264図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で焼棄されたとみられるが、竈の周辺では形状をとどめる土器もみられ、使用（廃棄）の状況に近いと考えられる。

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は甕・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4006

G・H-16・17、5区の第4遺構而ほぼ中央において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれており、1・29号の住居に切られる。7号・9号・21号・22号の各住居と重複関係にあり、切合い関係からこれらの住居の埋没後に構築されたことが分かる。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺4.64m×4.45m）で、竈に伴う煙道が西壁から張り出す。検出面から当初の掘り込みの深さは13cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は2基確認され、それぞれの径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。

竈は焚き口とその両側前面に伸びる袖・トンネル構造に覆われた煙道からなるが、上面が相当部分削平で失われている。焚き口部分は床面よりも浅いスリバチ形に掘り窪められており、焼土面が形成されている。またこの浅い掘り窪めには灰層（第11層）・炭化物が集中的に確認された。袖は住居構築面や埋土と似通った土で構築されており、判別は非常に困難。まれに焚き口側に明瞭な焼け込み面が形成されている場合がある。その他の住居でも早い段階での断ち割りによって識別されるものがほとんどである。SB4006では煙道部は壁面から30～40cmの突出が認められた。

出土遺物（第264図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられるが、竈の周辺では形状をとどめる土器もみられ、使用（廃棄）の状況に近いと考えられる。

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出上している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4007

H・I-16・17、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれており、2・6・9・30号の住居に切られる。19号の各住居と重複関係にあり、切合い関係からこれらの住居の埋没後に構築されたことが分かる。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺4.96m×2.31m）で、竈に伴う煙道が西壁から張り出す。検出面から当初の掘り込みの深さは24cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ上（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の豊穴住居すべてで確認された。

上柱穴は1基確認され、それぞれの径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。

竈は焚き口とその両側前面に伸びる袖・トンネル構造に覆われた煙道からなるが、上面が相当部分削平で失われている。焚き口部分は床面よりも浅いスリバチ形に掘り窪められており、焼上面が形成されている。またこの浅い掘り窪めには灰層（第11層）・炭化物が集中的に確認された。袖は住居構築面や埋土と似通った土で構築されており、判別は非常に困難。まれに焚き口側に明瞭な焼け込み面が形成されている場合がある。その他の住居でも早い段階での断ち割りによって識別されるものがほとんどである。SB4007では煙道部は壁面から30～40cmの突出が認められた。

出土遺物（第264図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられるが、竈の周辺では形状をとどめる土器もみられ、使用（廃棄）の状況に近いと考えられる。

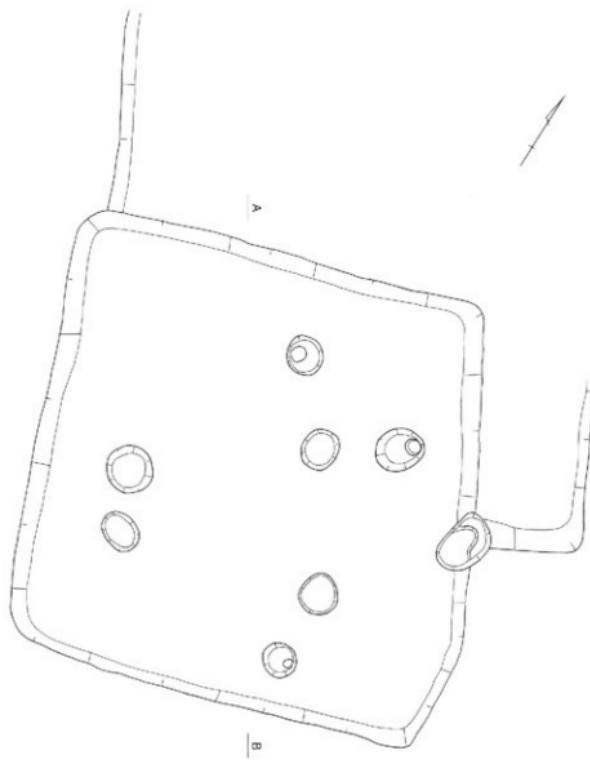
いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出上している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4008

I・J-16・17、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれており、2・3号の住居に切られる。10・11号の各住居と重複関係にあり、切合い関係からこれらの住居の埋没後に構築されたことが分かる。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺3.88m×2.61m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは6cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ上（第16層）が5～7cmの厚さで



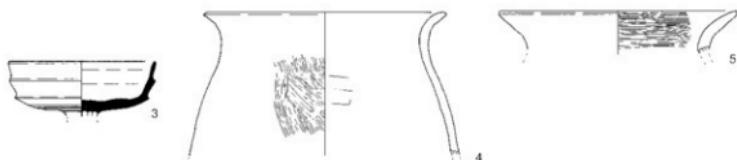
- 1 黄褐色2.5YS/4砂質シルト しまりやや弱。粘性やや弱。 $\phi=1\text{mm}$ のマンガン粒を3%含む。
 2 黄褐色2.5YS/4シルト しまりやや弱。粘性やや強。 $\phi=1\text{mm}$ のマンガン粒を5%含む。
 3 黄褐色2.5YS/4粘質シルト しまりやや弱。粘性強。
 7 黄褐色2.5YS/4粘質シルト しまりやや弱。粘性強。灰オリーブ5YS/2の地山ブロックを10%含む。



第263図 SB4010平・断面図



SB4005



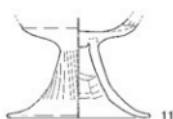
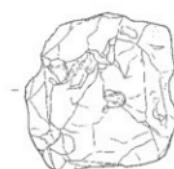
SB4006



SB4007



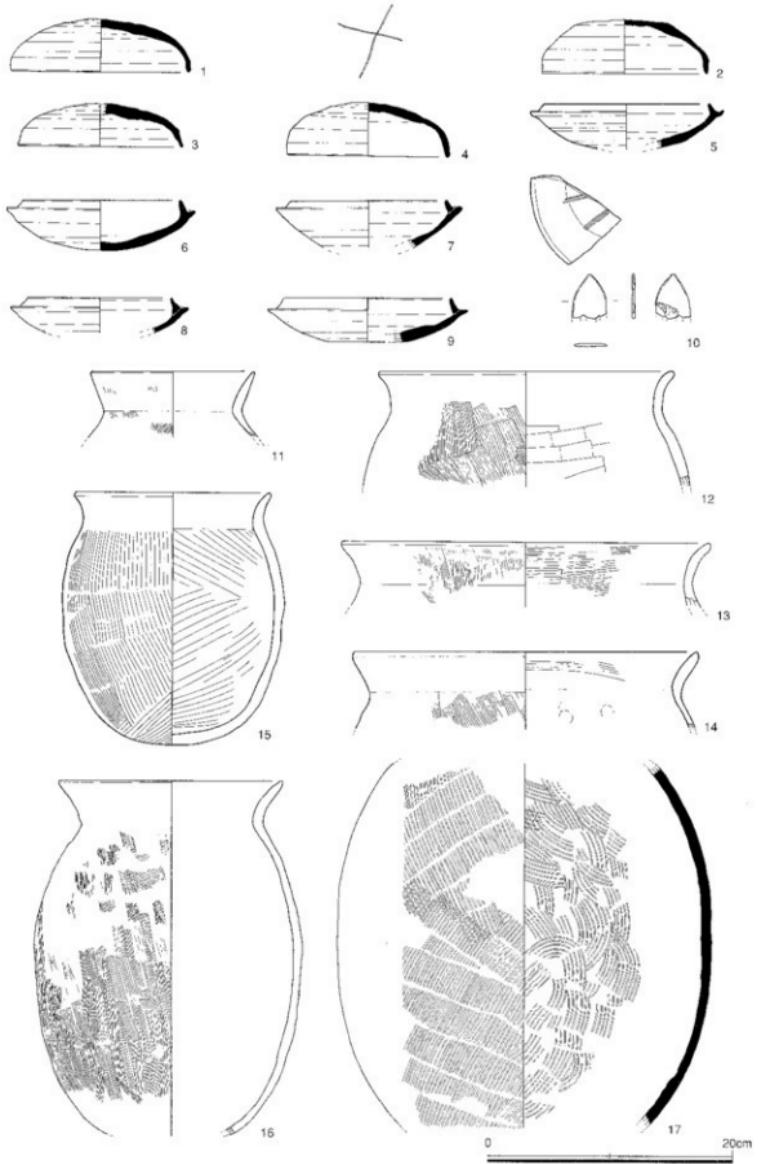
SB4008



20cm

SB4010

第264図 SB 出土遺物 (4005・4006・4007・4008・4010)



第265図 SB4012出土遺物

敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は2基確認され、それぞれの径は約20cm、深度は床面から12~20cmを計る。

竈は切り合う住居により削平され失われている。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第264図）

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4010（第263図）

I・J-17・18、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれており、3・8号の住居に切られる。4・11号の各住居と重複関係にあり、切合い関係からこれらの住居の埋没後に構築されたことが分かる。

平面形は隅丸方形（現存長で一辻4.30m×3.67m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは18cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5~7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は6基確認され、それぞれの径は約20cm、深度は床面から12~20cmを計る。

竈は切り合う住居により削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第264図）

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4012

H-17・18、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれており、1・4・5・23・24・31号の各住居と重複しており、これらの住居に切られている。

平面形は隅丸方形（現存長で一辻3.26m×300m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは5cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5~7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は確認されていない。竈も切り合う住居により削平されているものと思われ不明である。

出土遺物（第265図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

いずれも小片であるため、同化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は甕・高杯が出上している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4013（第266・267図）

I・J-20・21、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれており、14号の住居に切られる。16・32・52号の各住居と重複関係にあり、切合い関係からこれらの住居の埋没後に構築されたことが分かる。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺4.68m×4.50m）で、竈に伴う煙道が北壁（北西）から張り出す。検出面から当初の掘り込みの深さは21cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、占墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は2基確認され、それぞれの径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。

竈は焚き口とその両側前面に伸びる袖・トンネル構造に覆われた煙道からなるが、上面が相当部分削平で失われている。焚き口部分は床面よりも浅いスリバチ形に掘り窪められており、焼上面が形成されている。またこの浅い掘り窪めには灰層（第11層）、炭化物が集中的に確認された。袖は住居構築面や埋土と似通った土で構築されており、判別は非常に困難。まれに焚き口側に明瞭な焼け込み面が形成されている場合がある。その他の住居でも早い段階での断ち割りによって識別されるものがほとんどである。SB4013では煙道部は壁面から30～40cmの突出が認められた。焚き口部には棒状の片岩礫を煮炊具の下部の支えとして用いられていた。

出土遺物（第268図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

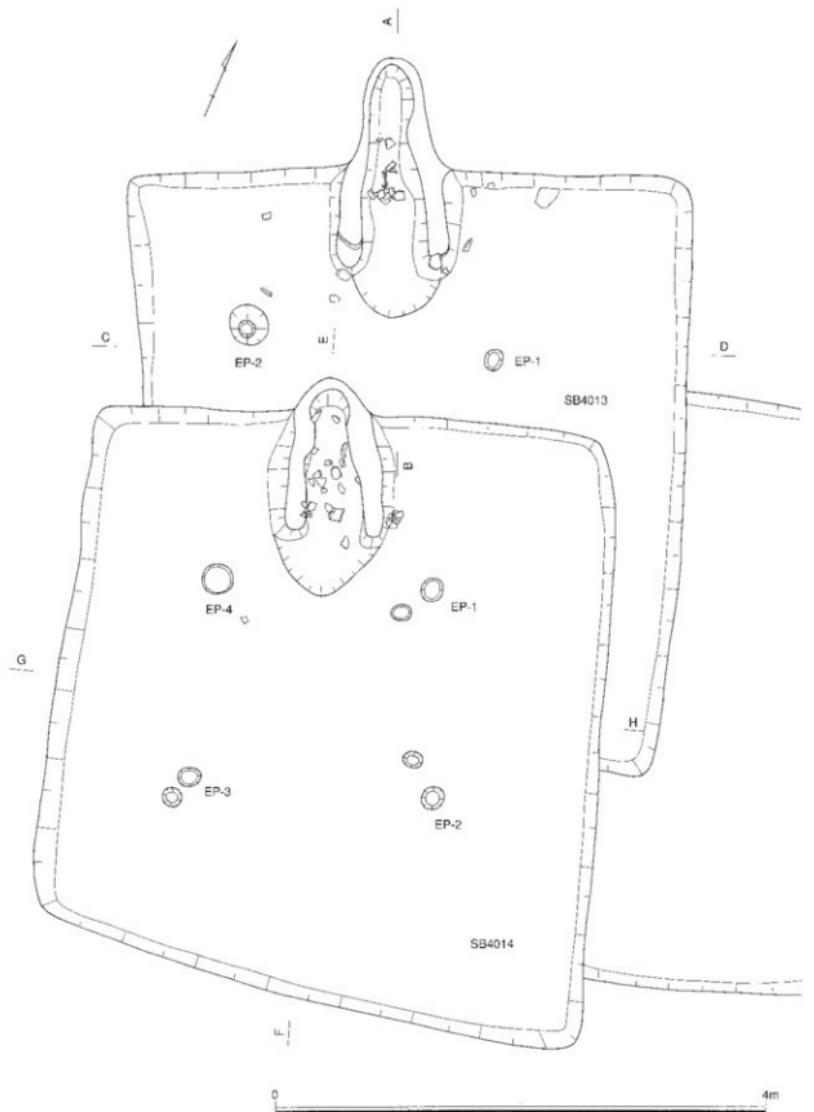
いずれも小片であるため、同化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は甕・高杯が出上している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4014（第266・267図）

I・J-20・21、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれており、13号・16号・32号・52号の各住居と重複関係にあり、切合い関係からこれらすべての住居の埋没後に構築されたことが分かる。

平面形は隅丸方形（一辺4.10m×4.39m）で、竈に伴う煙道が北壁（北西）から張り出す。検出面から当初の掘り込みの深さは28cmである。

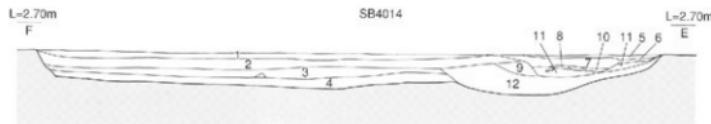
床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、占墳時代後期の堅穴住居すべて



第266図 SB4013・4014平面図



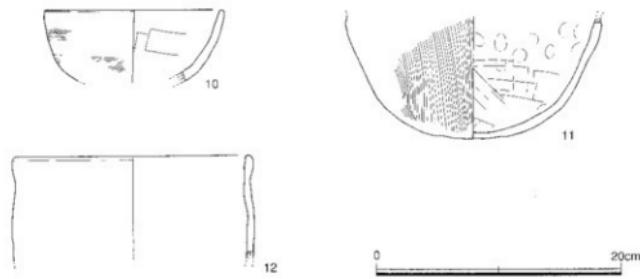
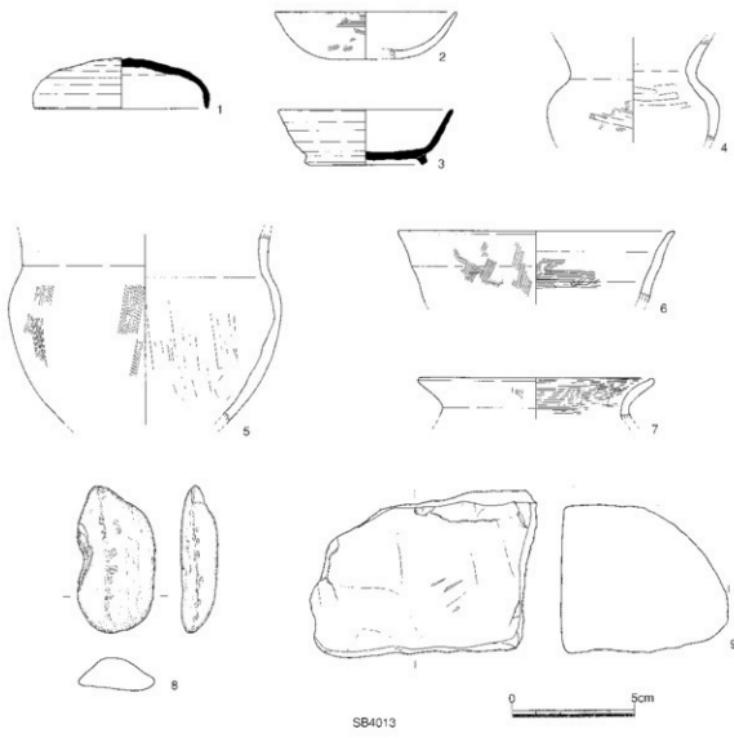
- 1 黄褐色7.5YR4/6シルト（しまりあり。粘性なし。焼土を40%以上含む。）
- 2 黄褐色2.5Y5/4砂質シルト（しまりややあり。粘性ややあり。）
- 3 食糧色2.5Y5/4シルト（しまりややあり。粘性2層より強い。）
- 4 黄褐色2.5Y5/3シルト（しまりややあり。粘性2層より強い。灰オリーブ5YS/2シルトの地山ブロックを少々含む。）
- 5 黄褐色2.5Y5/4砂質シルト（しまりややあり。粘性ややあり。φ=2~3mmのマンガン粒状を7%含む。）
- 6 灰オリーブ5YS/2シルト（しまりややあり。粘性ややあり。（白っぽい））
- 7 黄褐色2.5Y5/3シルト（しまりややあり。粘性ややあり。φ=2~3mmのマンガン粒状を7%含む。）
- 8 黄褐色2.5Y5/4シルト（しまりややあり。粘性ややあり。φ=2~3mmのマンガン粒状を5%含む。）
- 9 黄褐色2.5Y5/4シルト（しまりあり。粘性ややあり。マンガン粒状を5%含む。）
- 10 黄褐色2.5Y5/4シルト（しまりあり。粘性ややあり。）
- 11 黄褐色2.5Y5/4シルト（しまりあり。粘性ややあり。灰オリーブ5YS/2の地山を10%含む。）
- 12 黄褐色2.5Y5/5シルト（しまりあり。粘性ややあり。炭化物を10%含む。）
- 13 褐色10YR4/5シルト（しまりあり。粘性ややあり。燒土を20%含む。）
- 14 褐色10YR4/4シルト（しまりあり。粘性なし。燒土を40%含む。）
- 15 黄褐色2.5Y5/4シルト（しまりあり。粘性あり。炭化物を少々含む。灰オリーブ5YS/2の地山を10%含む。）
- 16 褐色10YR4/4シルト（しまりあり。粘性ややあり。炭化物を30%含む。）
- 17 黄褐色2.5Y5/4シルト（しまりあり。粘性あり。灰オリーブ5YS/2の地山を10%含む。）
- 18 淡オリーブ5Y4砂質シルト（しまりややあり。粘性ややなし。）



- 1 黄褐色2.5Y5/4砂質シルト（しまりやや弱い。粘性やや弱い。炭化物を少々含む。）
- 2 食糧色2.5Y5/4砂質シルト（しまりやや弱い。粘性やや弱い。5YS/2の地山ブロックを少々含む。）
- 3 食糧色2.5Y5/5砂質シルト（しまりやや弱い。粘性やや弱い。5YS/2灰オリーブブロック20%と炭化物・焼土を微量に含む。）
- 4 灰オリーブ色5Y5/2シルト（しまりやや弱い。粘性やや弱い。2.5Y5/3褐色砂質土φ=1~2mm15%。マンガン粒状細小20%小土器片をごくわずかに含む。）
- 5 黄褐色2.5Y5/3シルト（しまりやや弱い。粘性やや弱い。かまだ天井部の焼土を10%含む。）
- 6 黄褐色2.5Y5/4砂質シルト（しまりやや弱い。粘性やや弱い。5YS/2褐色オリーブの地山ブロックを少々含む。）
- 7 黄褐色2.5Y5/4シルト（しまりやや弱い。粘性やや弱い。5YS/2灰色オリーブの地山ブロックを少々焼土を少々含む。）
- 8 オリーブ褐色2.5Y4/3シルト（しまりやや弱い。粘性やや弱い。燒土を少々含む。）
- 9 黄褐色2.5Y4/4砂質シルト（しまりやや弱い。粘性やや弱い。5YS/2灰褐色オリーブの地山ブロックを20%含む。燒土を10%含む。）
- 10 黄褐色2.5Y5/4シルト（しまりやや弱い。粘性やや弱い。内側に抜けた部分あり。）
- 11 黄褐色2.5Y5/4砂質シルト（しまりやや弱い。粘性やや弱い。焼土、炭化物、マンガンφ1~2mmを微量含む。）
- 12 灰オリーブ5Y5/3シルト（しまりやや弱い。粘性やや弱い。燒土φ1~5mm少々。炭・マンガンφ1~2mm2%含む。）



第267図 SB4013・4014断面図



第268図 SB出土遺物 (4013・4014)

てで確認された。

主柱穴は7基確認され、それぞれの径は約20cm、深度は床面から12~20cmを計る。

竈は焚き口とその両側前面に伸びる袖・トンネル構造に覆われた煙道からなるが、上面が相当部分削平で失われている。焚き口部分は床面よりも浅いスリバチ形に掘り窪められており、焼土面が形成されている。またこの浅い掘り窪めには灰層（第11層）・炭化物が集中的に確認された。袖は住居構築面や埋土と似通った土で構築されており、判別は非常に困難。まれに焚き口側に明瞭な焼け込み面が形成されている場合がある。その他の住居でも早い段階での断ち割りによって識別されるものがほとんどである。SB4014では煙道部は壁面から20~30cmの突出が認められた。焚き口部には3cm前後の石英の白色円礫がみられた。

出土遺物（第268図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4015

I・J-18・19、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれており、5号の住居と重複し、切られている。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺2.56m×5.18m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは5cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5~7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は1基確認され、径は約20cm、深度は床面から12~20cmを計る。竈は切り合う住居により削平されているものと思われ不明である。

出土遺物（第269図）

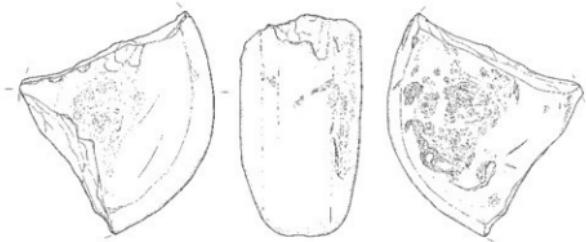
出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出上している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4016

I・J-21・22、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれており、13・14号の各住居と重複し、切られている。

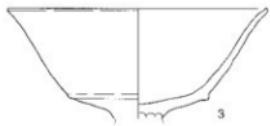
平面形は隅丸方形（現存長で一辺4.80m×2.24m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは19cmである。



SB4015



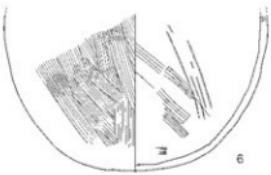
SB4016



3



4

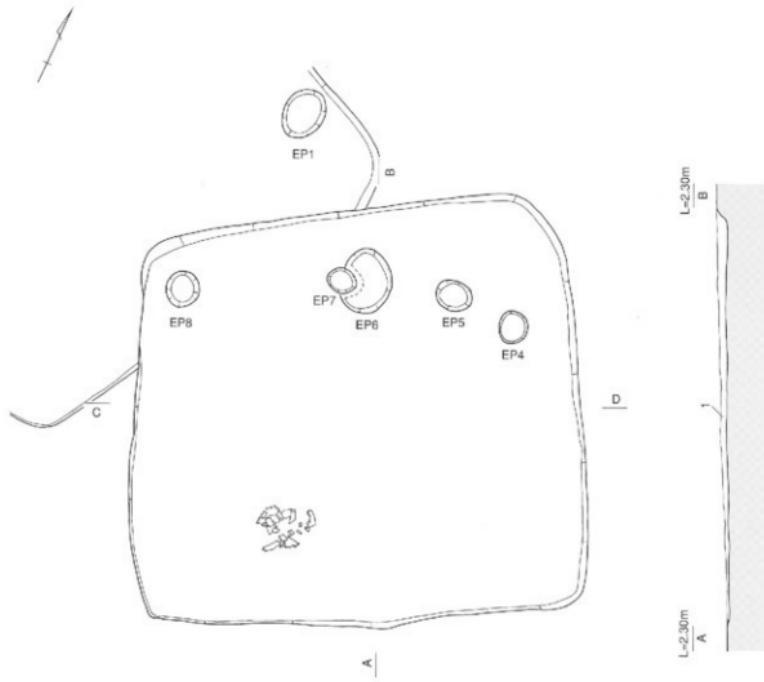


6

SB4017

0 20cm

第269図 SB 出土遺物 (4015・4016・4017)



1…暗灰黄色2.5Y5/3砂質土（しまり）やや有り。粘性有り。炭化物若干含む。)



第270図 SB4027平・断面図

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は1基確認され、径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。竈は切り合う住居により削平されているものと思われ不明である。

出土遺物（第269図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

いずれも小片であるため、國化し得たものは少ない。詳細な形狀は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代前期頃と思われる。

SB4017

H・I-21・22、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれており、13・14号の各住居と重複し、切られている。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺3.89m×3.57m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは27cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は3基確認され、径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。竈は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物（第269図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

いずれも小片であるため、國化し得たものは少ない。詳細な形狀は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4018

I・J-15・16、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれており、13・14号の各住居と重複し、切られている。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺3.22m×4.61m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは24cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は確認されていない。竈も削平されているものと思われ不明である。

出土遺物（第44図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

いずれも小片であるため、國化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4019

H・I-16、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれしており、2・7・18・20・30号の各住居と重複関係にあり、各住居に切られている。

平面形は隅丸方形（一辺3.88m×1.20m）で、竈に伴う掘道が西壁から張り出す。検出面から当初の掘り込みの深さは21cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住戸すべてで確認された。

主柱穴は1基確認され、それぞれの径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。

竈は焚き口とその両側前面に伸びる袖・トンネル構造に覆われた煙道からなるが、上面が相当部分削平で失われている。焚き口部分は床面よりも浅いスリバチ形に掘り窪められており、焼上面が形成されている。またこの浅い掘り窪めには灰層（第11層）、炭化物が集中的に確認された。袖は住居構築面や埋土と似通った土で構築されており、判別は非常に困難。まれに焚き口側に明瞭な焼け込み面が形成されている場合がある。その他の住居でも早い段階での断ち割りによって識別されるものがほとんどである。SB4019では煙道部は壁面から20～30cmの突出が認められた。

出土遺物（第44図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられるが、竈の周辺では形状をとどめる土器もみられ、使用（廃棄）の状況に近いと考えられる。

いずれも小片であるため、國化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4023

G・H-17・18、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれしており、1・12・24号の各住居と重複関係にある。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺0.53m×2.60m）と思われる。検出面から当初の掘り込みの深さは15cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住戸すべてで確認された。

主柱穴は確認されていない。竈も削平されており、北壁にあると思われるが明瞭ではない。

出土遺物（第271図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

いずれも小片であるため、同化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4027（第270図）

G～I-19・20、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれており、25・28号の各住居と重複関係にある。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺1.32m×1.50m）と思われる。検出面から当初の掘り込みの深さは15cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の竪穴住居すべてで確認された。

主柱穴は8基確認され、径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。竈は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第271図）

いずれも小片であるため、同化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代前期頃と思われる。

SB4028

G・H-19・20、5区の第4造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれており、27号の住居と重複関係にある。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺1.16m×3.98m）と思われる。検出面から当初の掘り込みの深さは6cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の竪穴住居すべてで確認された。

主柱穴は確認されていない。竈も削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第271図）

いずれも小片であるため、同化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代前期頃と思われる。

SB4029

G・H-16・17、5区の第4遺構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれており、6号の住居と重複関係にある。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺0.77m×1.62m）と思われる。検出面から当初の掘り込みの深さは41cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は確認されていない。竈も削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には上師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第271図）

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出上している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4030

H・I-16、5区の第4遺構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれており、2・18・19・20号の住居と重複関係にある。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺3.77m×0.88m）と思われる。検出面から当初の掘り込みの深さは21cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は確認されていない。竈も削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第271図）

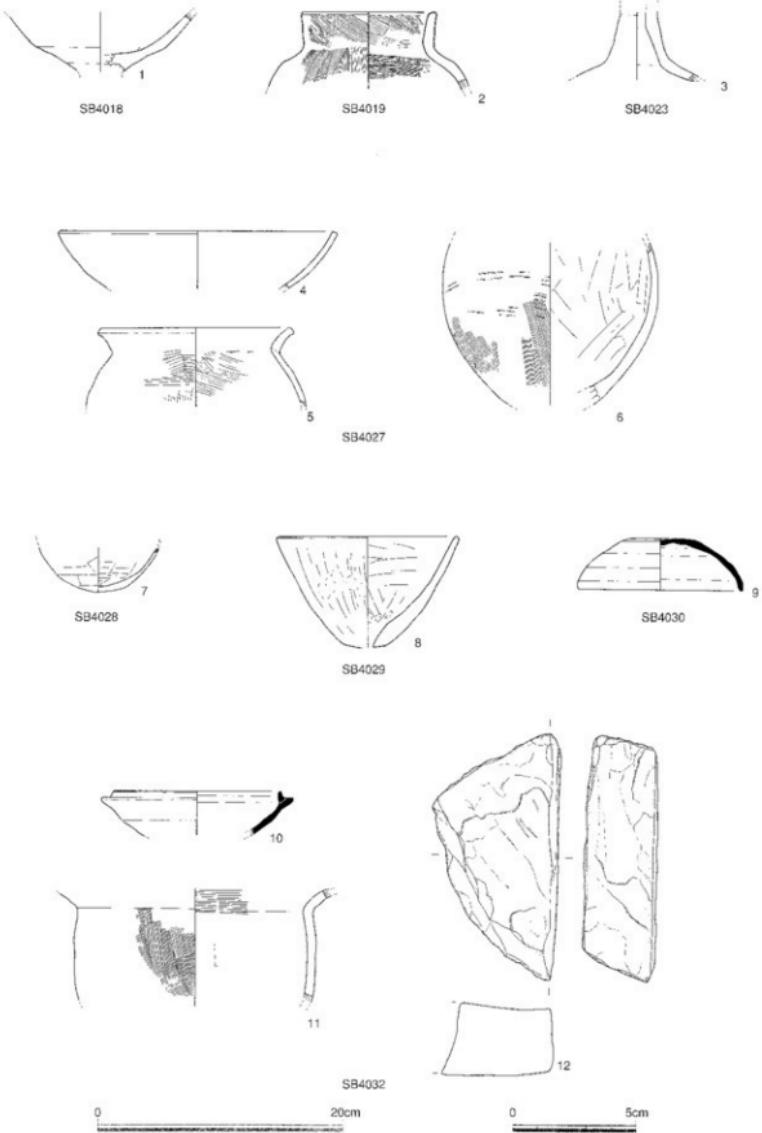
いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出上している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4032

H・I-19・20、5区の第4遺構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれており、13・14・25・52号の各住居と重複関係にある。

平面形は隅丸方形（一辺2.52m×3.03m）で、竈に伴う煙道が北壁から張り出す。検出面から当初の掘り込みの深さは18cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで



第271図 SB出土遺物 (4018・4019・4023・4027・4028・4029・4030・4032)

敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は確認されていない。

竈は焚き口とその両側前面に伸びる袖・トンネル構造に覆われた構造からなるが、上面が相当部分削平で失われている。焚き口部分は床面よりも浅いスリバチ形に掘り進められており、焼上面が形成されている。またこの浅い掘り進めには灰層（第11層）・炭化物が集中的に確認された。袖は住居構築面や埋土と似通った土で構築されており、判別は非常に困難。まれに焚き口側に明瞭な焼け込み面が形成されている場合がある。その他の住居でも早い段階での断ち割りによって識別されるものがほとんどである。SB4032では通道部は壁面から40~50cmの突出が認められた。焚き口部には棒状の片岩跡を煮炊具の下部の支柱として用いていた。同様に支柱を有するものでは、土師器の壺や須恵器の壺・高杯を伏せて用いたものなどがある。

出土遺物（第271図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられるが、竈の周辺では形状をとどめる土器もみられ、使用（廃棄）の状況に近いと考えられる。

いずれも小片であるため、固化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4033

E・F-11・12、5区の第4造構面西側において検出された。周間に多くの遺構が密集して築かれしており、34号の住居と重複関係にある。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺1.33m×2.60m）と思われる。検出面から当初の掘り込みの深さは22cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5~7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は2基確認され、径は約20cm、深度は床面から12~20cmを計る。竈は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第272図）

いずれも小片であるため、固化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4034

E-G-11・12、5区の第4造構面西側において検出された。周間に多くの遺構が密集して築かれ

ており、34号の住居と重複関係にある。

平面形は隅丸方形（現存長で一辺2.35m×3.460m）と思われる。検出面から当初の掘り込みの深さは20cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の竪穴住居すべてで確認された。

主柱穴は2基確認され、径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。竈は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物（第272図）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形狀は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4035

J・K-16・17、5区の第4遺構画面北側において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれており、10・11・37号の各住居と重複関係にある。

平面形は隅丸方形（一辺4.05m×4.31m）で、竈に伴う煙道が北壁から張り出す。検出面から当初の掘り込みの深さは21cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の竪穴住居すべてで確認された。

主柱穴は確認されていない。

竈は焚き口とその両側前面に伸びる袖・トンネル構造に覆われた煙道からなるが、上面が相当部分削平で失われている。焚き口部分は床面よりも浅いスリバチ形に掘り詰められており、焼上面が形成されている。またこの浅い掘り詰めには灰層（第11層）・炭化物が集中的に確認された。袖は住居構築面や坪土と似通った土で構築されており、判別は非常に困難。まれに焚き口側に明瞭な焼け込み面が形成されている場合がある。その他の住居でも早い段階での断ち切りによって識別されるものがほとんどである。SB4035では煙道部は壁面から40～50cmの突出が認められた。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられるが、竈の周辺では形狀をとどめる土器もみられ、使用（廃棄）の状況に近いと考えられる。

出土遺物（第271図）

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形狀は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4037

J・K-16・17、5区の第4造構面北側において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれしており、10・35号の各住居と重複関係にある。

平面形は隅丸方形（一辺3.16m×3.73m）であると思われる。検出面から当初の掘り込みの深さは23cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は4基確認され、径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。竈は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたと考えられる。

出土遺物（第272図）

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は甕・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4039

G・H-1・2、5区の第4造構面北西隅において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれている。

平面形は隅丸方形（一辺2.02m×1.64m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは42cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は確認されていない。竈は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第273図）

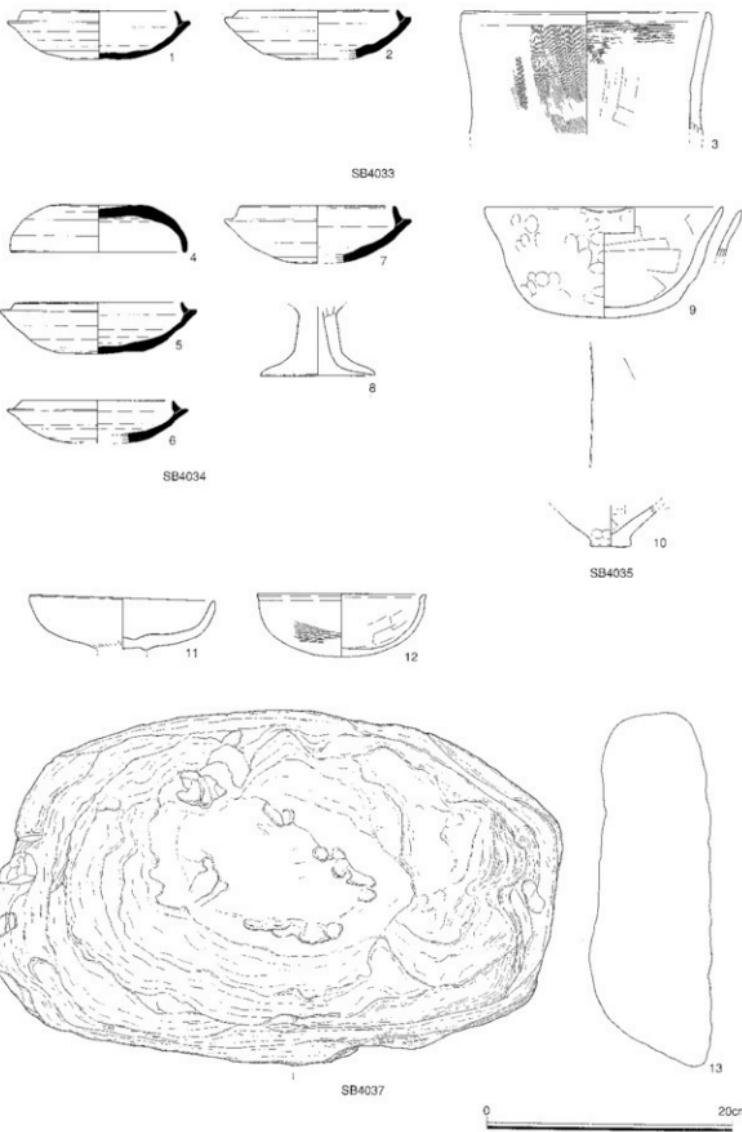
いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は甕・高杯が出土している。時期的には古墳時代前期頃と思われる。

SB4042

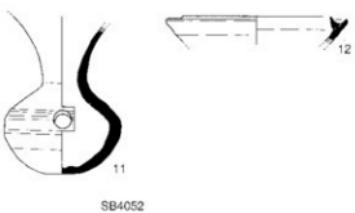
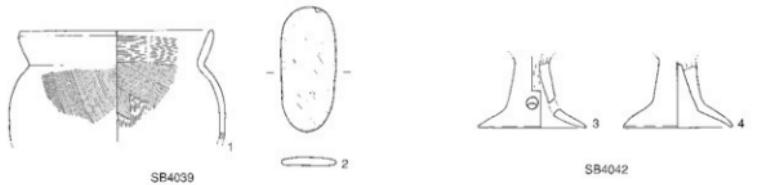
A・B-12・13、5区の第4造構面西端において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれている。

平面形は隅丸方形（一辺3.53m×2.28m）であると思われる。検出面から当初の掘り込みの深さは26cmである。

床面には、貼床に相当する層は確認されていない。



第272図 SB 出土遺物 (4033・4034・4035・4037)



第273図 SB 出土遺物 (4039・4042・4044・4045・4047・4052)

主柱穴は確認されていない。竈は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第273図）

いずれも小片であるため、國化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯・製塙土器などが出土している。時期的には古墳時代前期頃と思われる。

SB4044

E・F-20・21、5区の第4造構面南側において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれしており、43号の各住居と重複関係にある。

平面形は隅丸方形（一辺2.82m×3.28m）であると思われる。検出面から当初の掘り込みの深さは29cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が3～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。

主柱穴は確認されていない。竈は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第273図）

いずれも小片であるため、國化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯・鉢が出土している。時期的には古墳時代前期頃と思われる。

SB4045

D・E-20・21、5区の第4造構面南側において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれしており、43・44・46号の各住居と重複関係にある。

平面形は隅丸方形（一辺1.86m×3.86m）であると思われる。検出面から当初の掘り込みの深さは20cmである。

床面には、貼床に相当する層は確認されていない。主柱穴は確認されていない。竈は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第273図）

いずれも小片であるため、國化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯が出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4047

E・F-11・12、平面形は隅丸方形（一辺3.54m×2.39m）であると思われる。検出面から当初の掘り込みの深さは13cmである。

床面には、貼床に相当する層は確認されていない。主柱穴は2基確認され、径は約20cm、深度は床面から12~20cmを計る。甕は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第273図）

いずれも小片であるため、固化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は甕・高杯・製塙土器などが出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SB4052

A・B-14・15、平面形は隅丸方形（一辺1.47m×4.12m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは36cmである。

床面には、貼床に相当する層は確認されていない。主柱穴は1基確認され、径は約20cm、深度は床面から12~20cmを計る。甕は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第273図）

いずれも小片であるため、固化し得たものはなかった。詳細な形状は不明であるが、器種は甕・高杯・製塙土器などが出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

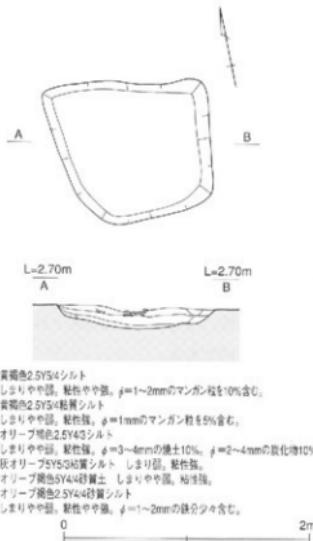
SK（土坑）

SKとしたものは11基を数える。平面形は円形状または四角形状を呈するが、不明瞭なものが多く平面形は安定していない。

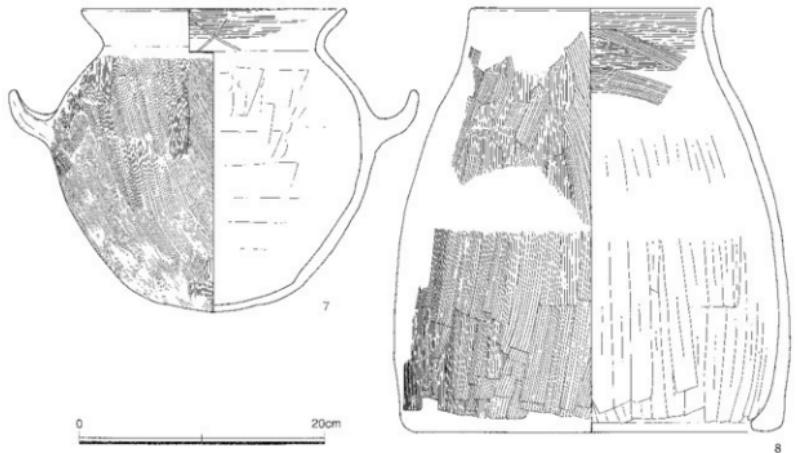
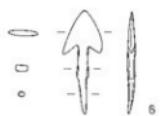
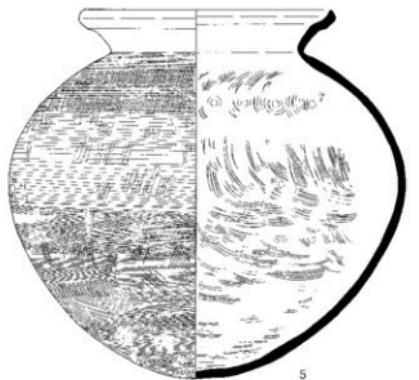
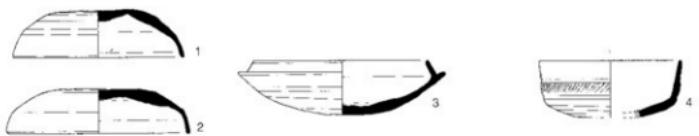
SK4007（第274図）

5区第4造構面で検出された住居跡の密集部分の中央部に位置する。SB4012の住居と重複関係にあり、住居跡の埋土の切合い関係から住居埋没後に築かれたことが分かる。

平面形は一辺1m程度の四角形状を呈する。深さ15cmである。埋土は5層に分層され、ともに黄



第274図 SK4007平・断面図



第275図 SK4007出土遺物

褐色の砂質土を基調とするものであるが、第1層には第2層より多くの焼土・炭化物を含む。

出土遺物では須恵器・土師器などがまとめて出土した。古墳時代後期に属する。

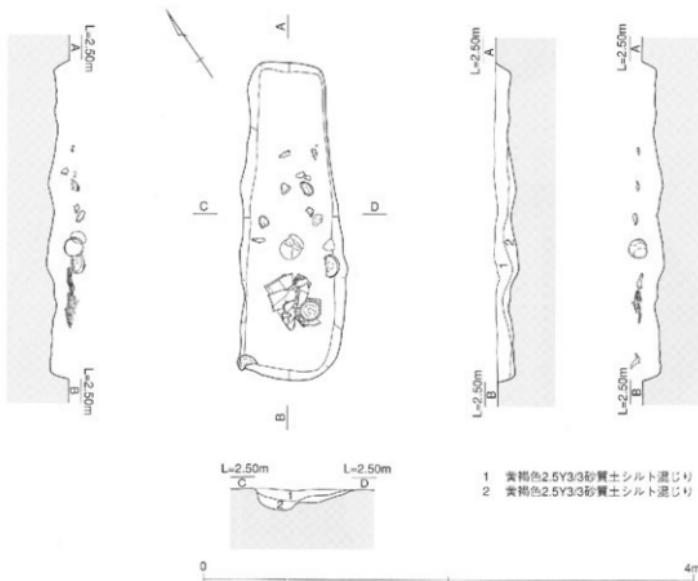
出土遺物（第275図）

全体形状をとどめる須恵器・土師器などがまとめて出土した。詳細な形狀は不明であるが、器種は壺・高杯・製塙土器などが出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

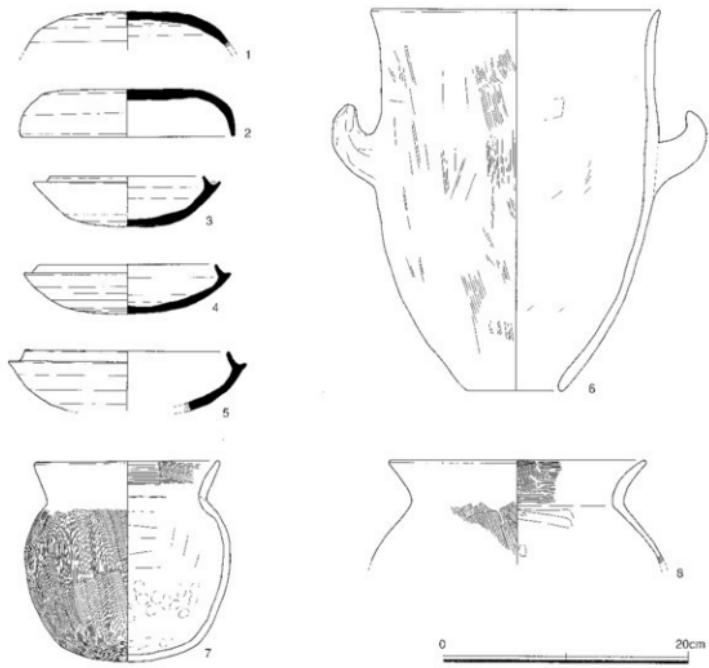
SK4012（第276図）

5区第4遺構面で検出された住居跡の密集部分のやや西寄りに位置する。1号・6号・29号の各住居と重複関係にあり、住居跡の埋土の切合い関係から住居埋没後に築かれたことが分かる。

平面形は長方形で、幅は一定ではなく、南半が北半と比べてやや広くなっている。長辺208cmで、短辺は南側で71cm・北側で50cmを測る。底面は平坦ではなく凹凸が顕著であるが、もっとも深い部分で15cmの深度を有する。



第276図 SK4012平・断面図



第277図 SK4012出土遺物

壇土は2層に分層され、ともに黄褐色の砂質土を基調とするものであるが、第1層には第2層より多くの焼土・炭化物を含む。

遺物として、全体形状をとどめる須恵器・土師器などがまとまって出土した。中央から南半にかけて集中しており、ほとんどが壇土第1層に含まれる。内訳は、須恵器（蓋杯）、土師器（壺・瓶）である。そのうち壺は完形の状態をとどめており、瓶は破碎した状態ではあったが接合により完形に復元となつた。古墳時代後期に属する。

出土遺物（第277図）

全体形状をとどめる須恵器・土師器などがまとまって出土した。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯・製塙土器などが出土している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SK4013

SK4012の東側、5区第4遺構面で検出された住居跡の密集部分に位置する。平面形は四角形状を呈する。

出土遺物には須恵器・土師器があるが、全体形状をとどめるものは少ない。古墳時代後期に属する。

出土遺物（第278図）

全体形状をとどめる須恵器・土師器などがまとまって出土した。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・高杯・製塙土器などが出上している。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SK4019

5区第4遺構面で検出された住居跡の密集部分の西寄りに位置する。平面形は長方形を呈する。出土遺物には須恵器・土師器があるが、全体形状をとどめるものは少ない。古墳時代後期に属する。

出土遺物（第278図）

出土遺物には須恵器・土師器があるが、全体形状をとどめるものは少ない。時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。

SP（柱穴・小穴）

SPとしたものは少なく、概ね単独で散見する。

SP4123

円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。出土遺物等から古墳時代後期頃のものと考えられる。

出土遺物（第278図）

出土遺物は土師器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。10は弥生土器甌の底部と思われる。

SX（性格不明遺構）

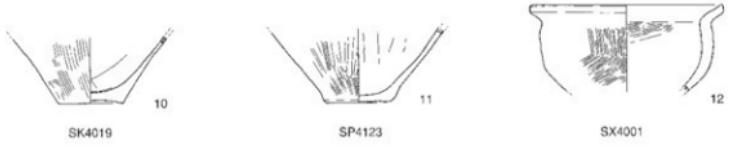
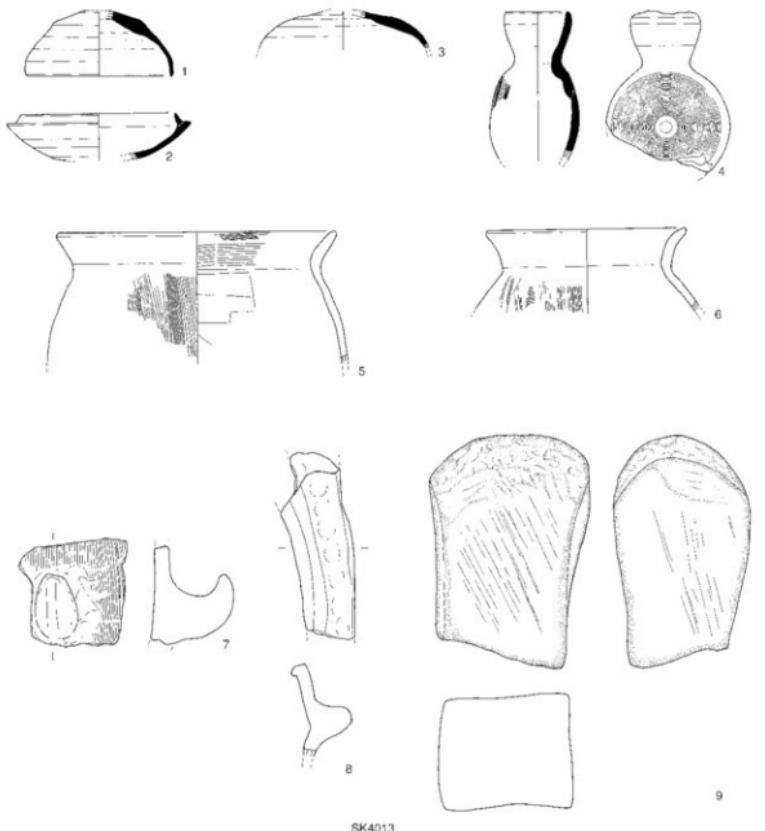
性格不明および用途不明遺構についてSXとして呼称した。検出したものは少ない。

SX4001

住居跡の密集部分の中央部に位置する。SB4012の住居と重複関係にある。平面形は不定形である。出土遺物では須恵器・土師器などが出土した。古墳時代後期に属する。

出土遺物（第278図）

須恵器・土師器などが出土している。詳細な形状は不明であるが、時期的には古墳時代後期初頭頃と思われる。



第278図 SK・SP・SX 出土遺物 (SK4013・SK4019・SP4123・SX4001)

(5) 第5遺構面（弥生時代後期～古墳時代前期）

第5遺構面（弥生時代終末期～古墳時代初頭：3世紀末頃）

第4遺構面と同様、当初の試掘調査段階では未確認であった想定外の遺構面である。古墳時代前期以降のものと判断される。主に調査区西半でその拡がりが確認された。特に調査区西側に所在する寺山周辺において遺構密度が高くなる傾向がみられ、古墳時代後期の堅穴住居跡が密集して検出された。

また東肩については、SR4001以東にあるさらに後世の流路によって切られているため、古墳時代段階での幅は不明である。

第5遺構面は、第4遺構面の旧河道であるSR4001の西肩によって削半され、第5遺構面の住居の一部を切っている。第4遺構面と比較して、SR4001自然流路に切られる分だけさらにせまい範囲での遺存である。第4遺構面の住居とはほぼ重複するような位置で堅穴住居が20軒検出された。住居は隅丸方形の平面プランで、一辺が4m前後と第4遺構面の場合と比較してやや小さい。柱穴は明瞭に識別できるものの、炉については検出できなかつたものが多い。貼床は第4遺構面検出の住居跡に比べ不明瞭であり、構築されていないものも多くみられる。遺構上面は、やはり削半を受けており、20～40cmの深度を有する。埋土はベースよりもわずかに暗灰色を呈し粘性もあり、第4遺構面よりは識別は容易であった。住居内の遺物は非常に少なく、多くは持ち出され、あるいは隣接する自然流路内に廃棄されたものと推測される。土器の年代からみて、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての幅がある。

出土遺構（第18図）

SR（自然流路）

調査区西側の「寺山」に近接する地点において確認された。SR4001をトレースする。第2遺構面で検出された大溝SD2001は、この旧河道（流路）を踏襲したかたちで構築されている。

SR5001（自然流路）（第18・279・280図）

SR5001は4区と5区境界付近の第5遺構面において検出された旧河道である。寺山遺跡で検出された河道のうちでもっとも古い流路である。南北方向の流路で、幅は約7mである。

堆積のうち下位の砂礫層からは、粒子のサイズが均一ではなく、大きさにばらつきが目立つ等、混在が著しく淘汰性の低い様子が観察された。この状況からは、砂礫は闊瀬川に由来するものではなく、遺跡の北側（下長谷）からの洪水性の堆積と見なすことができる。ただし、堆積層のうちには粘性の高いシルトや砂質の強いものなど各種がみられ、一概に北側から南側へのものと断定することも難しい。

堆積については細かく観察によって数十もの分層が可能である。先にも見たように各層位ごとに明瞭な特徴を有しており、掘削時には土器を多く含む下位の層をいくつかの層位を特徴によって大きく4つにまとめた。第1層は青灰色の粘土を含む層、第2層は自然木・枝材・種子などの有機物の集中的な堆積がみられる……、といった状況である。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・木製品がある。上記のような分層に従い、年代ごとの分離を目指したが、ごく少量の弥生時代後期の土器・古墳時代前期の土師器・古墳時代後期後半の土師器・須恵器は、年代と層序との相関関係がない出土状況であった。出土遺物の多くは西肩付近に集中してお



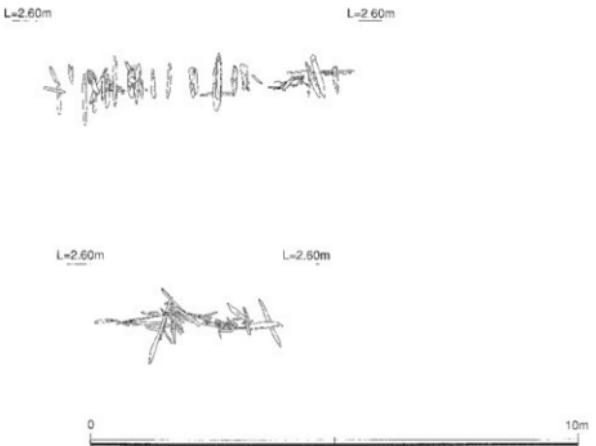
L=2.60m L=2.60m



L=2.60m L=2.60m



第279図 SR5001埋平・立面図



第280図 SR5001壙立面図

り、東寄りでは少ない。第2層では若干の木製品が出土したが、量的には少なく、位置にも規則性は認められない。全般的に廃棄された状況であるが、遺物の多い層位は堆積土の砂礫ではなく、シルトあるいは砂質土であり、廃棄位置からの二次的な移動はほとんどなかったと推定される。

堆積は地点により差異があるが、概ね堆積層の上半は黄褐色のシルト～砂質土シルト混じりで遺物はほとんど含まれない。下半は青灰色土（第1層）・有機質を大量に含む暗褐色土（第2層）・砂性の強い暗褐色土（第3層）と大別した。

検出範囲の南寄りで、杭を立て並べたしがらみ状の施設が検出された。南北方向の流れが瘤状の高まりで西と東の二つに分けられており、しがらみも二つの部位から構成されている。

一つ目は高まりから西の部分（EJ01）で、南北方向に約9mにわたる直線的な杭列がある。二方向の杭を向かい合わせに斜めに打ち込むことで合掌組みとする。この合掌組の内側には横方向の材を組み合わせる。横材でもっとも大きなものは長さ130cmあまり、幅25cmの板材で、住居などの壁材を転用したものと推定され、この材の部分が西側の中心部分と考えられる。EJ01では合掌組の東西両側の傾斜面に植物繊維を用いた網代状の括がりが数カ所で認められた。アシなどの茎を束ねたもので、東ごとに方向を斜めに進えたものを何重にも重ねており、土囊のように上留めの役割を果たしていたのであろう。

東側の部分（EJ02）は杭を垂直方向に打ち込んでおり、弧状を描く杭列で延長は残存部で約6mである。横方向の材も認められるが、西側部分ほど明瞭な構造をなさない。

西側・東側いずれとも杭に用いているのは、二次利用品が主体を占める。形態からみて転用前は住居

の柱材・垂木・横材などであり、倒り込みなどが観察できる。丸太材を半裁後に一方の端部を周囲から削った工程が判明する杭の接合事例がある。

出土遺物としては須恵器・土師器などの土器を中心で木製品はみられず、SR4001ほどの出土量はない。古墳時代前期にさかのほるもののが少ないものの含まれ、ほとんどは後期に下るものである。掘削單位としての層序は遺物の年代は分離できない。

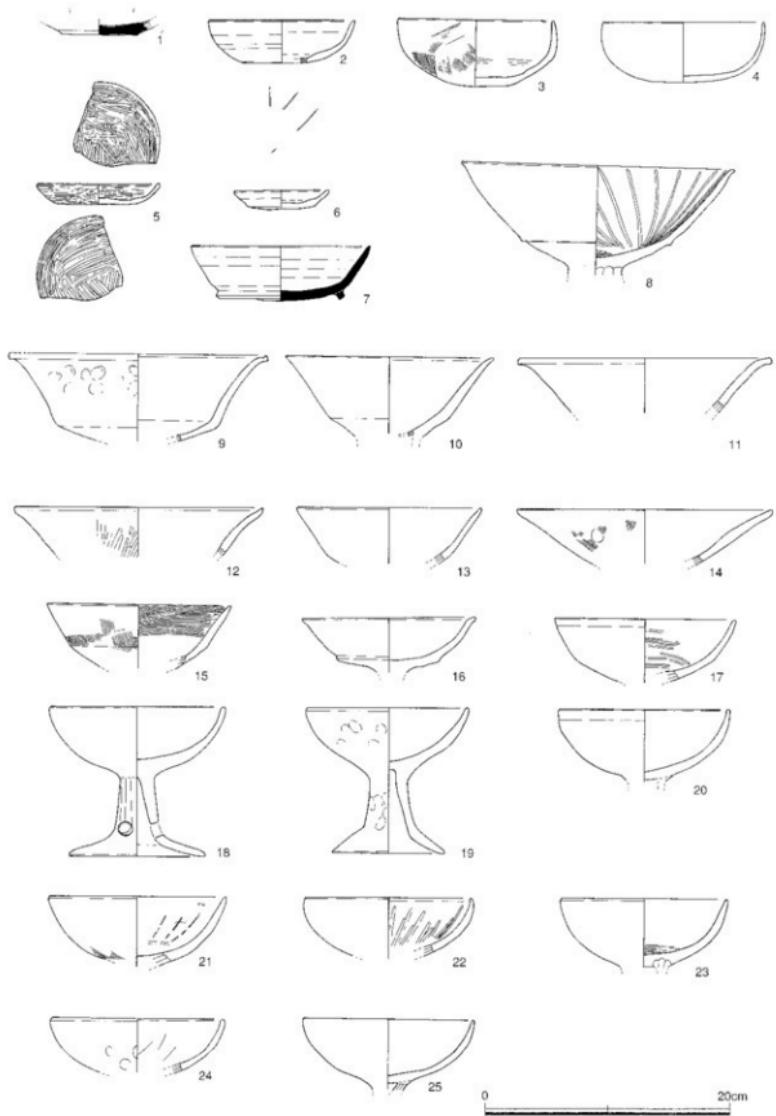
掘削第3層からは貝殻が出土した。分量的にさほど多くなく、貝のほとんどが膜状に薄く残るという遺存状態であった。肉眼のみによる観察では、二枚貝ではハマグリ・マガキ・ハイガイなどが、巻貝ではヘナタリがみられる。海水産の比率が高く、出土体位からみて、自然状態ではなく、人間が食用などに利用した後に廃棄した可能性が高い。

これらの施設の機能として、北側からの流れを南西方向と南東方向への流量をコントロールしていたと考えている。EJ01では横材によって流れを堰き止める構造が明らかであり、古墳時代後期での水利施設の構造として貴重な事例である。

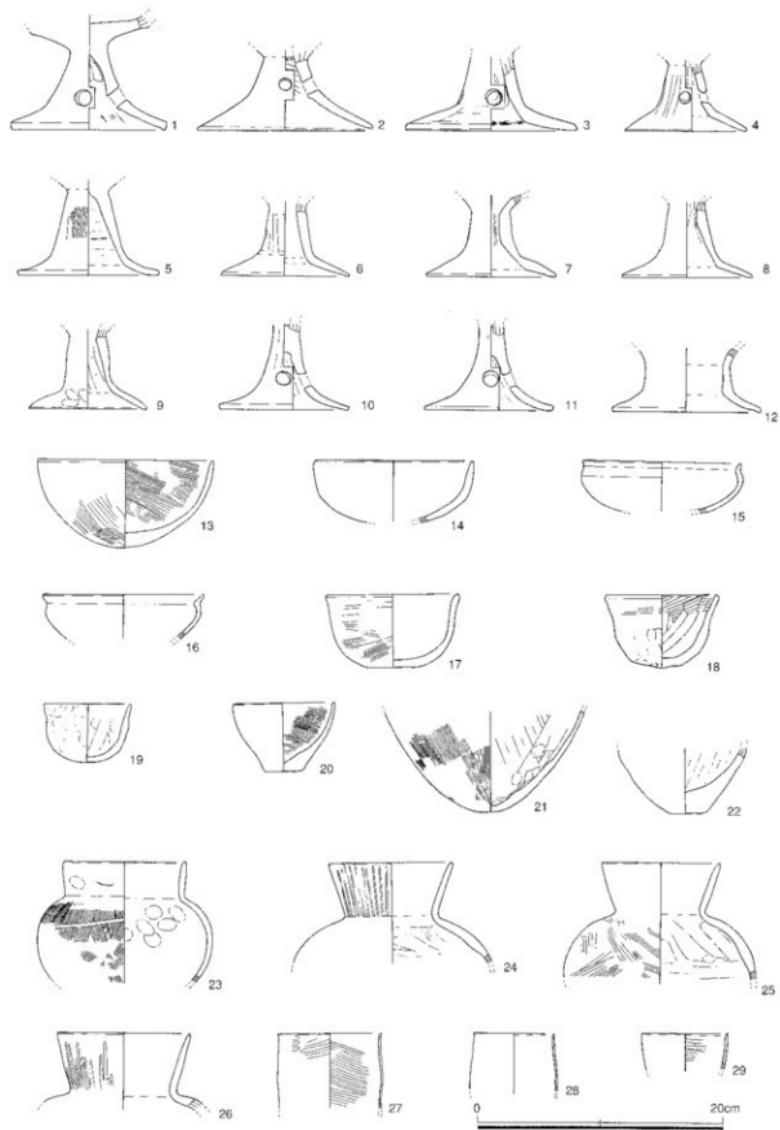
出土遺物（第281～292図）

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・木製品等がある。少量の弥生時代後期の土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期後半の土師器・須恵器は、年代と層序との相関関係がない出土状況であったため、分層による年代ごとの明確な分離はできなかった。出土遺物の多くは西肩付近に集中しており、東寄りでは少ない。

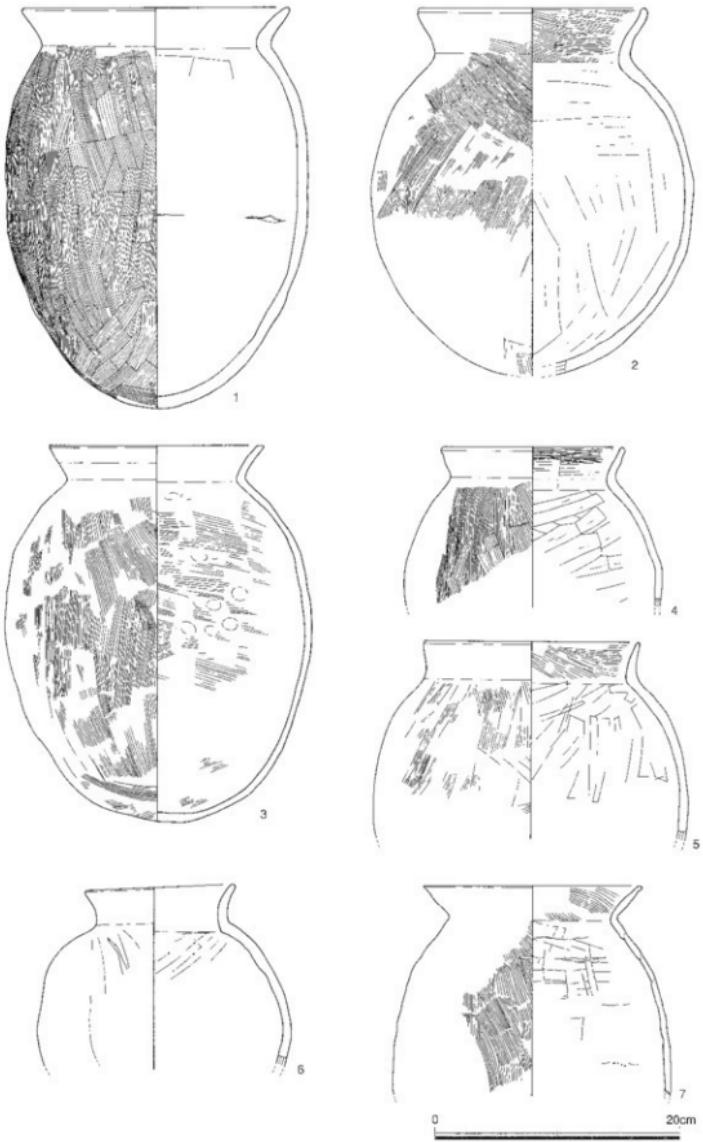
286-2は自然流路（SR5001）出土、田舟と考えられる大形の木製品。全長208.5cm、幅51.0cm、厚み11.5cmを計る。材はクリを用いる。出土時には、大きく縱方向に2片に分かれたものが重なっており、廃棄後の二次的な移動はほとんどなかったものと推定できる。取り上げ時にさらに小断片に分かれてしまったが、接合によりほぼ完形となる。本体は丸太材を半裁して成形した割竹型の材を加工したもので、底面を平坦にした後に上面をくりぬいた浅い槽形の容器で、四隅には削り残しによる把手がある（一ヵ所欠損）。田舟とされる木製品には、人が乗用して水田での作業を行う大形のものと、やや小振りで運搬を主目的とするものとがあり、守山遺跡例は後者に該当する。滋賀県服部遺跡出土のものが形態的に最も最も類似している。



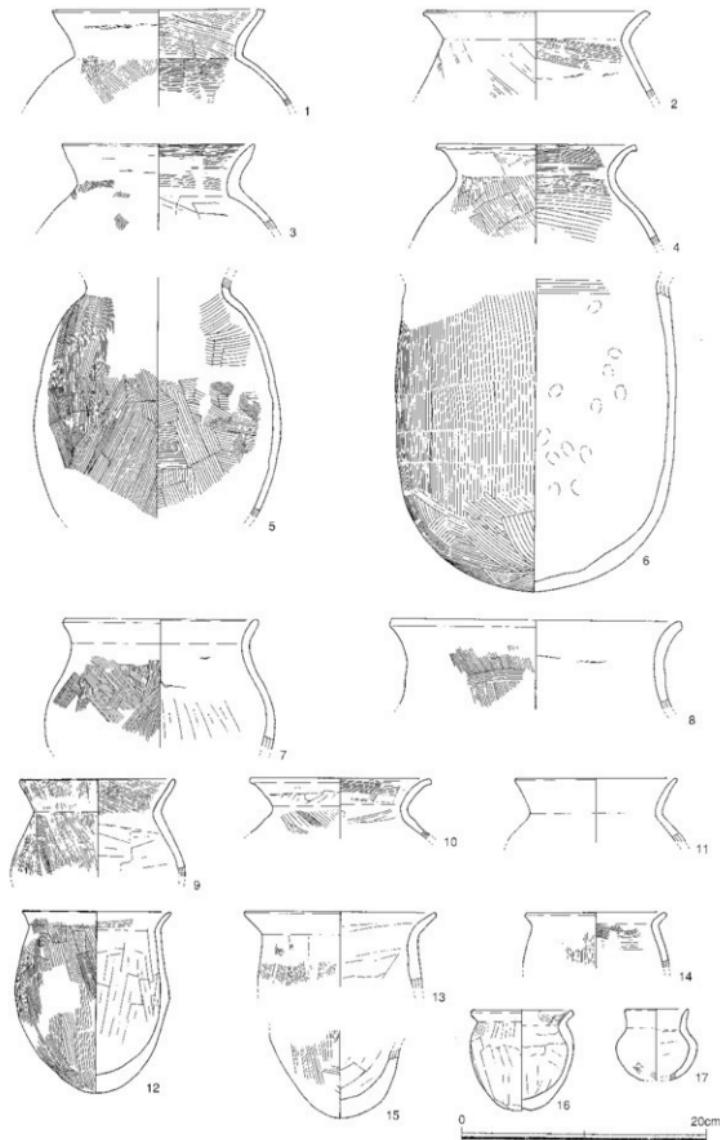
第281図 SR5001出土遺物1



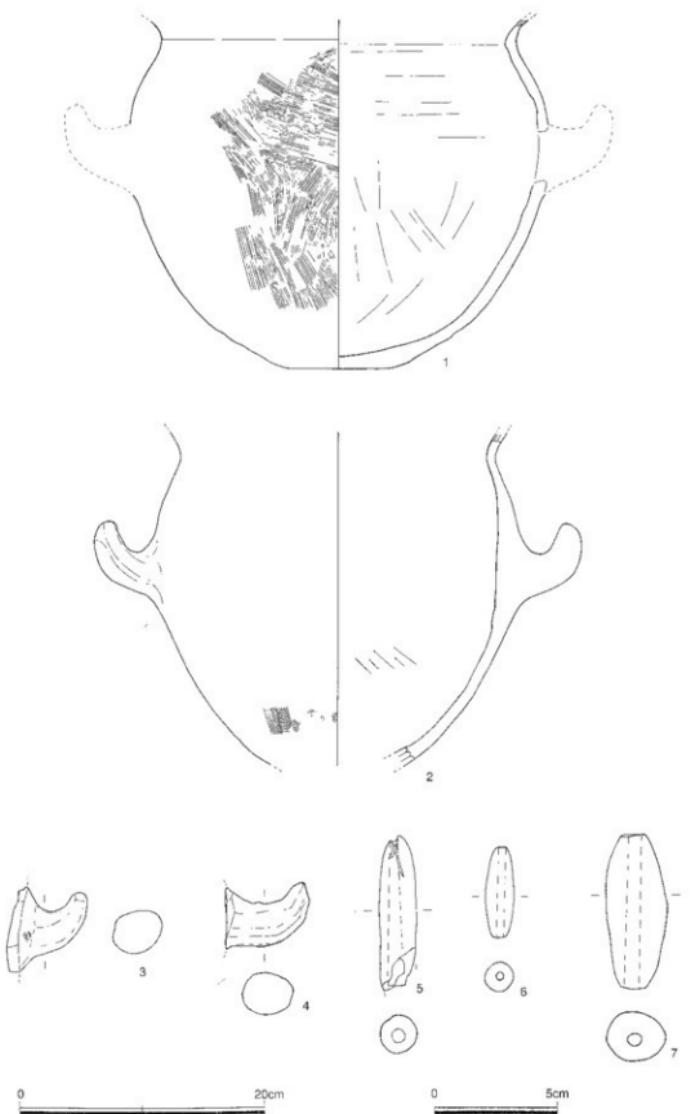
第282図 SR5001出土遺物 2



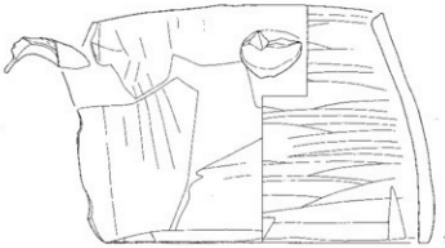
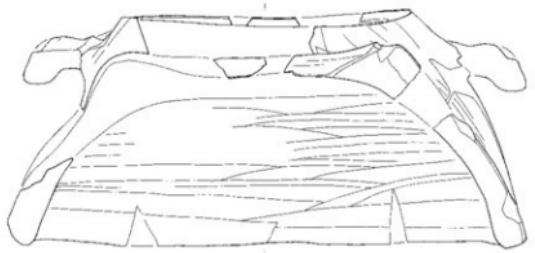
第283図 SR5001出土遺物 3



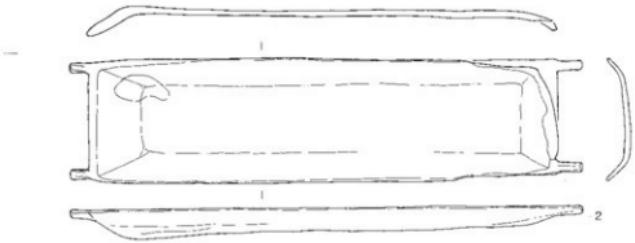
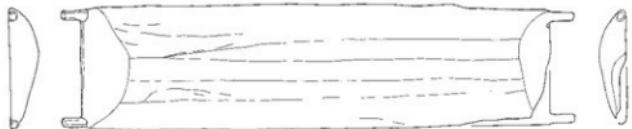
第284図 SR5001出土遺物4



第285図 SR5001出土遺物 5

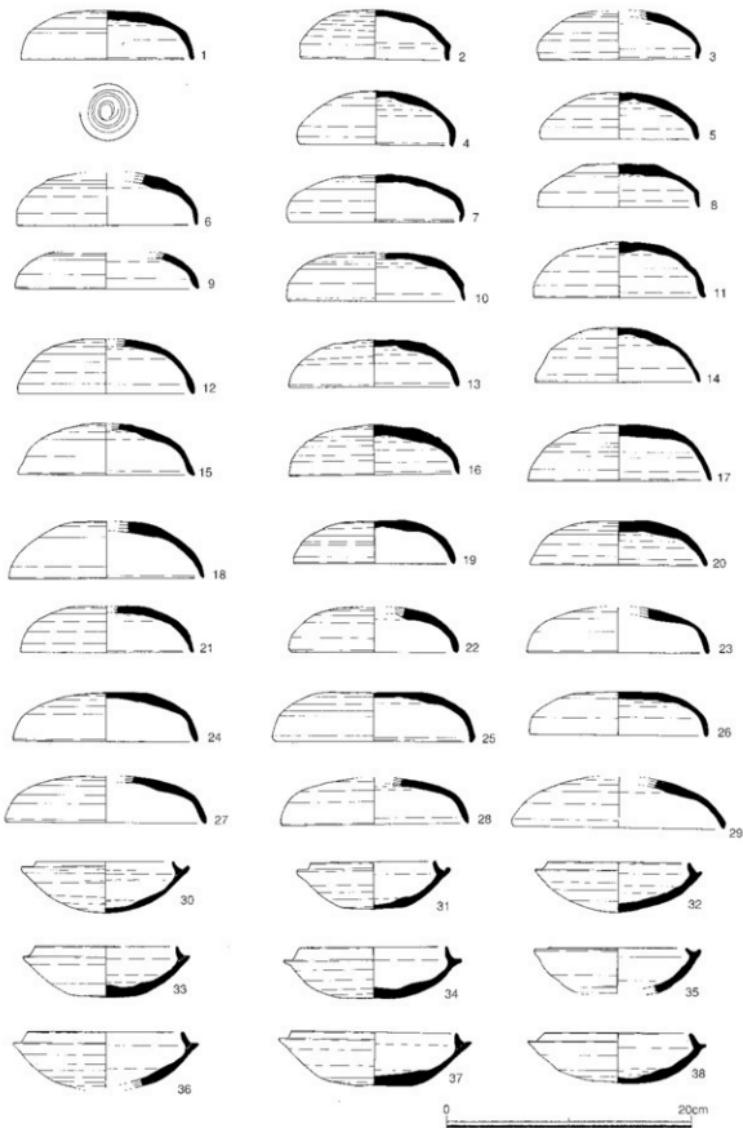


0 20cm

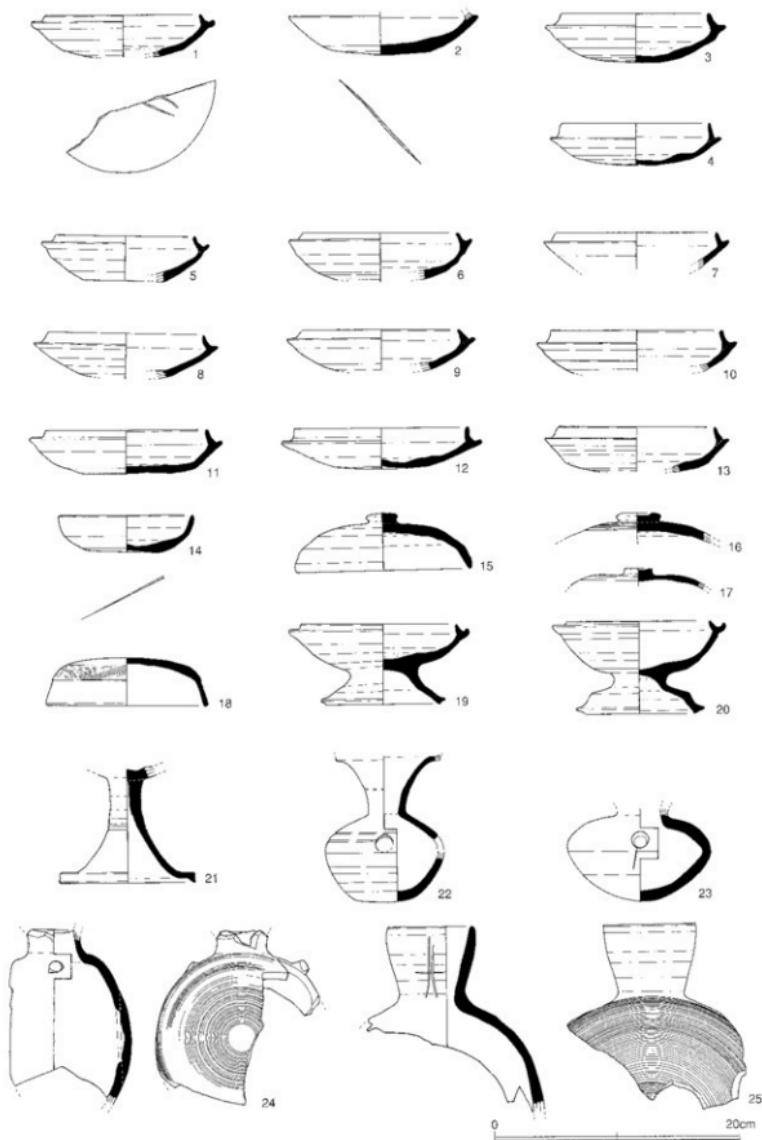


0 1m

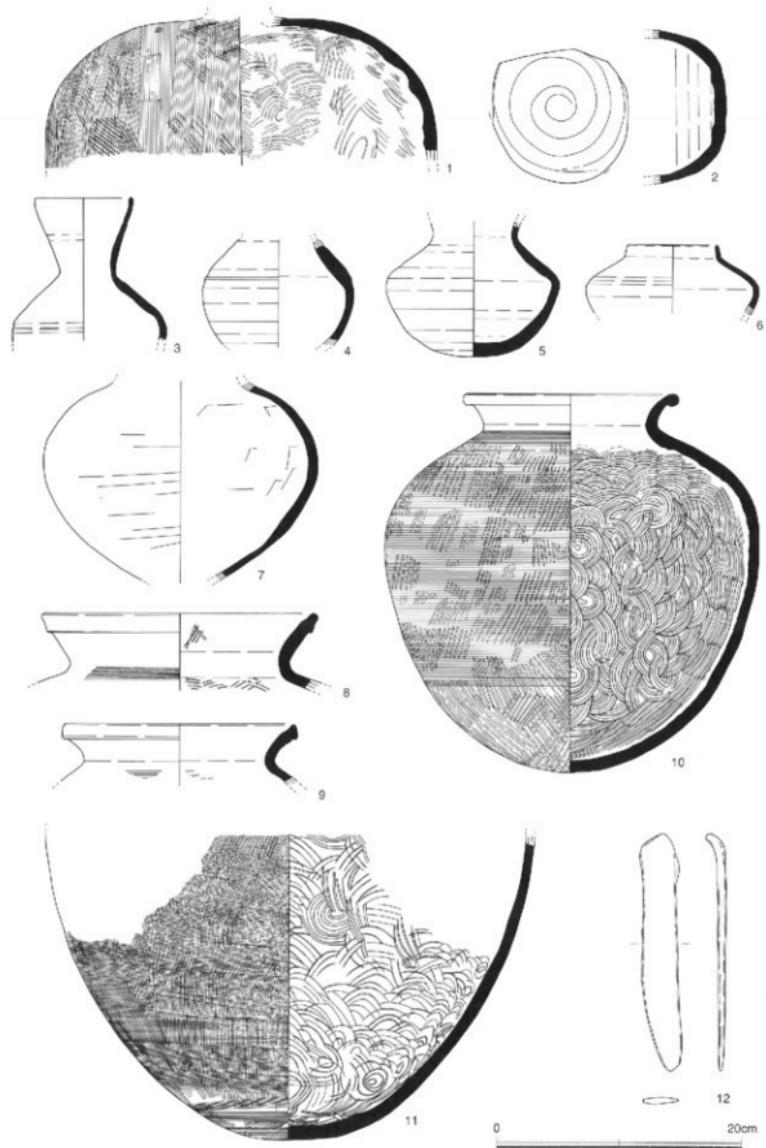
第286図 SR5001出土遺物 6



第287図 SR5001出土遺物 7



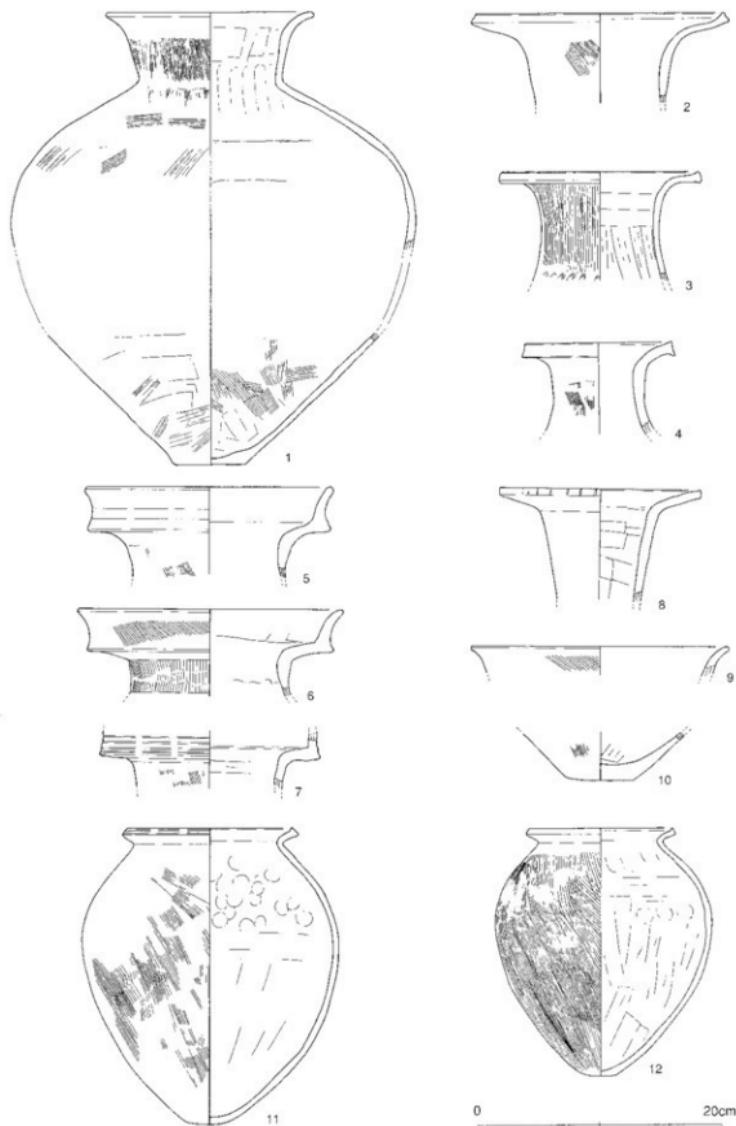
第288図 SR5001出土遺物 8



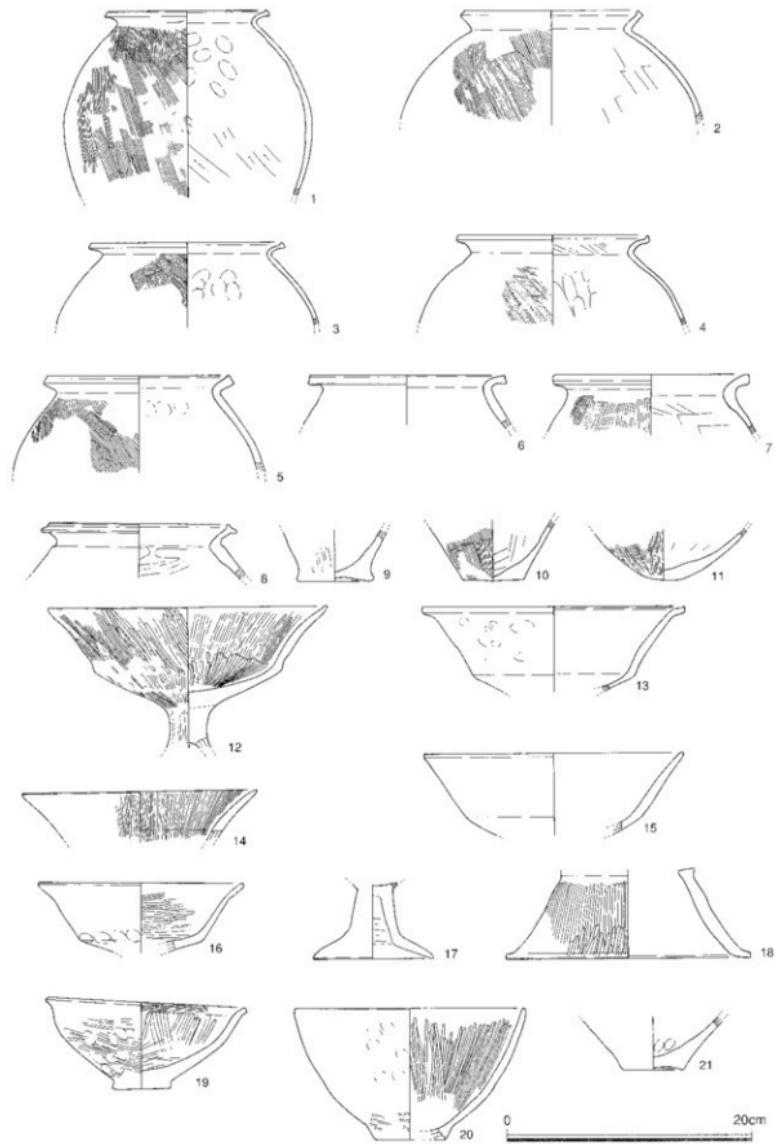
第289図 SR5001出土遺物 9



第290図 SR5001出土遺物10



第291図 SR5001出土遺物11



第292図 SR5001出土遺物12

SB（豊穴住居跡）

第4遺構面の豊穴住居跡と重複して検出された。調査区西側に所在する寺山周辺において遺構密度が高くなる傾向がみられ、流路に囲まれたかたちで古墳時代初期頃の豊穴住居跡が密集して検出された。竈は住居北側あるいは西側に構築される。

SB5001（第293図）

5区の第5遺構面ほぼ中央、G・H-17・18グリッドにおいて検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれ、2号住居と切り合う。

平面形は隅丸方形（3.76m×3.88m）で、検出面から当初の掘り込みの深さは31cmである。

床面には、貼床に相当する土層は確認されていない。

主柱穴は1基確認され、径は約20cm、深度は床面から20cmを計る。竈は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の課程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第297図）

いずれも小片であるため、國化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は甕などが出士している。時期的には古墳時代前期頃と思われる。

SB5003（第294図）

I・J-17・18、5区の第5遺構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれ、2号・4号の各住居と切り合う。

平面形は隅丸方形（3.39m×3.04m）を呈し、検出面から当初の掘り込みの深さは31cmである。

床面には、貼床に相当する土層は確認されていない。

主柱穴は確認されていない。竈は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の課程で廃棄されたとみられる。

出土遺物

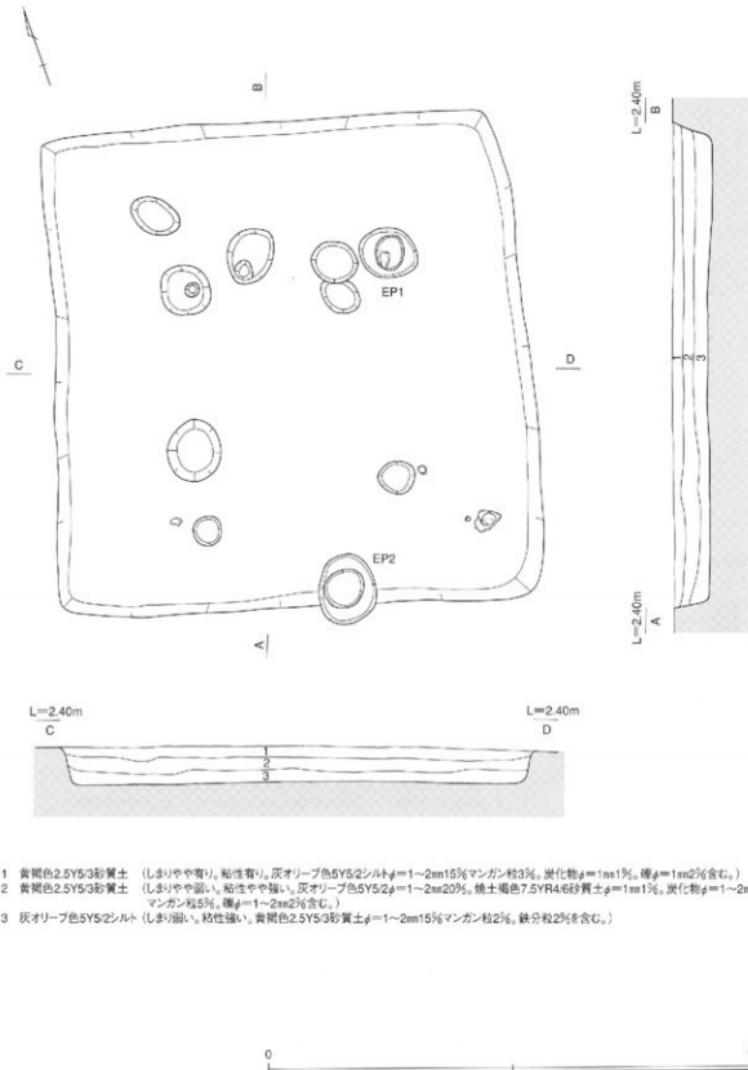
いずれも小片であるため、國化し得たものはなかった。詳細な形状は不明であるが、器種は甕などが出土している。時期的には古墳時代前期頃と思われる。

SB5004（第294図）

I・J-17・18、5区の第5遺構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれ、3号・5号の各住居と切り合う。

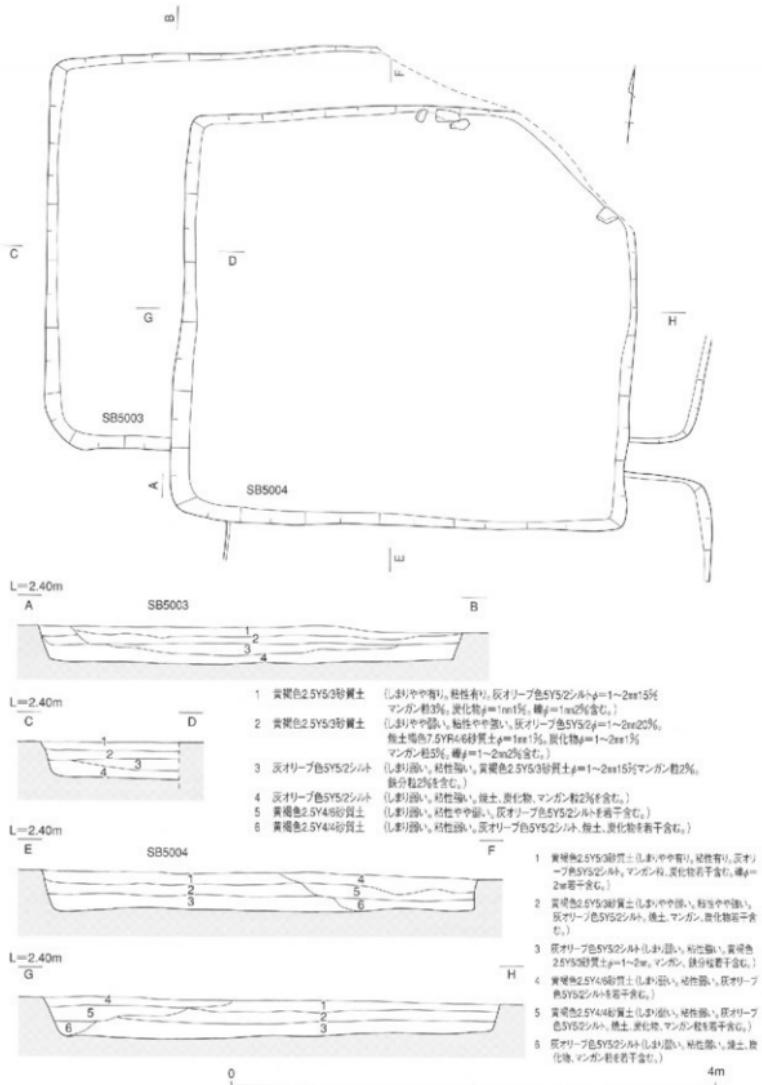
平面形は隅丸方形（一辺3.63m×3.75m）であると思われる。検出面から当初の掘り込みの深さは35cmである。

床面には、貼床に相当する層は確認されていない。主柱穴は1基確認されていない。



- 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (しまりやや有り。粘性有り。灰オーリーブ色5Y5/2シルト $\phi=1\sim2mm$ 15%マンガン粒3%。炭化物 $\phi=1mm$ 1%。鐵 $\phi=1mm$ 2%含G。)
- 2 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (しまりやや弱い。粘性やや強い。灰オーリーブ色5Y5/2 $\phi=1\sim2mm$ 20%。燒土褐色7.5YR4.6砂質土 $\phi=1mm$ 1%。炭化物 $\phi=1\sim2mm$ 1%。マンガン粒5%。鐵 $\phi=1\sim2mm$ 含む。)
- 3 灰オーリーブ色5Y5/2シルト (しまり弱い。粘性強い。黄褐色2.5Y5/3砂質土 $\phi=1\sim2mm$ 15%マンガン粒2%。鐵分粒2%を含G。)

第293図 SB5001平・断面図



第294図 SB5003・5004平・断面図

出土遺物

弥生土器が出土している。いずれも小片であるため、國化し得たものはなかった。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・鉢が出上している。時期的には弥生時代終末期頃と思われる。

SB5005（第295図）

I-18・19、5区の第5造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれ、4号・6号の各住居と切り合う。

平面形は隅丸方形（一辺3.92m×4.06m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは25cmである。床面には、貼床に相当する層は確認されていない。竈は削平されていると思われ不明である。

主柱穴は1基確認され、径は約20cm、深度は床面から20cmを計る。

出土遺物には土師器・須恵器などがある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の課程で廃棄されたとみられる。

出土遺物

いずれも小片であるため、國化し得たものはなかった。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・製塙土器などが出上している。時期的には古墳時代前期頃と思われる。

SB5006（第296図）

H・I-18・19、5区の第5造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれ、5号の各住居と切り合う。

平面形は隅丸方形（一辺3.27m×3.90m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは30cmである。床面には、貼床に相当する層は確認されていない。竈は削平されていると思われ不明である。

主柱穴は9基確認され、径は約20cm、深度は床面から12~20cmを計る。

出土遺物（第297図）

いずれも小片であるため、國化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺などが出上している。時期的には弥生時代終末期頃と思われる。

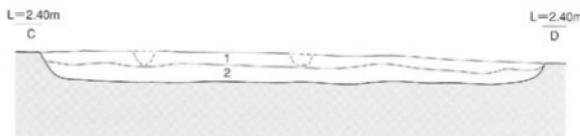
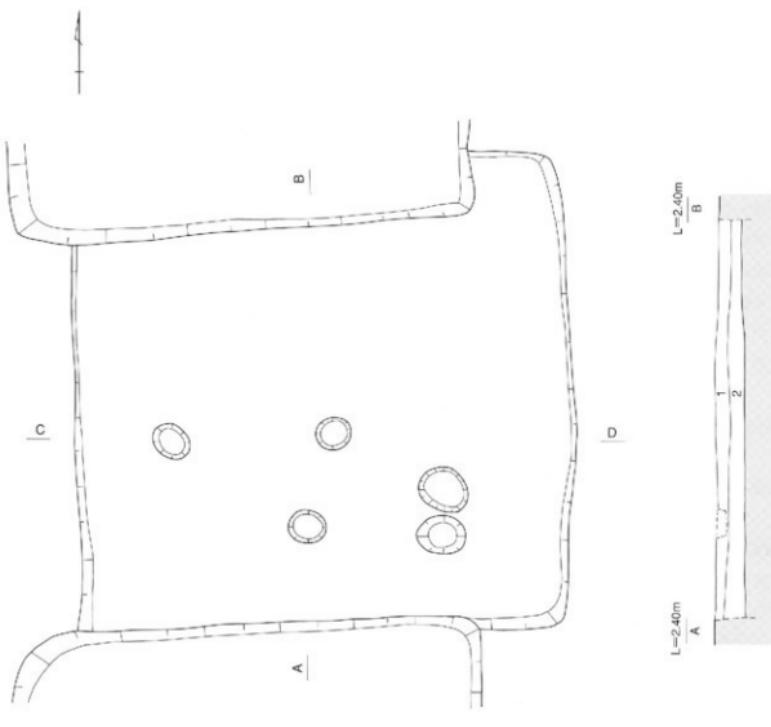
SB5007

H・I-19・20、5区の第5造構面南側において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれ、SB4027に切られる。

平面形は隅丸方形（一辺3.80m×3.52m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは5cmである。床面には、貼床に相当する層は確認されていない。竈は削平されていると思われ不明である。

主柱穴は5基確認され、径は約20cm、深度は床面から12~20cmを計る。

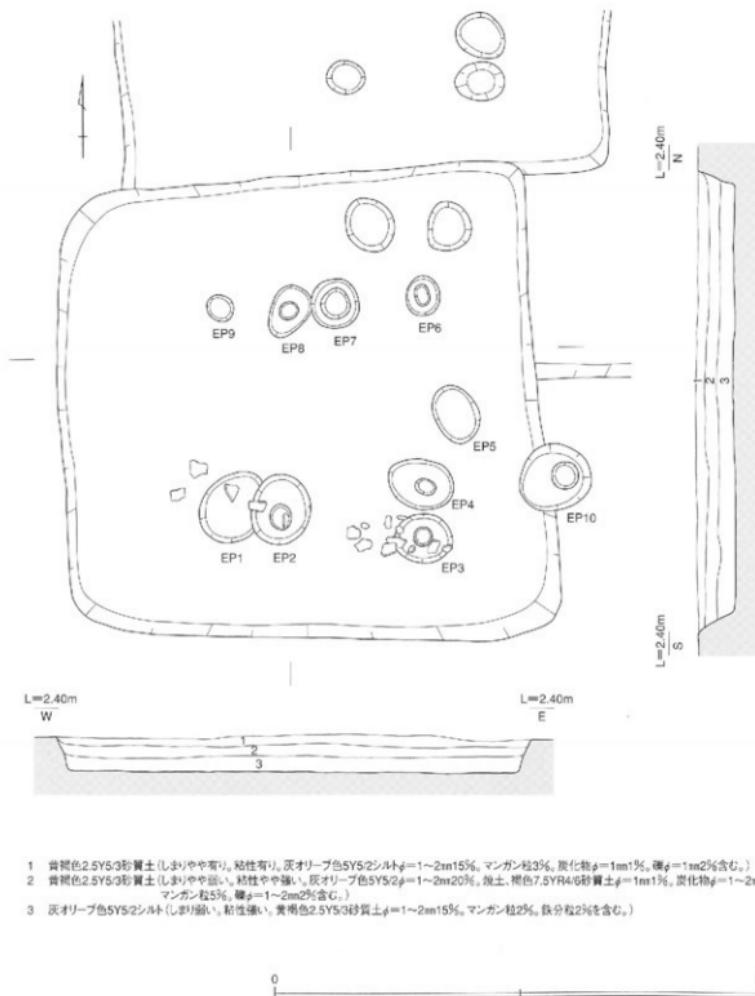
出土遺物には土師器・須恵器などがある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の課程で廃棄されたとみられる。



- 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土（じまりやや有り。粘性有り。灰オリーブ色5Y5/2シルト。マンガン、炭化物若干含む。礫φ=2mm若干含む。）
2 黄褐色2.5Y5/3砂質土（じまりやや弱い。粘性やや弱い。灰オリーブ色5Y5/2シルト。焼土、マンガン、炭化物若干含む。）

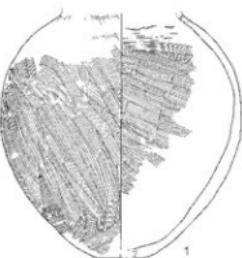


第295図 SB5005平・断面図



- 1 青褐色2.5Y5/3砂質土(しまりやや高い、粘性有り)、灰オリーブ色5Y5/2シルト $\phi=1\sim2m15\%$ 、マンガン粒3%、炭化物 $\phi=1m15\%$ 、鐵 $\phi=1m2\%$ 含む。)
- 2 青褐色2.5Y5/3砂質土(しまりやや高い、粘性やや高い)、灰オリーブ色5Y5/2 $\phi=1\sim2m20\%$ 、灰土、褐色7.5YR4/6砂質土 $\phi=1m1\%$ 、炭化物 $\phi=1\sim2m15\%$ 、マンガン粒5%、鐵 $\phi=1\sim2m2\%$ 含む。)
- 3 灰オリーブ色5Y5/2シルト(しまり高い、粘性高い)、青褐色2.5Y5/3砂質土 $\phi=1\sim2m15\%$ 、マンガン粒2%、鐵分粒2%を含む。)

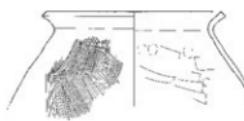
第296図 SB5006平・断面図



SB5001



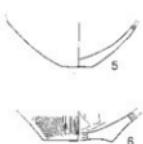
2



3



4



5



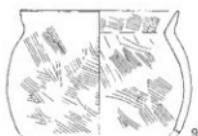
6



SB5007



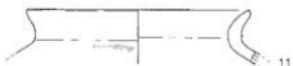
SB5008



SB5018



10



SB5019



第297圖 SB 出土遺物 (5001・5006・5007・5008・5018・5019)

出土遺物（第297図）

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・鉢などが出土している。時期的には古墳時代前期頃と思われる。

SB5008

H・I-19、平面形は隅丸方形（一辺4.33m×4.40m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは17cmである。

床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつ土（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住すべてで確認された。主柱穴は6基確認され、径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。床面には炉が確認された。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第297図）

土師器・須恵器が出土している。いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・鉢が出土している。時期的には古墳時代前期頃と思われる。8は土器製作の保持具と思われる。

SB5011（第298図）

J・K-20・21、5区の第5造構面東側において検出された。周囲には多くの遺構が密集して築かれており、12・16・19号の各住居と重複関係にある。平面形は隅丸方形（一辺4.15m×4.65m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは33cmである。

床面には、貼床に相当する層は確認されていない。主柱穴は4基確認され、径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。床面には炉が確認された。

出土遺物には弥生土器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第299図）

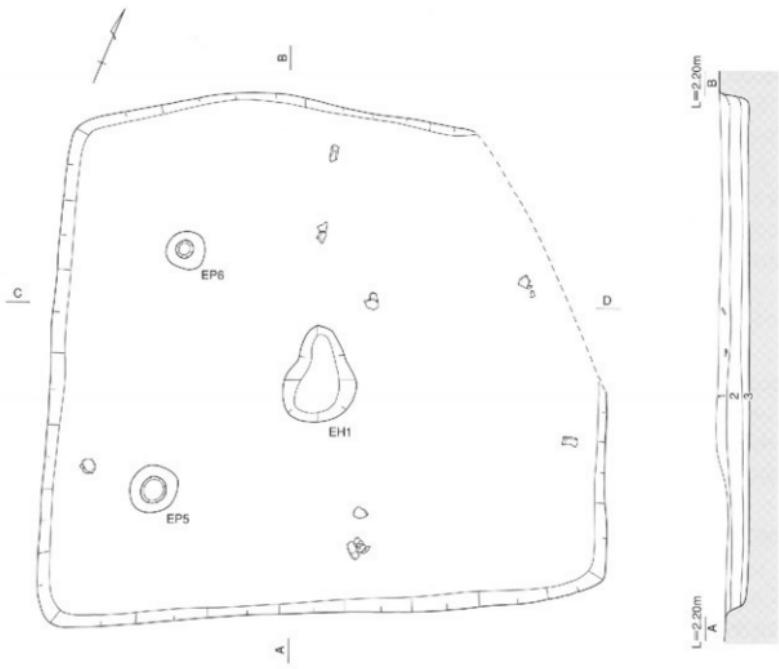
弥生土器が出土している。いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・鉢が出土している。時期的には弥生時代終末期頃と思われる。

SB5018

H・I-21・22、平面形は隅丸方形（一辺4.51m×2.66m）である。検出面から当初の掘り込みの深さは29cmである。

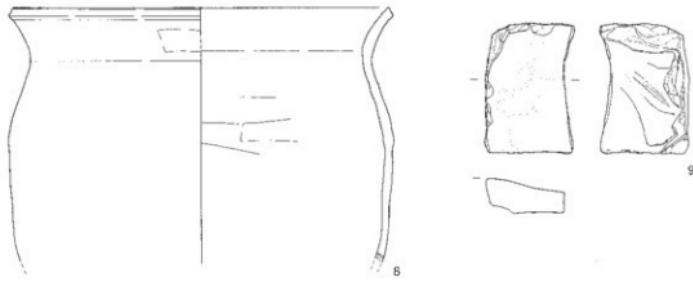
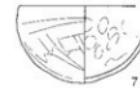
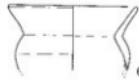
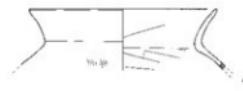
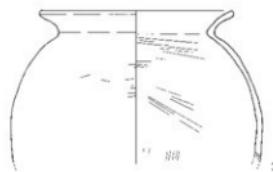
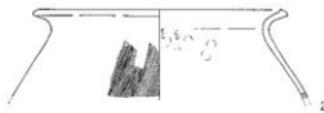
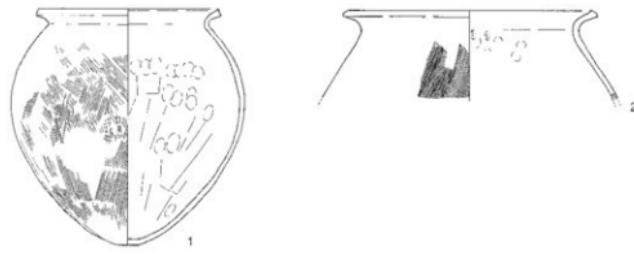
床面には、貼床は確認されていない。主柱穴は1基確認され、径は約20cm、深度は床面から20cmを計る。竈は削平されているものと思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態



- 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土(しまりやや有り。粘性有り)。灰オリーブ色5Y5/2シルト $\phi=1\sim2m15\%$ 。マンガン粒3%。炭化物 $\phi=1m1\%$ 。緑 $\phi=1m2\%$ 含む。)
- 2 黄褐色2.5Y5/3砂質土(しまりやや有り。粘性やや強い。灰オリーブ色5Y5/2 $\phi=1\sim2m20\%$ 。礫土。褐色7.5YR4/6砂質土 $\phi=1m1\%$ 。炭化物 $\phi=1\sim2m1\%$ 。マンガン粒5%。緑 $\phi=1\sim2m2\%$ 含む。)
- 3 灰オリーブ色5Y5/2シルト(しまり弱い。粘性強い。黄褐色2.5Y5/3砂質土 $\phi=1\sim2m15\%$ 。マンガン粒2%。鉄分粒2%を含む。)

第298図 SB5011平・断面図



第299図 SB5011出土遺物

で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第297図）

土師器・須恵器が出土している。いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・甕などが出士している。時期的には古墳時代前期頃と思われる。

SB5019

1・J-20、5区の第5造構面ほぼ中央において検出された。周囲には多くの造構が密集して築かれており、11・16・17・20号の各住居と重複関係にある。

平面形は隅丸方形（一辺3.90m×3.61m）である。検出面から当時の掘り込みの深さは18cmである。床面には、住居内の通常の埋土よりもやや白色を呈し、粘性をもつて（第16層）が5～7cmの厚さで敷き詰められており、これが貼床に相当する層位と考えている。貼床は、古墳時代後期の堅穴住居すべてで確認された。主柱穴は2基確認され、径は約20cm、深度は床面から12～20cmを計る。床面には炉が確認された。竈は削平されていると思われ不明である。

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは床面全体に小片として散在するものが多く、破片状態で埋没の過程で廃棄されたとみられる。

出土遺物（第297図）

土師器・須恵器が出土している。いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は壺・甕が出土している。時期的には古墳時代前期頃と思われる。

(6) 6区の遺構（03調査）

平成15年度には仮設道路としていた調査区西端「寺山」に隣接した、西および南側のL字状部分を追加し、6区として調査を実施した。この6区では、最も上位の層からを対象としたが、作業工程を考慮して第2遺構面より下位を対象とした。

遺構番号および調査区グリッド配置等は整理作業の混乱を避けるため、原則的に調査時の所見を基に使用し、'03年度として区別した。

① 第2遺構面（鎌倉時代）

第2遺構面（鎌倉時代前半：13世紀前半頃）

第2遺構面は、主に調査区西半でその拡がりが確認された。特に調査区西側に所在する寺山周辺において遺構密度が高くなる傾向がみられた。遺構としては、土坑や掘立柱建物跡と思われる多数の柱穴群の他、溝等が確認された。

遺物では圧倒的に土師質土器杯・皿の出土が多い。客体的に一部、搬入品とみられる白色系（吉備系）のものや焼成の堅密なものがあるが、胎土には結晶片岩を含んでおり、概ね在地産であると考えられる。

土師質土器を中心とする杯・皿類の底部切り離し技法は、ほとんどが回転糸切り技法を用いる。体部外面および内底面にはナデによる凹凸が調査者にみられるものもある。色調は赤褐色を呈し、焼成はやや軟質であるものが主体を占める。土師質土器単独では年代を与えることは困難であるが、共伴して出土している瓦器碗は、尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-2期に相当するものであり、土師質土器も概ね13世紀後半頃の年代が与えられよう。

丸器碗はそのほとんどが和泉型の搬入品である。碗形の中には楠葉型や西付系の須恵器碗の他、在地型と思われる腰の張った体部をもつものもみられるが、極めて少数である。時期的には尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-3～Ⅳ-1期までみられるが、体部外面のヘラミガキの省略や内面ヘラミガキの簡略化、また器高の低下などの法量小量化および高台退化の傾向がみられるため、主体となるのはⅢ-2・3期である。

その他、東播系須恵質土器（亀山・魚住）、備前焼・常滑焼・瀬戸焼などの中世陶器も出土しているが、小片が多く、完形のものはない。輸入磁器では白磁碗・水注や龍泉窯・同安窯の碗・皿などが出土している。

出土遺構（第12～14図）

SD（溝・溝状遺構）

第2遺構面においてSDとしたものは28条ある。区画あるいは利水目的のための構築と思われるが、これらの溝の多くは、不明瞭な平面プランであり、全容の把握できるものは少ない。

SD2003

調査区西側南部を東西に延びる溝状遺構である。平面プランは不明瞭である。

出土遺物（第300図）

投弾と思われる石製品が出土している。1は球形を呈し、石材は砂岩である。

SD2004

調査区西側南部を東西に延びる溝状遺構である。

出土遺物（第300図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。土錘が出土している。

SD2005

調査区西側南部を南北に延びる溝状遺構である。

出土遺物（第300図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。土錘が出土している。

SD2011

調査区西側南部を南北に延びる溝状遺構である。

出土遺物（第300図）

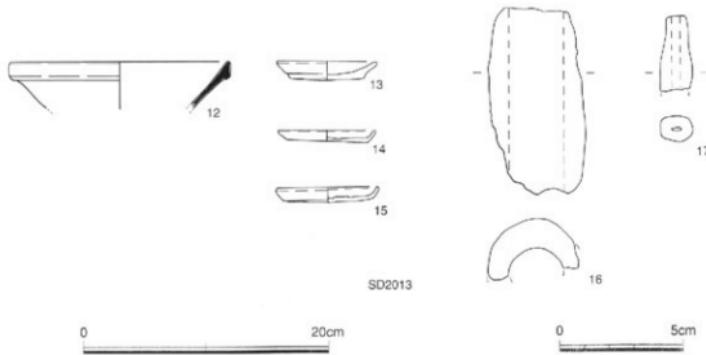
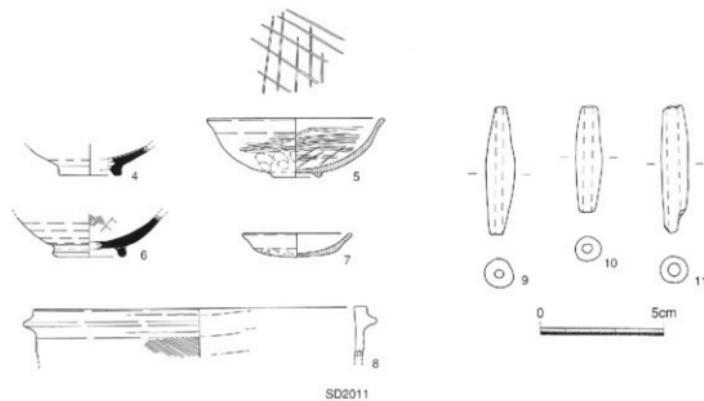
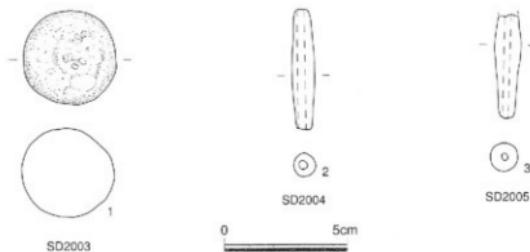
土師質土器が主体として出土している。杯・皿類の底部切り離し技法は、ほとんどが回転糸切り技法を用いる。体部外面および内底面にはナデによる凹凸が豊富にみられるものもある。色調は赤褐色を呈し、焼成はやや軟質であるものが主体を占める。土師器の杯・皿類もみられ、底部切り離し技法は回転ヘラ切りである。土師質土器単独では年代を与えることは困難であるが、共伴して出土している瓦器椀は、尾上分類の和泉型瓦器椀Ⅲ-2期に相当するものであり、土師質土器も概ね13世紀後半頃の年代が与えられよう。

瓦器椀はそのほとんどが和泉型の搬入品であるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。輪形の中には輪葉型や西村系の須恵器椀の他、在地型と思われる腰の張った体部をもつものもみられるが、極めて少数である。時期的には尾上分類の和泉型瓦器椀Ⅱ-3～Ⅳ-1期までみられるが、体部外面のヘラミガキの省略や内面ヘラミガキの簡略化、また器高の低下などの法量小型化および高台退化の傾向がみられるため、主体となるのはⅢ-2期である。

その他、東播系須恵質土器（亀山・魚住）などの中世陶器も出土しているが、小片が多く、完形のものはない。輸入器では白磁碗や龍泉窯・同安窯の碗・皿などが出土している。

SD2013

調査区西側南部を南北に延びる溝状遺構である。



第300図 SD 出土遺物 (2003・2004・2005・2011・2013)

出土遺物（第300回）

土師質土器が主体として出土している。杯・皿類の底部切り離し技法は、ほとんどが回転糸切り技法を用いる。体部外面および内底面にはナデによる凹凸が顕著にみられるものもある。色調は赤褐色を呈し、焼成はやや軟質であるものが主体を占める。土師器の杯・皿類もみられ、底部切り離し技法は回転ヘラ切りである。土師質土器単独では年代を与えることは困難であるが、共伴して出土している瓦器椀は、尾上分類の和泉型瓦器椀Ⅲ・2期に相当するものであり、土師質土器も概ね13世紀後半頃の年代が与えられよう。

瓦器椀はそのほとんどが和泉型の搬入品であるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。時期的には尾上分類の和泉型瓦器椀Ⅱ・3～Ⅳ・1期までみられるが、体部外面のヘラミガキの省略や内面へラミガキの簡略化、また器高の低下などの法量小型化および高台退化の傾向がみられるため、主体となるのはⅢ・2期である。

その他、東播系須恵質土器（亀山・魚住）などの中世陶器も出土しているが、小片が多く、完形のものはない。輸入磁器では白磁碗や龍泉窯・同窓窯の碗・皿などが出土している。

SD2016

SD2016はSD2001に延びる溝である。古墳時代の造構面（第4造構面）で確認された旧河道SR4001の河道（流路）を踏襲したかたちで構築される。SR4001は、寺山遺跡で検出された河道のうちでもっとも古いもので、「寺山」に近接した流路である。南北方向の流路で、幅は6区の南端部分で14mである。

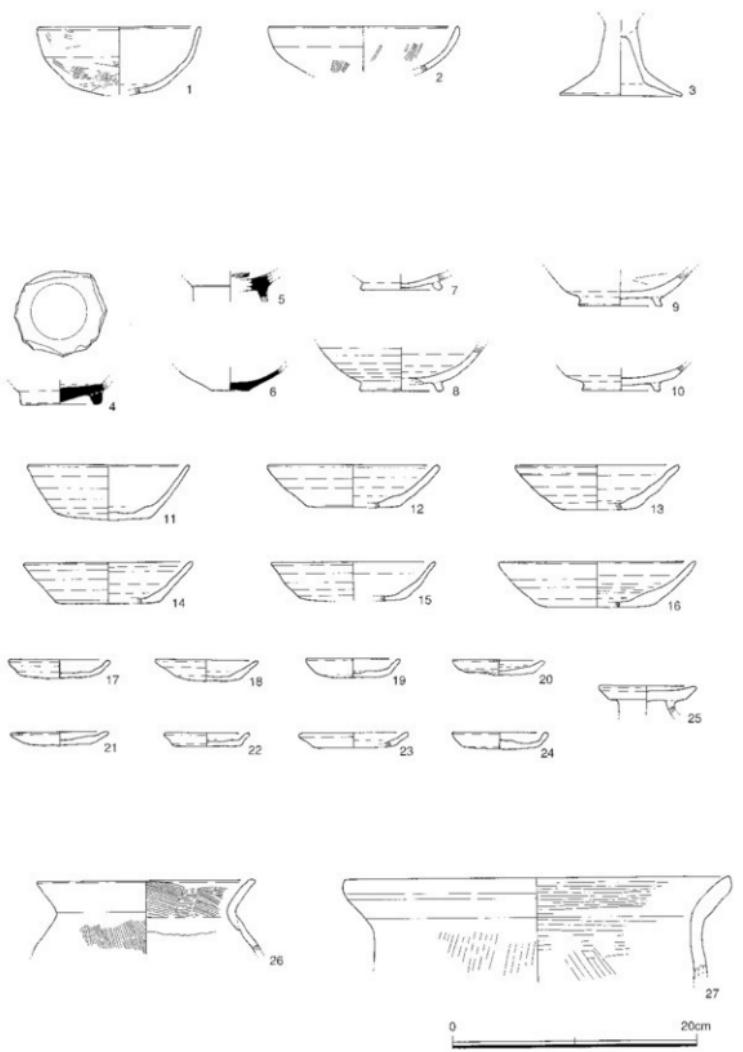
第1造構面検出段階から不明瞭ながらプランは確認されていた。5区の西・北・東を取り囲むようなかたちで検出された。北側は現・園瀬川に向かって拡がる。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・木製品がある。層位的に年代ごとの分離を目指したが、ごく少量の弥生時代後期の土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期後半の土師器・須恵器は、年代と層序との相関関係がない出土状況であった。出土遺物の多くは西肩付近に集中しており、東寄りでは少ない。第2層では若干の木製品が出土したが、量的には少なく、位置にも規則性は認められない。全般的に廃棄された状況であるが、遺物の多い層位は堆積土の砂礫ではなく、シルトあるいは砂質土であり、廃棄位置からの二次的な移動はほとんどなかったと推定される。

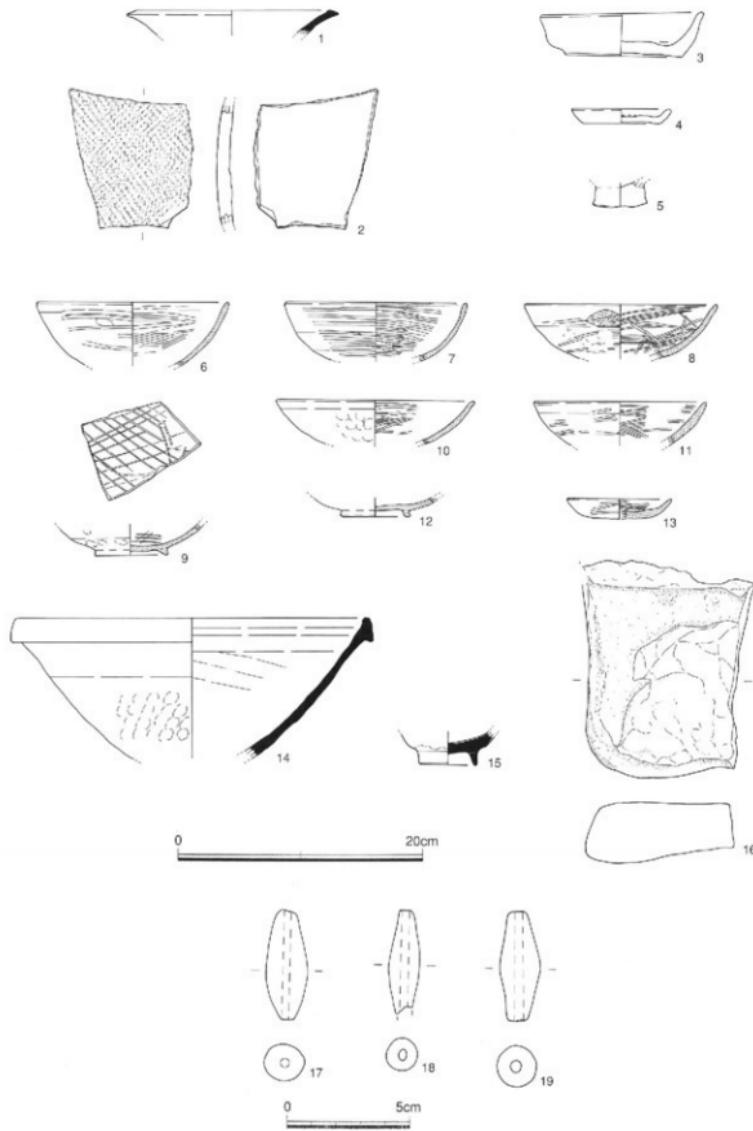
出土遺物（第301・302回）

土師質土器が主体として出土している。杯・皿類の底部切り離し技法は、ほとんどが回転糸切り技法を用いる。体部外面および内底面にはナデによる凹凸が顕著にみられるものもある。色調は赤褐色を呈し、焼成はやや軟質であるものが主体を占める。土師器の杯・皿類もみられ、底部切り離し技法は回転ヘラ切りである。内外面に赤色顔料が塗彩されるものや線刻のヘラ記号がみられるものもある。土師質土器単独では年代を与えることは困難であるが、共伴して出土している瓦器椀は、尾上分類の和泉型瓦器椀Ⅲ・2期に相当するものであり、土師質土器も概ね13世紀後半頃の年代が与えられよう。

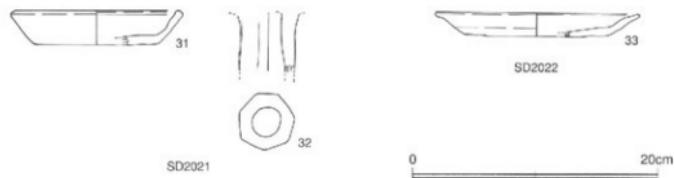
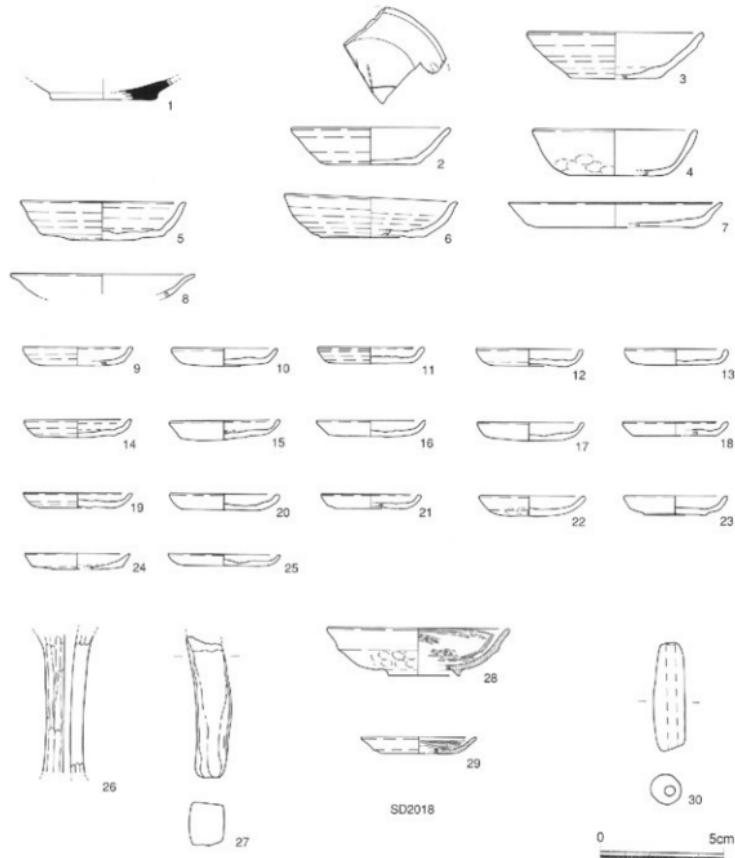
瓦器椀はそのほとんどが和泉型の搬入品であるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。楕形の中には楠葉型や西村系の須恵器椀の他、在地型と思われる腰の張った体部をもつものもみられるが、極めて少數である。時期的には尾上分類の和泉型瓦器椀Ⅱ・3～Ⅳ・1期までみられるが、体部外



第301図 SD2016出土遺物 1



第302図 SD2016出土遺物 2



第303図 SD 出土遺物 (2018・2021・2022)

面のヘラミガキの省略や内面ヘラミガキの簡略化、また器高の低下などの法量小型化および高台退化の傾向がみられるため、主体となるのはⅢ・2期である。

その他、東播系須恵質土器（亀山・魚住）などの中世陶器も出土しているが、小片が多く、完形のものはない。輸入器では白磁碗や蘿泉窯・同安窯の碗・皿などが出土している。

SD2018

調査区西側南部を東西に延びる溝状遺構である。

出土遺物（第303図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。土鍤が出土している。

SD2021

調査区西側南部を南北に延びる溝状遺構である。

出土遺物（第303図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。土師器が出土している。

SD2022

調査区西側南部を南北に延びる溝状遺構である。

出土遺物（第303図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。土師器の皿が出土している。

SK（土坑）

平面形は円形状または四角形状を呈するが、不定形なものも多くみられる。調査区西側、寺山の麓付近では土坑が密集してみられた。

SK2001

D-13、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器が出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第304図）

土師質土器が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。1・2は土師質の土鍤である。

SK2003

D-13、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器が出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第304図）

土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。3は白磁の碗で端反の口縁を呈する。5は和泉型の瓦器椀でⅢ-1期頃と思われる。

SK2018

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第304図）

土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。底部の切り離し技法は回転糸切りである。瓦器椀はそのほとんどが和泉型の搬入品である。時期的にはⅢ-2期頃であると思われる。

SK2020

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第304図）

土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。9は土師質土器の杯である。底部の切り離し技法は回転糸切りである。

SK2024

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第304図）

土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。10は土師器の高杯脚柱部である。表面は面取りがされ、断面形は七角形を呈する。

SK2025

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第304図）

土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。瓦器椀はそのほとんどが和泉型の搬入品である。時期的にはⅢ・2期頃であると思われる。14は黒色土器のA類椀である。

SK2026

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第304図）

土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。底部の切り離し技法は回転糸切りである。瓦器椀はそのほとんどが和泉型の搬入品である。時期的には体部外面のヘラミガキの省略や内面ヘラミガキの簡略化、また器高の低下などの法量小型化および高台退化の傾向がみられるため、Ⅲ・2期頃であると思われる。

SK2027

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第304図）

土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SK2031

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第305図）

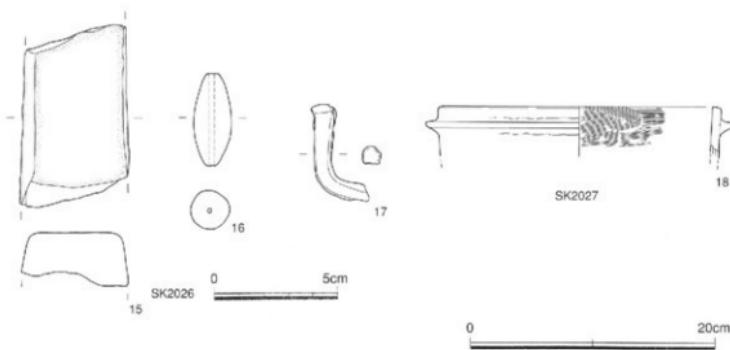
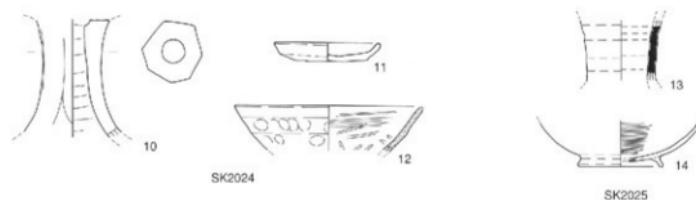
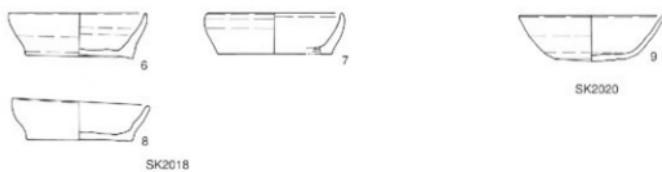
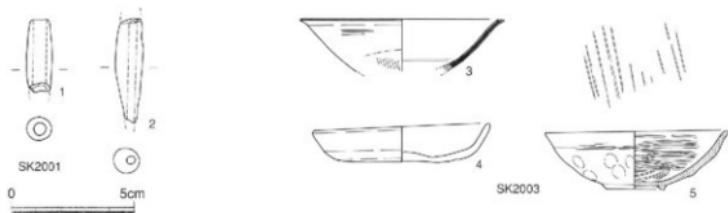
土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。1は土師器の杯である。直線的に外方に延びる体部をもつ。器壁は厚い。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。

SK2036

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第305図）

土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。底部の切り離し技法は回転糸切りである。瓦器椀はそのほとんどが和泉型の搬入品である。時期的には体部外面の



第304図 SK 出土遺物 (2001・2003・2018・2020・2024・2025・2026・2027)

ヘラミガキの省略や内面ヘラミガキの簡略化、また器高の低下などの法量小型化および高台退化の傾向がみられるため、Ⅲ-2期頃であると思われる。

SK2045

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第305図）

土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。土師質土器の杯・皿類の底部の切り離し技法は回転糸切りである。瓦器碗はそのほとんどが和泉型の撤入品である。時期的には体部外面のヘラミガキの省略や内面ヘラミガキの簡略化、また器高の低下などの法量小型化および高台退化の傾向がみられるため、Ⅲ-2期頃であると思われる。

SK2050

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第305図）

土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。6は土師器の高台付小皿である。

SK2054

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第305図）

土師質土器の杯・皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。底部の切り離し技法は回転糸切りである。10は束縛系の須恵質土器の鉢である。口縁端部の肥厚は小さく、断面形は四角形状を呈する。

SK2056

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第305図）

土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。



SK2031



SK2036



3



4



5

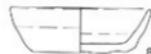


6

SK2045



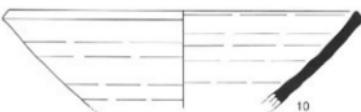
7



8



SK2051 0 5cm



SK2054



11

SK2056

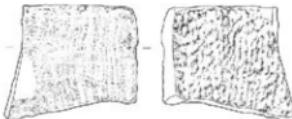


SK2060



14

SK2065



15

SK2066 0 20cm

第305図 SK 出土遺物 (2031・2036・2045・2050・2051・2054・2056・2060・2065・2066)

SK2060

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第305図）

土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SK2065

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第305図）

土師質土器の皿が多く出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。14は黒色土器 A 類の高台付の皿である。

SK2066

C-14、円形状の土坑である。遺構内からは、土師質土器・瓦器などが出土している。出土遺物等から、時期的には13世紀後半頃と思われる。

出土遺物（第305図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。15は瓦質の平瓦である。

SP（小穴・柱穴）

1800基を超える SP が出土しているが、平面プランは不明瞭であり、平面配置も雑然とした様相をみせる。明確に構築物としての並びとして捉えることは困難である。また遺物も土師質土器・瓦器等は混じるが、完形のものではなく、器形・時期の判別するものも少ない。

SP2015

F・G-16・17、楕円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。出土遺物等から、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。管状土錐が出土している。

SP2021

E・F-18・19、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師

質土器等の細片が混じる。出土遺物等から、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。土師器の杯・皿類の底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

SP2038

F・G-19・20、楕円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。造構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。出土遺物等から、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。6は土師器小皿である。外表面にヘラミガキで調整される。

SP2039

E・F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。造構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。出土遺物等から、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。7は同安窯の皿である。

SP2042

E・F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。造構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。出土遺物等から、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2043

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。造構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2046

F・G-16・17、梢円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。出土遺物等から、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2056

E・F-18・19、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。出土遺物等から、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。土師器の杯・皿類の底部の切り離しは回転ヘラ切りである。14は土師器の皿である。

SP2070

F・G-19・20、6区南側の第2遺構面の中央付近において検出された、長さ61cm、幅16cmの不整形な梢円形状の小穴である。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。平面プランは不明瞭で深度も5cmと浅い。埋土は1層で、暗オリーブ褐色のシルトに砂が混じる。

遺構内より銅錢が12枚出土した。うちの東寄りの10枚はやや蛇行しながらも一つながりであるように見える。残りの2枚はこの10枚からわずかに離れていた。錢貨は縁状のものと思われるが、縁等の繊維は残存していない。

錢種は元寶通寶（1078年初鋤）、紹聖元寶（1094年初鋤）の北宋錢が確認できるほか、明錢の永樂通寶（1408年初鋤）が含まれる。寺山遺跡の一括大量出土錢として知られた平成14年度調査SC1001には明錢が1点も含まれていない点に違いがあり、遺構の時期は15世紀代に位置づけられる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。出土した錢貨には明錢の永樂通寶（1408年初鋤）が含まれる。

SP2075

E・F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。出土遺物等から、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少

ない。

SP2080

E・F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。出土遺物等から、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2110

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2111

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。22は輪状の青銅製品である。

SP2115

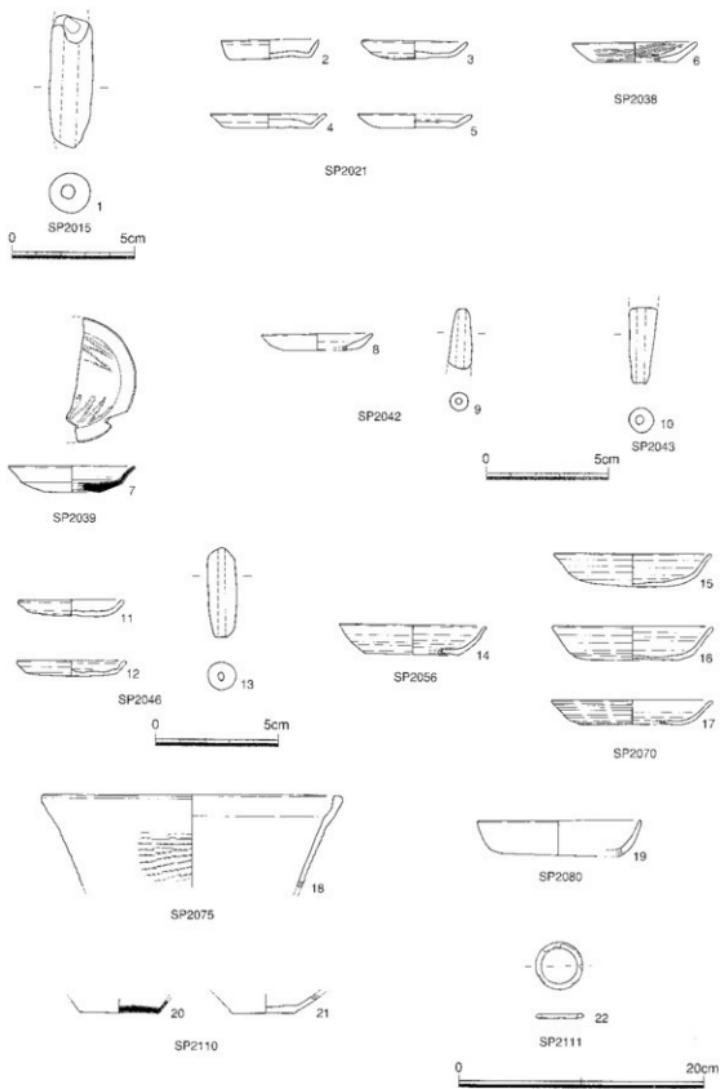
E・F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。出土遺物等から、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。

出土遺物（第307図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2138

E・F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。出土遺物等から、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。



第306図 SP 出土遺物 (2015・2021・2038・2039・2042・2043・2046・
2056・2070・2075・2080・2110・2111)

出土遺物（第307図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2148

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第307図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2150

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第307図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2172

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第307図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2192

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。10は白磁の碗である。

SP2193

E・F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師

質土器等の細片が混じる。出土遺物等から、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。

出土遺物（第307図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。12は土師器の杯である。体部は直線的に外方に延びる。

SP2200

E・F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。造構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。出土遺物等から、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。

出土遺物（第307図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2210

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。造構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第307図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2220

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。造構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第307図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2237

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。造構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2238

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第306図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。22は輪状の青銅製品である。

SP2249

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第307図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。19は土師器の杯である。体部は直線的に外方に延びる。

SP2255

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第307図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2272

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第308図）

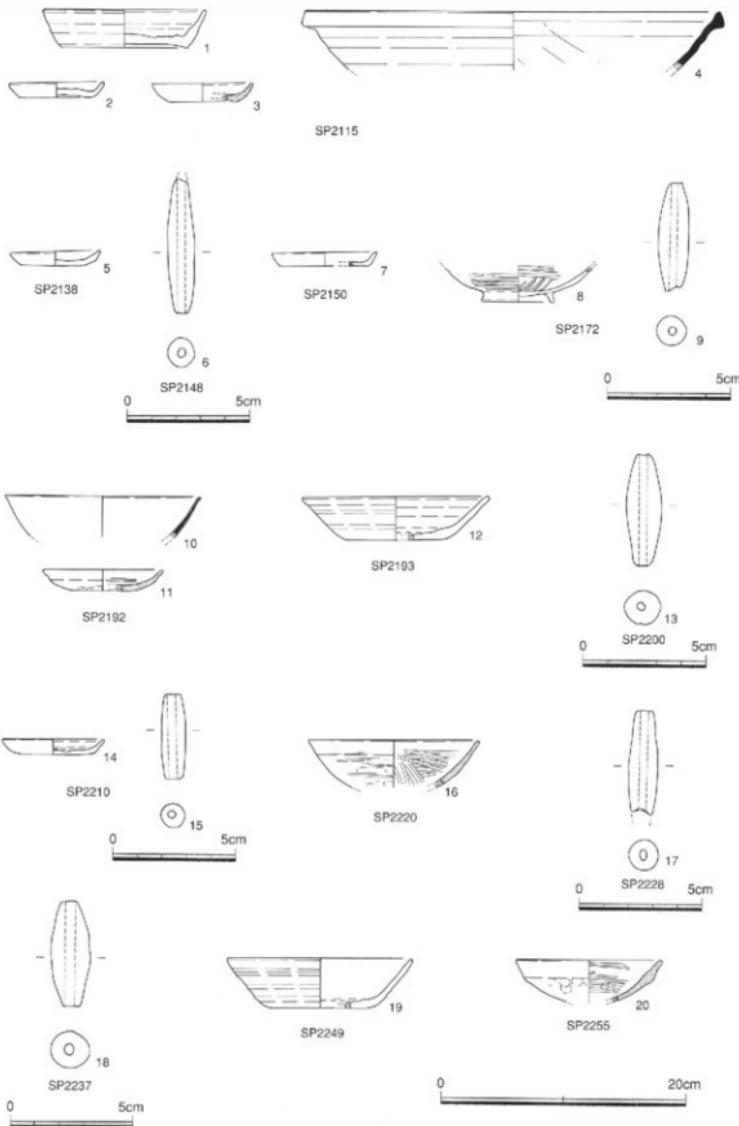
出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2282

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第308図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少



第307図 SP 出土遺物 (2115・2138・2148・2150・2172・2192・2193・
2200・2210・2220・2228・2237・2249・2255)

ない。

SP2287

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第308図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。22は輪状の青銅製品である。

SP2288

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第308図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。19は土師器の杯である。体部は直線的に外方に延びる。

SP2290

F-14・15、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第308図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。6は棒状の片岩礫である。若干の敲打痕がみられる。

SP2306

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第308図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。9は片岩の扁平な橢円礫である。若干の敲打痕がみられる。

SP2321

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第308図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2323

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第308図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2326

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第308図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2334

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第308図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2353

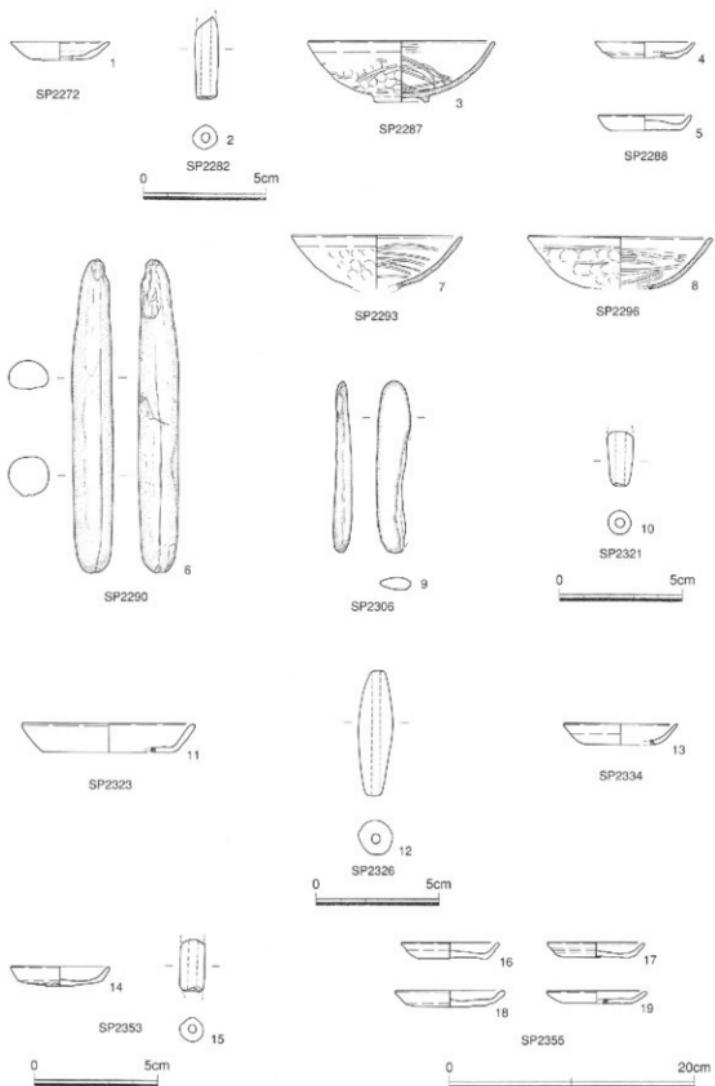
F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第308図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2355

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。



第308図 SP 出土遺物 (2272・2282・2287・2288・2293・2296・2290・
2306・2321・2323・2326・2334・2353・2355)

器等の細片が混じる。

出土遺物（第308図）

出土遺物は土師器・上師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2359

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は上師器・土師質土器・須恵質土器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2361

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は上師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。2は土師器の杯である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

SP2362

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。3は瓦器碗で和泉型瓦器碗II-3期頃と思われる。

SP2365

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2384

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。造構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。5は和泉型瓦器輪でⅢ-1期頃と思われる。

SP2407

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。造構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2416

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。造構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2432

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。造構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2445

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。造構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少

ない。9は白磁の皿である。内面に沈線が巡る。

SP2452

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2455

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2458

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2466

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2470

F-15・16、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小砾や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2484

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小蝶や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2485

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小蝶や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2495

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小蝶や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第309図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。17は和泉型瓦器楕でⅢ-1期頃と思われる。

SP2511

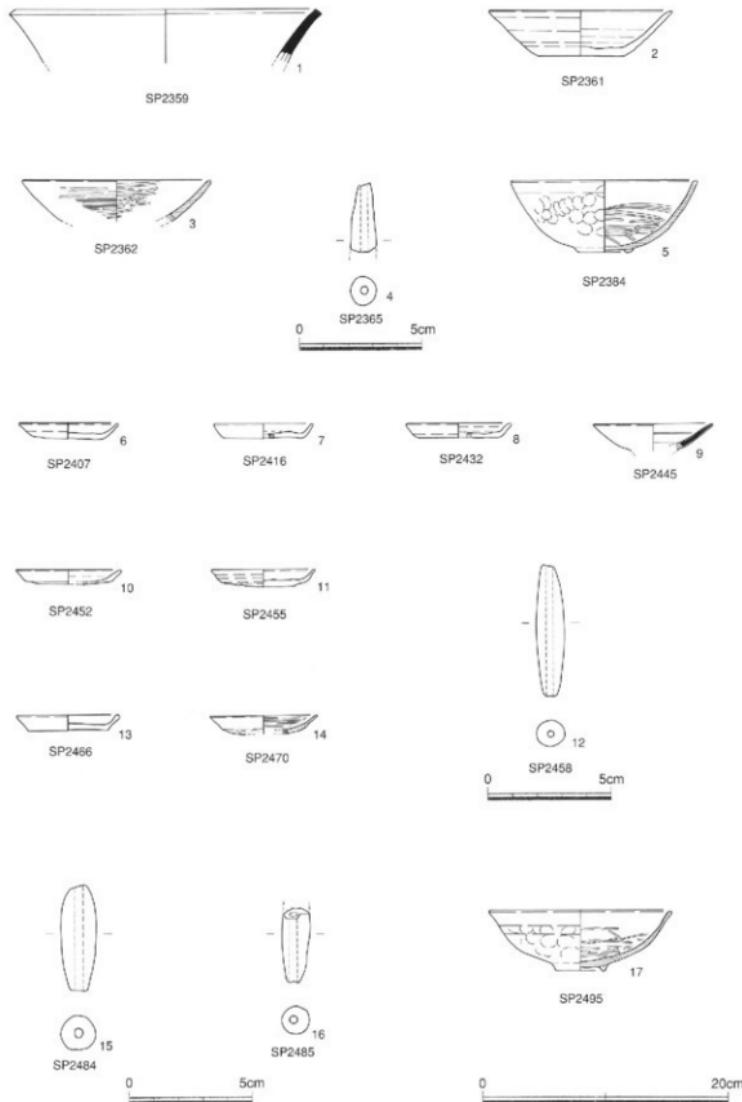
F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小蝶や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第310図）

出土遺物は磁器・土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2514

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小蝶や土師質土



第309図 SP 出土遺物 (2359・2361・2362・2365・2384・2407・2416・2432・2445・
2452・2455・2458・2466・2470・2484・2485・2495)

器等の細片が混じる。

出土遺物（第310図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2516

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第310図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2529

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第310図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2533

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第310図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2548

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第310図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2595

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第310図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2610

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第310図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。20は龍泉窯の青磁碗である。

SP2656

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第310図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2665

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第310図）

出土遺物は磁器・土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2666

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第310図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少

ない。

SP2686

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第310図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2697

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第311図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2728

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第311図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2734

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第311図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2737

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。



SP2511



SP2516



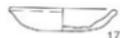
SP2529



SP2533



SP2548



SP2595



SP2610



SP2656



SP2666



SP2686

SP2665



第310図 SP 出土遺物 (2511・2514・2516・2529・2533・2548・
2595・2610・2656・2665・2666・2686)

出土遺物（第311図）

出土遺物は磁器・土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2745

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第311図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2760

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第311図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2778

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第311図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2787

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第311図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2778

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土

器等の細片が混じる。

出土遺物（第311図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2821

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第311図）

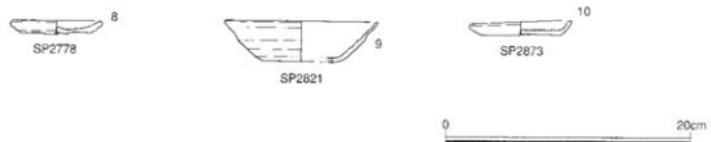
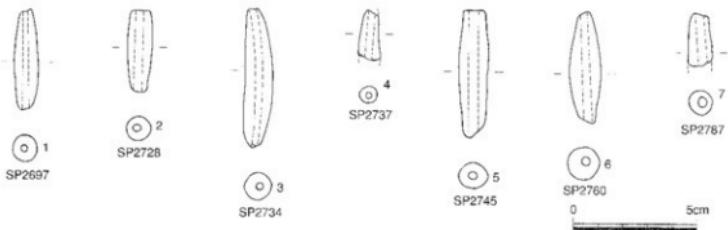
出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SP2873

F-16・17、円形状の小穴。構築物としての並びとして捉えられない。遺構内埋土は小礫や土師質土器等の細片が混じる。

出土遺物（第311図）

出土遺物は土師器・土師質土器・瓦器などがみられるが、いずれも小片であり、実測可能なものは少



第311図 SP 出土遺物 (2697・2728・2734・2737・2745・2760・2778・2787・2821・2873)

ない。

SX（性格不明遺構）

性格不明および用途不明遺構について SX として呼称した。SX の中には石組（石敷）した遺構やスラグ等の散見するものがみられるが、平面プラン等はいずれも不明瞭で定型をなさないものが多い。

SX2001

調査区西側南部で検出された遺構である。平面プランは不明瞭である。

出土遺物（第312図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。土錐が出土している。

SX2002

調査区南側を東西に延びる溝状遺構である。平面プランは不明瞭である。

出土遺物（第312図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。6 は瀬戸焼の鉢口皿である。

SX2003

調査区南側を東西に延びる溝状遺構である。平面プランは不明瞭である。

出土遺物（第312図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。6 は白磁碗の高台部を転用した円板状土製品である。周囲を円形に打ち欠く。

SX2004

調査区南側を東西に延びる溝状遺構である。平面プランは不明瞭である。

出土遺物（第312図）

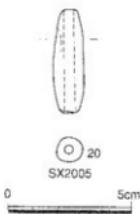
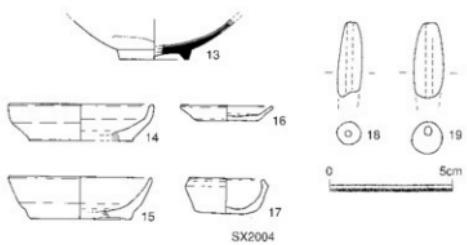
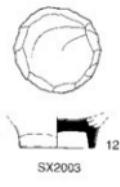
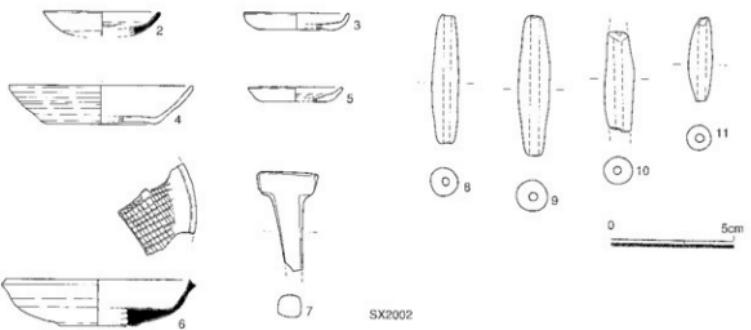
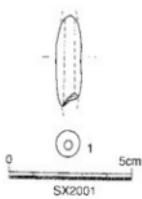
土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。

SX2005

調査区南側を東西に延びる溝状遺構である。平面プランは不明瞭である。

出土遺物（第312図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。



第312図 SX 出土遺物 (2001・2002・2003・2004・2005)

② 第3遺構面（平安時代）

第3遺構面（平安時代前半：8世紀後半～9世紀頃）

第3遺構面は、主に調査区西半でその拡がりが確認され、小穴・溝・土坑など約300基の遺構が検出された。遺構としては、溝・土坑・掘立柱建物跡と思われる柱穴群・竪穴状遺構などがみられるが、密度は粗である。

調査区は園瀬川に沿って東西に約300mと長く、地点により遺構面・遺構・遺物の相違がみられる。概して調査区西側・寺山に向かって遺構・遺物ともに増大する傾向にある。

遺構内埋土はやや不明瞭で赤褐色を呈するものが基本で、第2遺構面のものとは容易に識別できる。土師器の杯・皿などが出土しているが、出土遺物量は少ない。土師器杯・皿の内底面および外底面にはヘラ記号が線刻されるものもみられる。

出土遺構（第15・16図）

SD（溝・溝状遺構）

区画あるいは利水目的のための構築と思われるが、これらの溝の多くは、不明瞭な平面プランであり、全容の把握できるものは少ない。

SD3001

調査区西側南部を南北に延びる溝状遺構である。

出土遺物（第313図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。土師器の皿類が出土している。

SD3002

調査区西側南部を南北に延びる溝状遺構である。

出土遺物（第313図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。土師器・須恵器の皿が出土している。

SD3006

調査区西側南部を南北に延びる溝状遺構である。

出土遺物（第313図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。土師器・須恵器の皿が出土している。

SK（土坑）

平面形は円形状または四角形状を呈するが、不定形なものも多くみられる。調査区西側、守山の麓付近では土坑が密集してみられた。

SK3005

D-3 (D-13)、円形状の土坑である。遺構内からは、須恵器等が出土している。出土遺物等から、時期的には平安時代末頃と思われる。

出土遺物（第304図）

土師器・須恵器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。1は須恵器甕である。

SX（性格不明遺構）

性格不明および用途不明遺構について SX として呼称した。SX の中には石組（石敷）した遺構やスラグ等の散見するものがみられるが、平面プラン等はいずれも不明瞭で定型をなさないものが多い。

SX3002

調査区西側南部で検出された遺構である。平面プランは不明瞭である。

出土遺物（第312図）

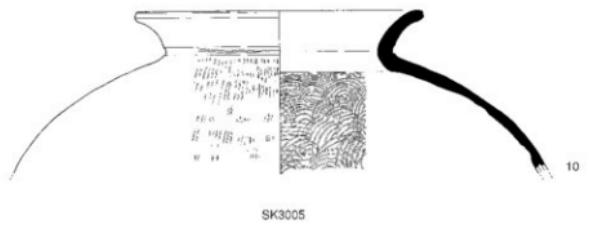
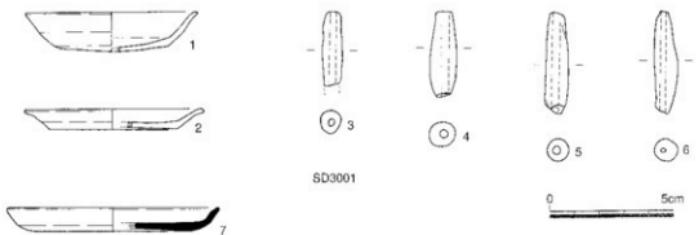
土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。須恵器・土師器の皿が出土している。

SX3006

調査区南側を東西に延びる溝状遺構である。平面プランは不明瞭である。

出土遺物（第312図）

土師質土器等が出土しているが、いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。



第313図 SD・SK・SX 出土遺物 (SD3001・3002・3006・SK3005・SX3002・3006)

(7) 包含層出土遺物

遺構外出土遺物、いわゆる包含層からも多量の遺物が出土している。

第1包含層は陶・磁器や土師質土器などの近世～中世（室町時代）を中心として遺物が出土しているが、量的には少ない。

最も多いのは第2包含層出土遺物で、中世（鎌倉時代後半期）の土師質土器を中心とする杯・皿類である。遺物では量的に圧倒的な数量を占める。特に第2遺構面の調査区中央部では、暗褐色砂質土約400m²、層厚40cmにわたり、廃棄されたと思われる土師質土器壊・皿が大量に出土した。整理中のため、実数は不確定であるが、この地点だけでコンテナ200箱、点数は200,000点を超える。

底部の切り離し技法は、確認できるもので、ほとんどが回転糸切り技法を用いる。形態的には体部が直線的に外方に延びるもの・やや内彎するもの・直立気味に上方にのびるものに大別される。小皿類についてもその傾向は基本的に変わらない。杯・皿の分類基準は口径（底径）と器高の比が大きいものを皿としたが、中間形態の曖昧なものも多くみられる。

土師質土器單独では年代を与えることは困難であるが、共伴して出土している瓦器椀は、瓦器椀の分類は尾上分類に準拠すれば、尾上分類の和泉型瓦器椀III-2～3期に相当するものであり、土師質土器も概ね13世紀後半頃の年代が与えられよう。

第3包含層は平安時代末頃の土器を中心に遺物の出土がみられる。第4・5包含層は平安末～古墳後期の遺物および少量の弥生上器が入り混じった状況である。第4・5包含層ともに出土量は少ない。

各包含層からは、それぞれ該期の遺物が出土しているが、時期的には不安定で、概して年代と層序との相関関係は希薄であり、各期入り混じった出土状況である。

第1遺構面（13世紀後半～14世紀前半頃）

銅鏡、錢貨（埋納錢）、和泉型瓦器椀・小皿、土師質土器杯・皿・小皿（底部糸切り）・鍋・釜、青・白磁など

第2遺構面（13世紀前半頃）

和泉型瓦器椀・小皿・土師質土器椀・杯・皿・小皿（底部ヘラ切りを含む）・鍋・釜、青・白磁・瓦・石鍋など

第3遺構面（9～10世紀頃）

土師器高杯・椀・皿・小皿・壺・甕、黒色土器椀・綠釉陶器など

第4遺構面（6世紀末～7世紀前半頃）

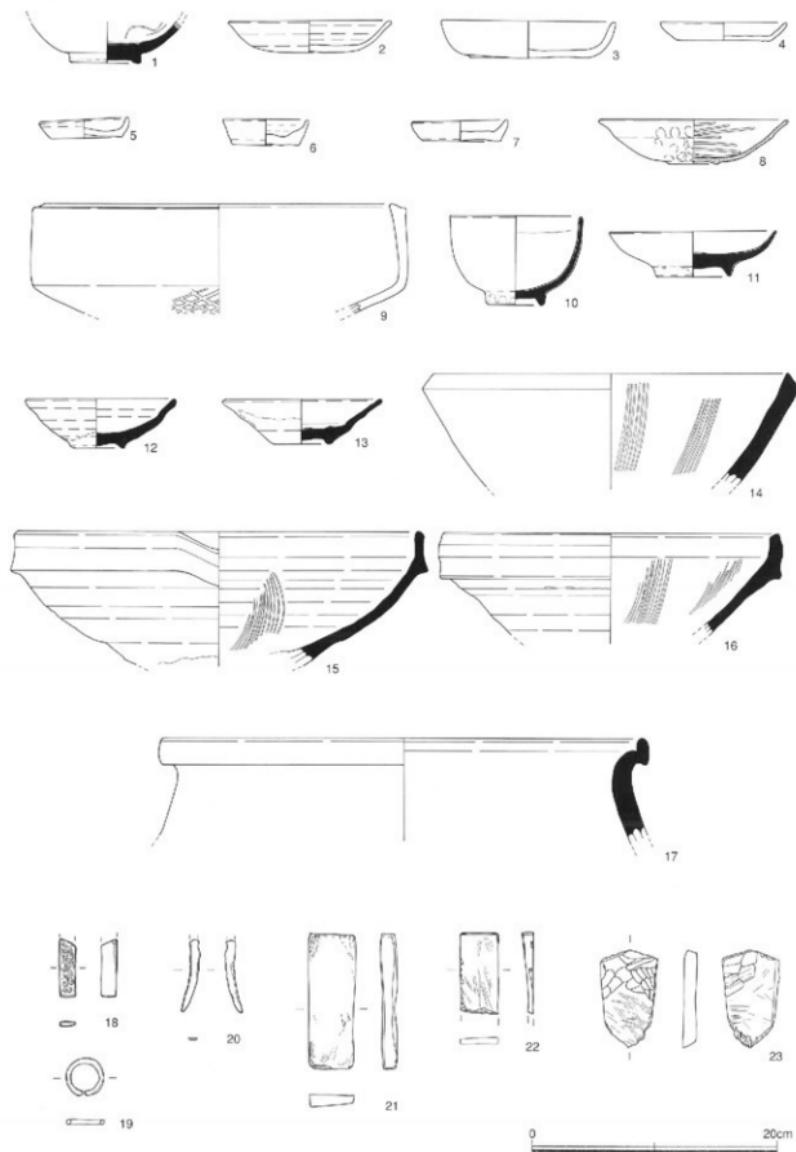
須恵器杯など

第5遺構面（弥生時代終末～古墳時代前期頃）

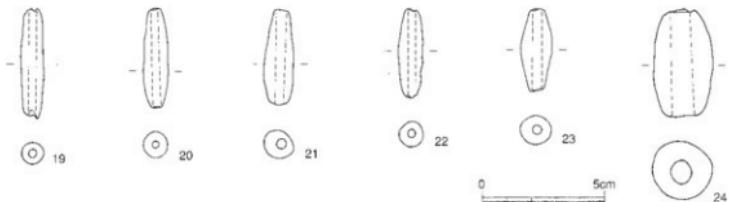
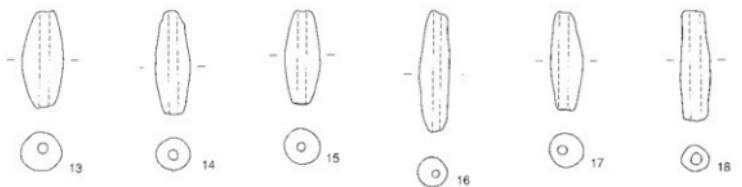
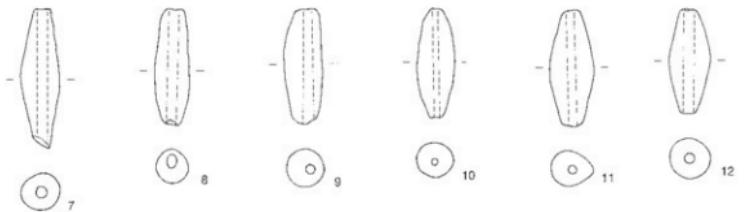
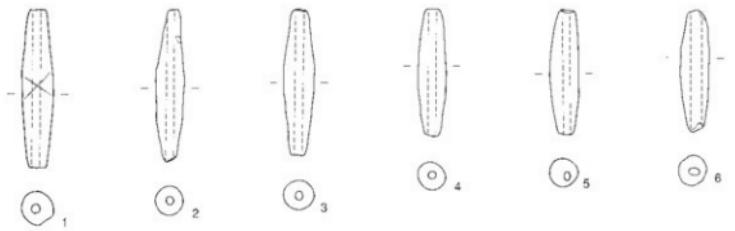
弥生土器壺など

遺物総点数 480,000点

コンテナ総数 600箱



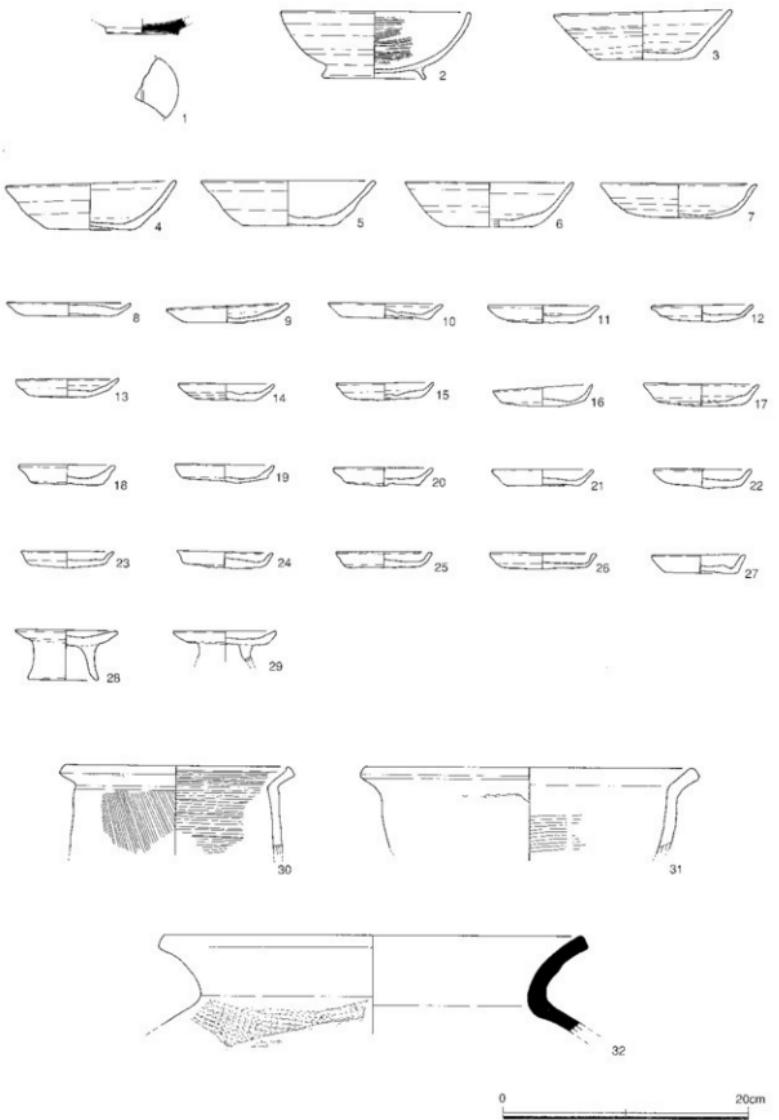
第314図 第1包含層出土遺物 1



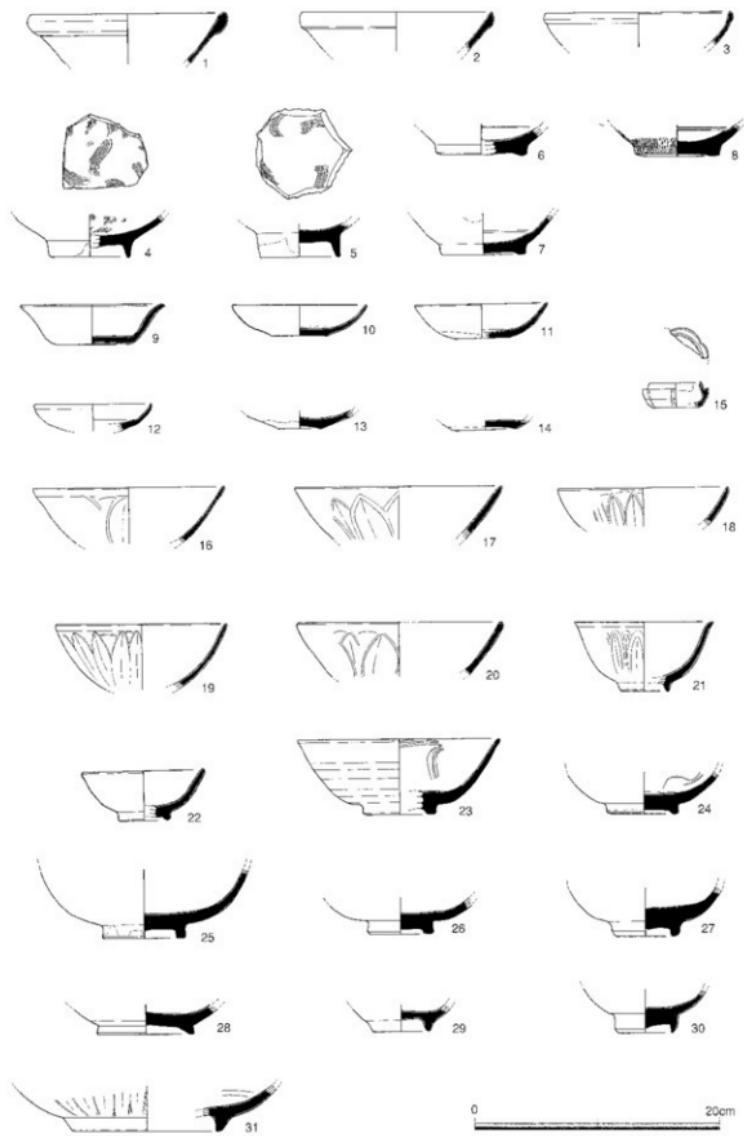
0 5cm

0 10cm

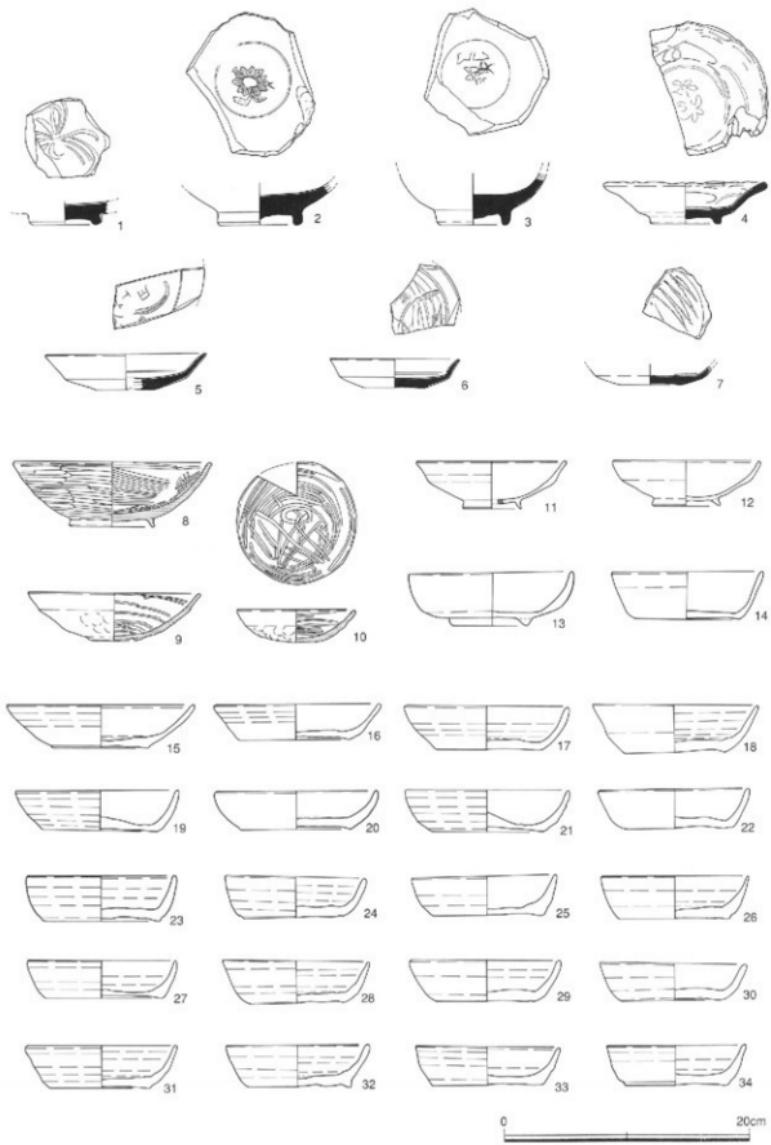
第315図 第1包含層出土遺物 2



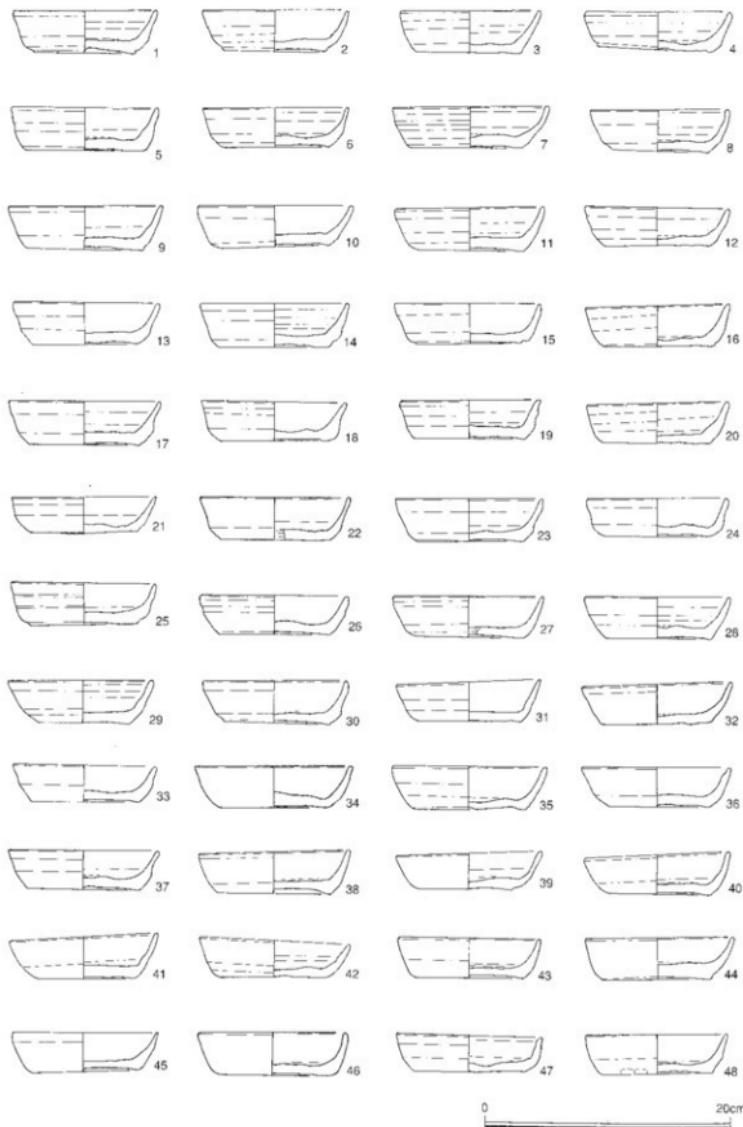
第316図 第2包含層出土遺物1



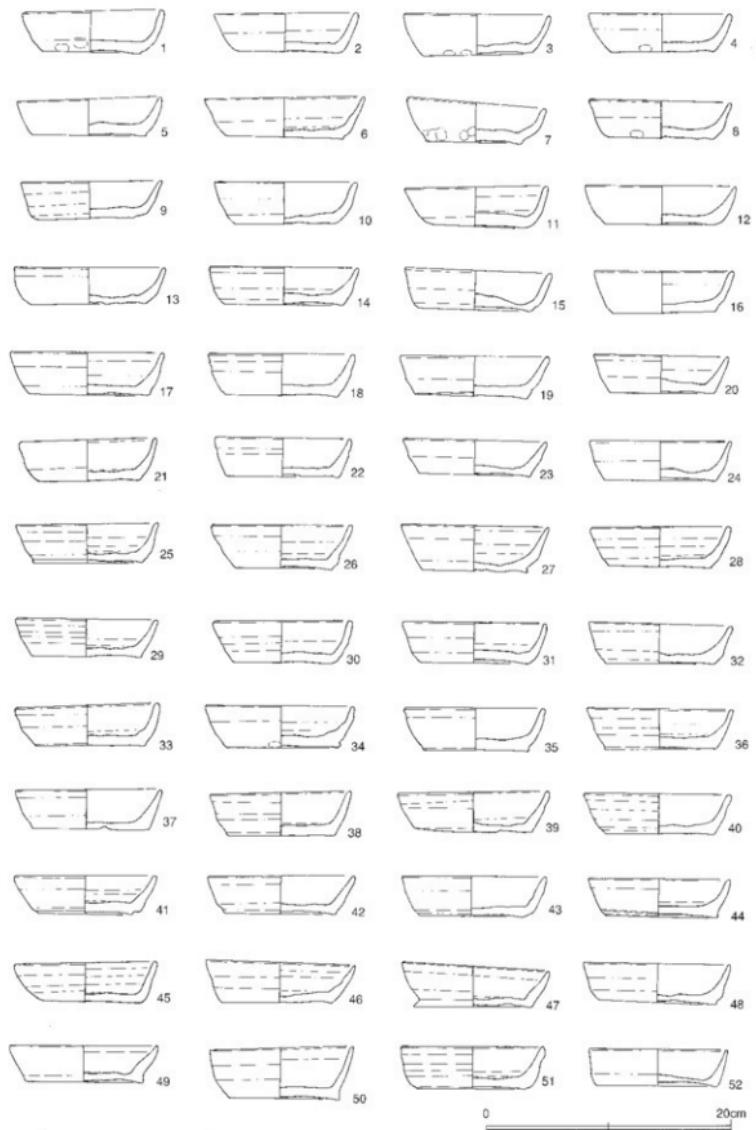
第317図 第2包含層出土遺物2



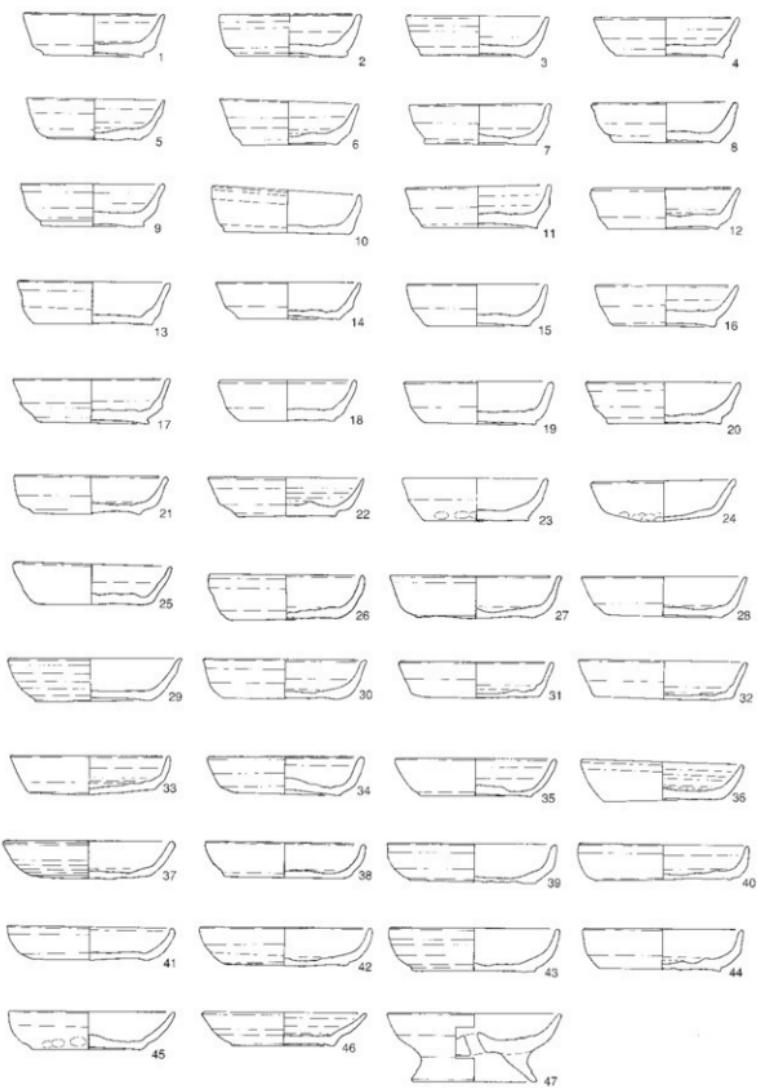
第318図 第2包含層出土遺物3



第319図 第2包含層出土遺物 4

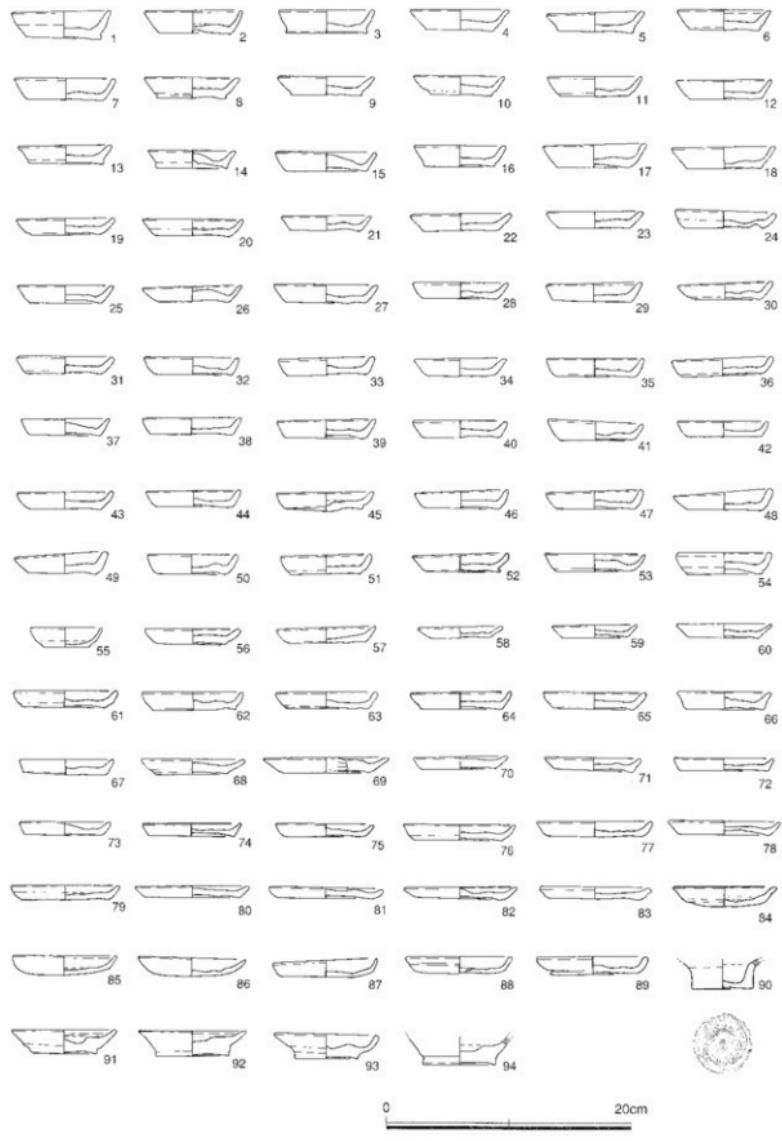


第320図 第2包含層出土遺物 5

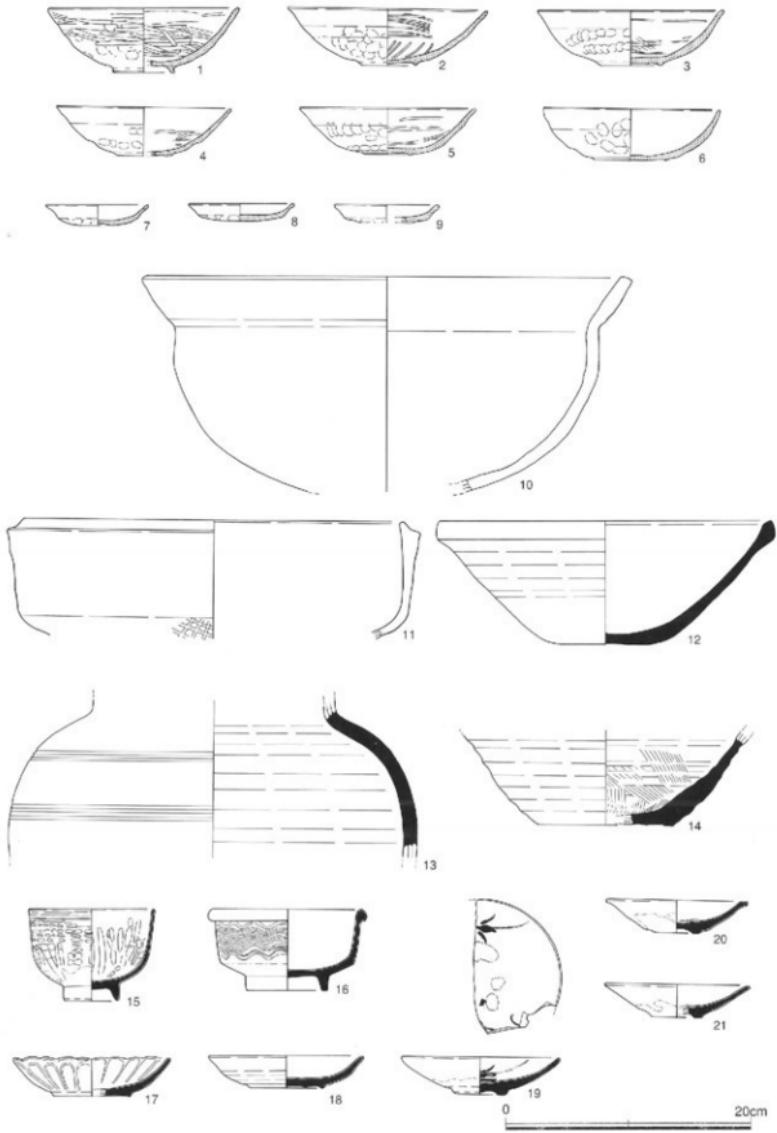


0 20cm

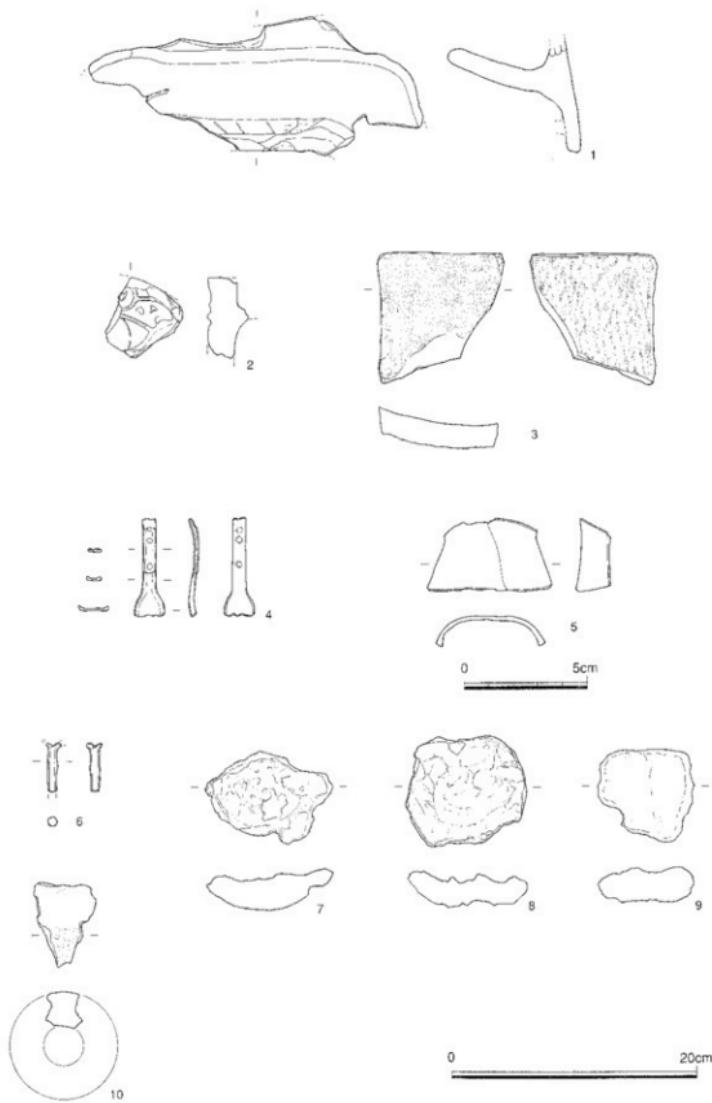
第321図 第2包含層出土遺物 6



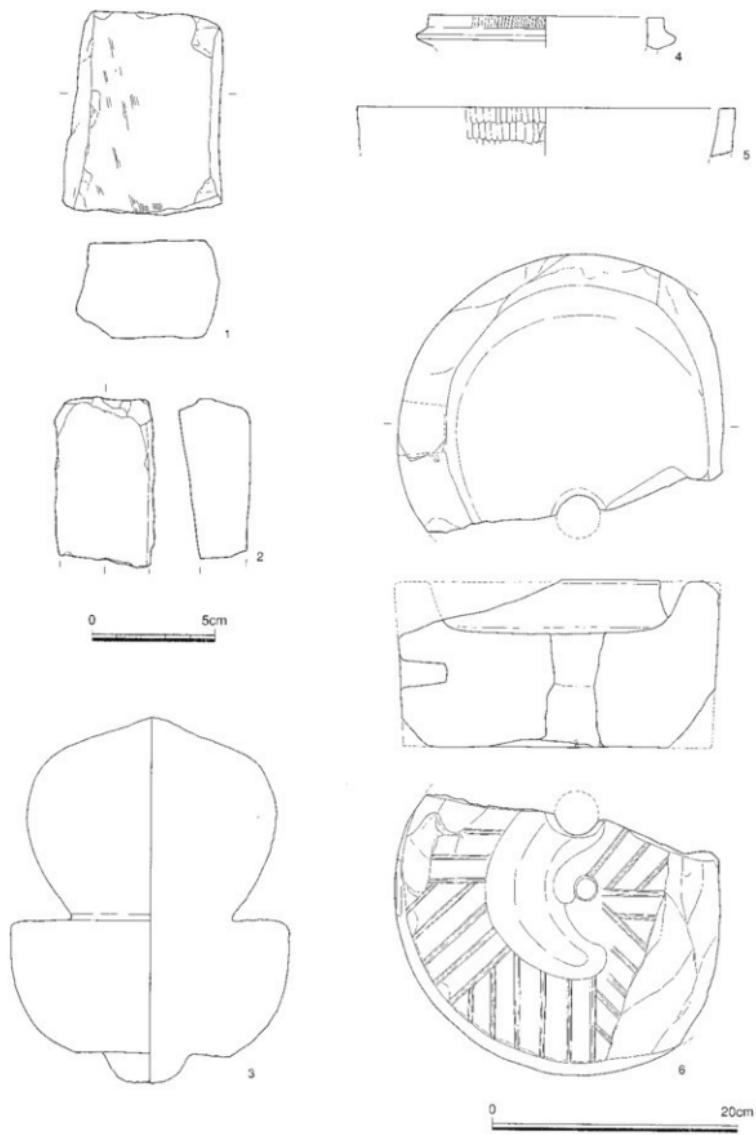
第322図 第2包含層出土遺物 7



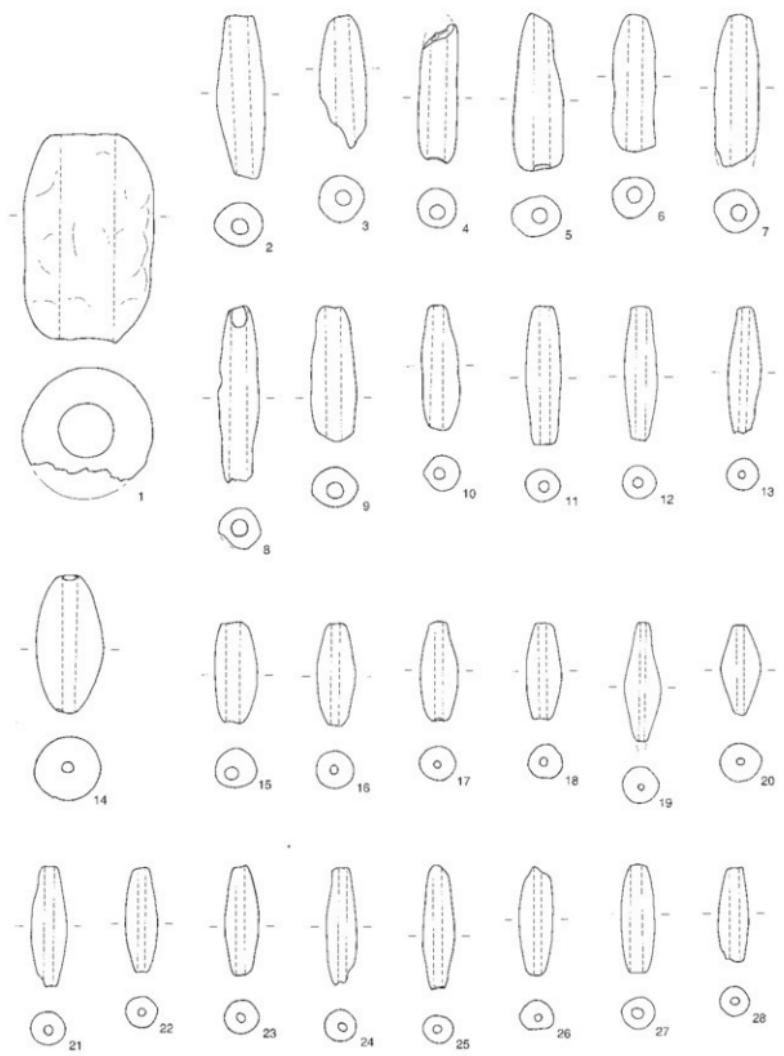
第323図 第2包含層出土遺物 8



第324図 第2包含層出土遺物 9

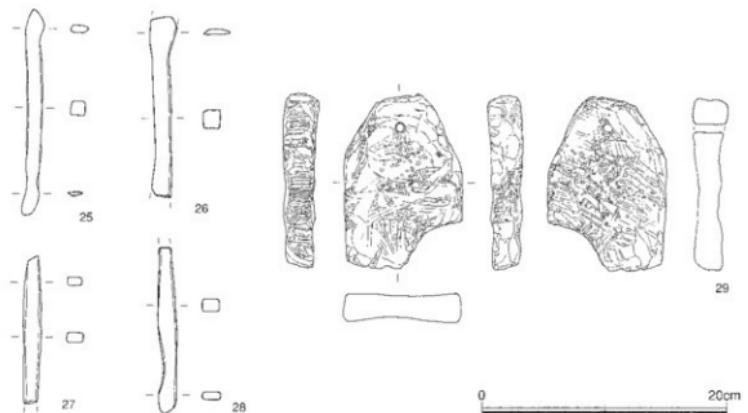
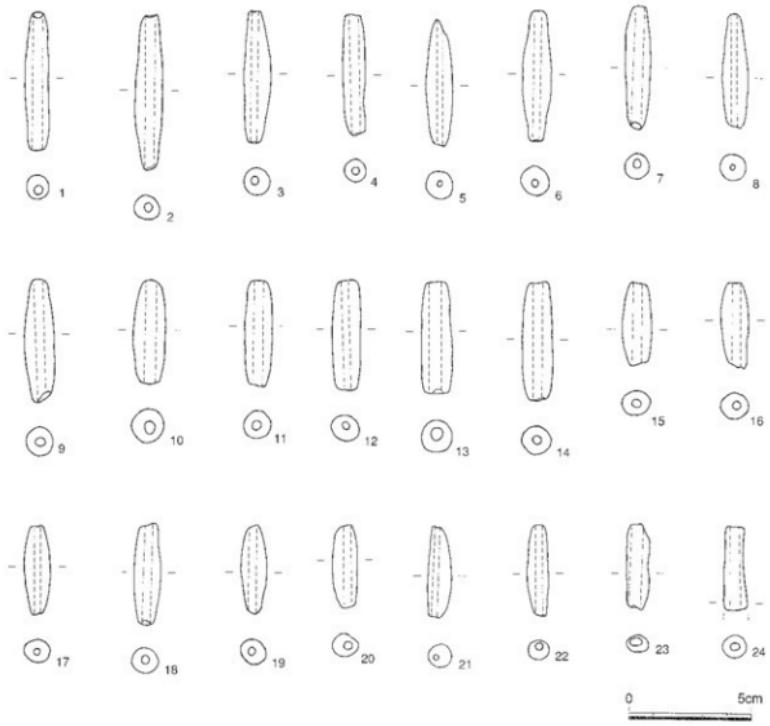


第325図 第2包含層出土遺物10

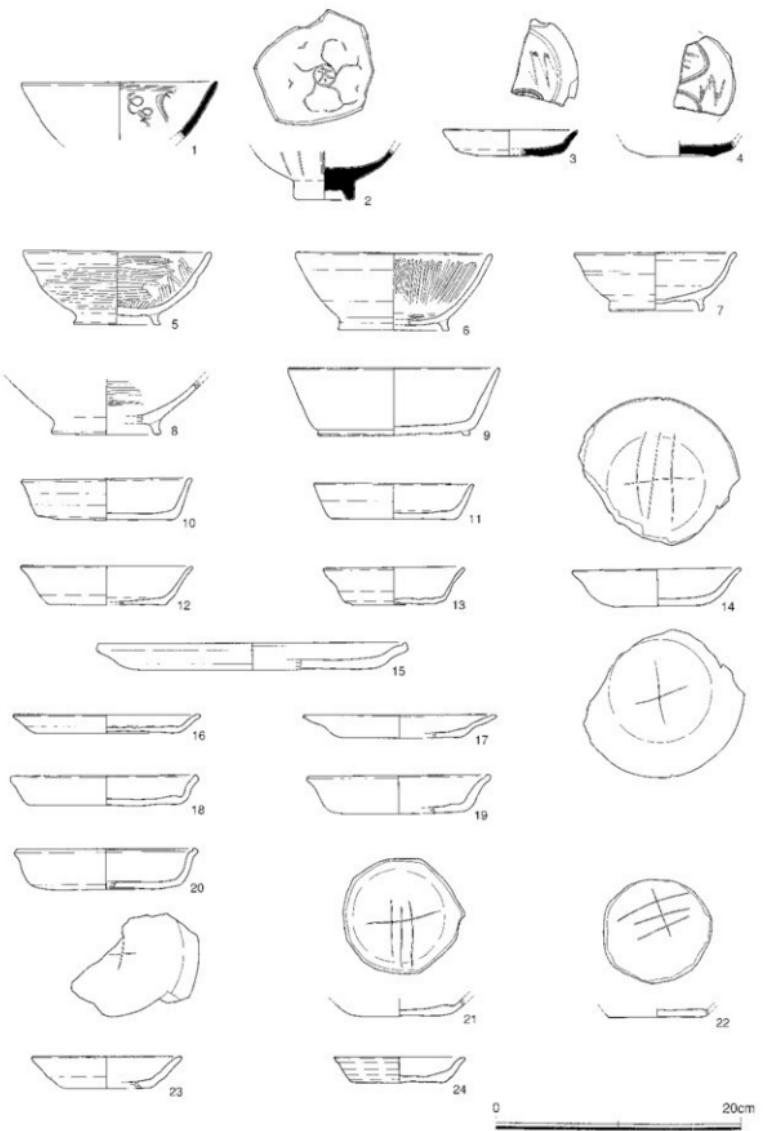


0 5cm

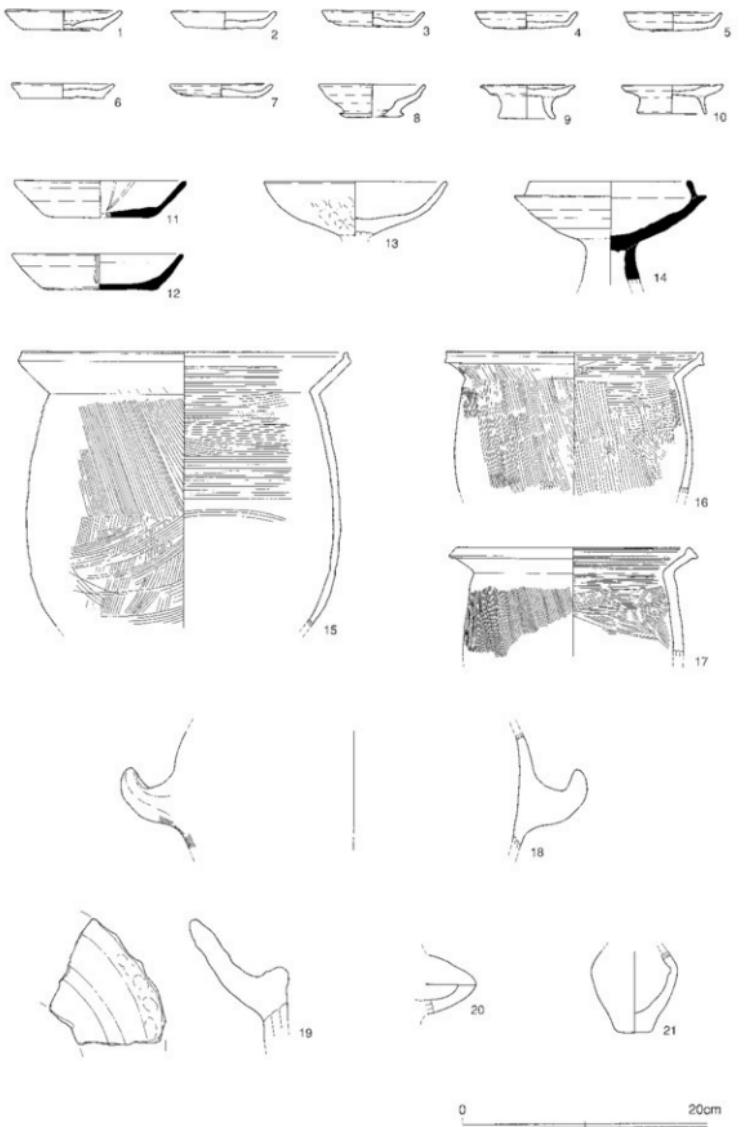
第326図 第2包含層出土遺物11



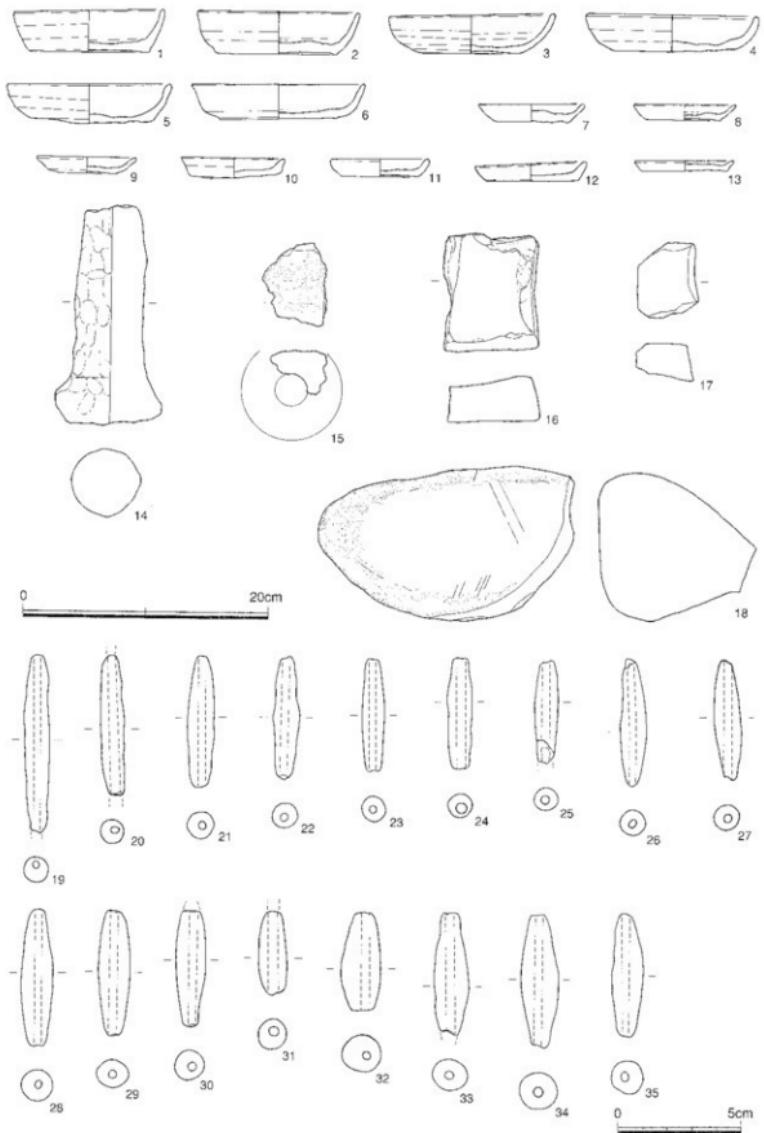
第327図 第2包含層出土遺物12



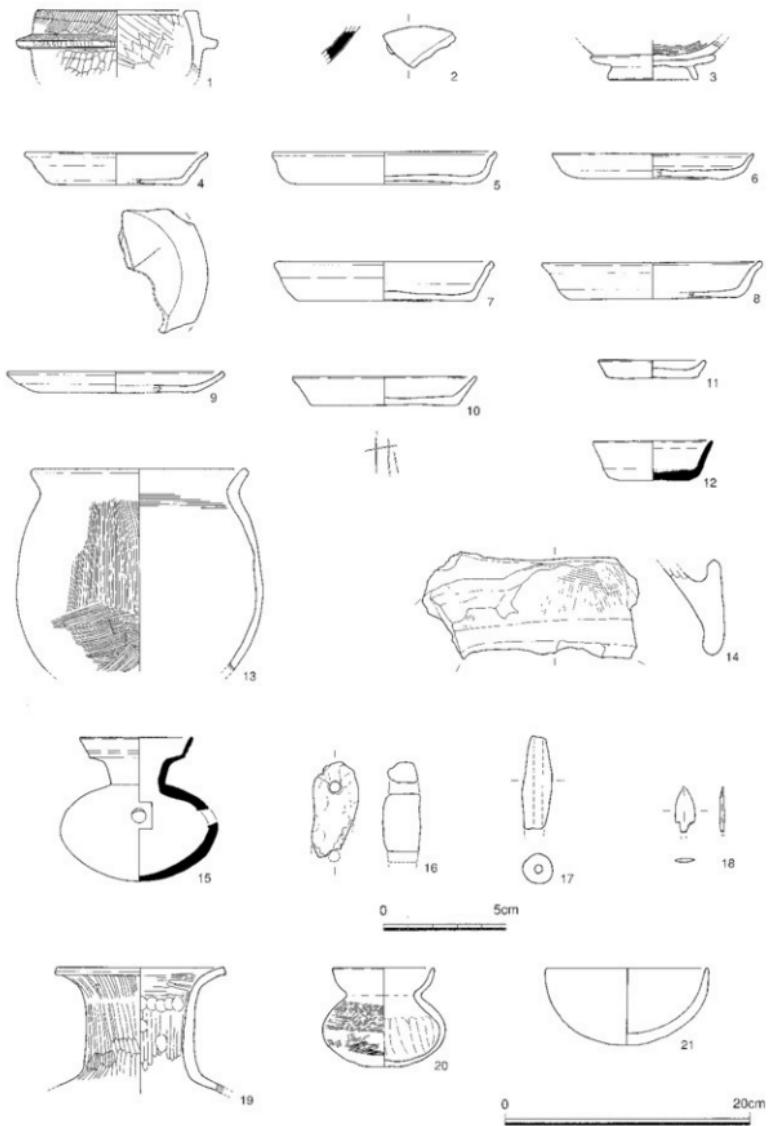
第328図 第3包含層出土遺物 1



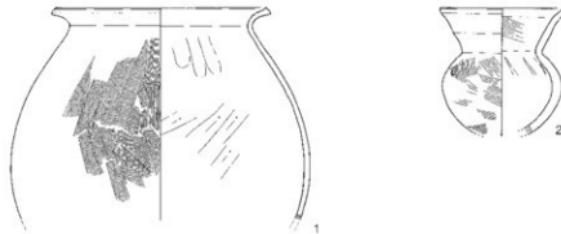
第329図 第3包含層出土遺物2



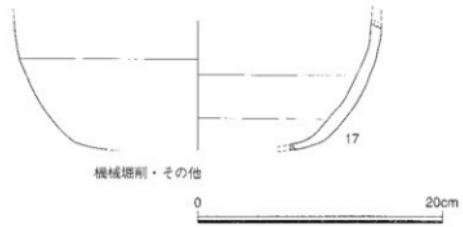
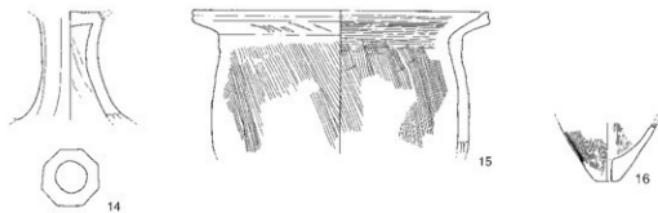
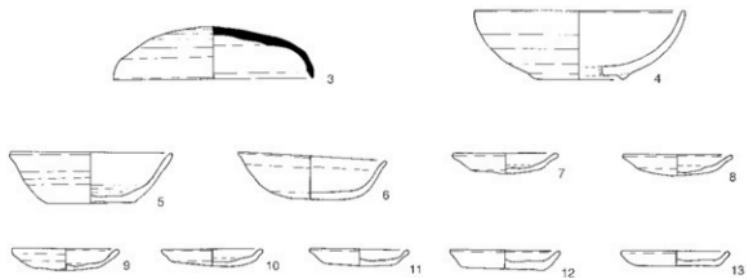
第330図 第3包含層出土遺物 3



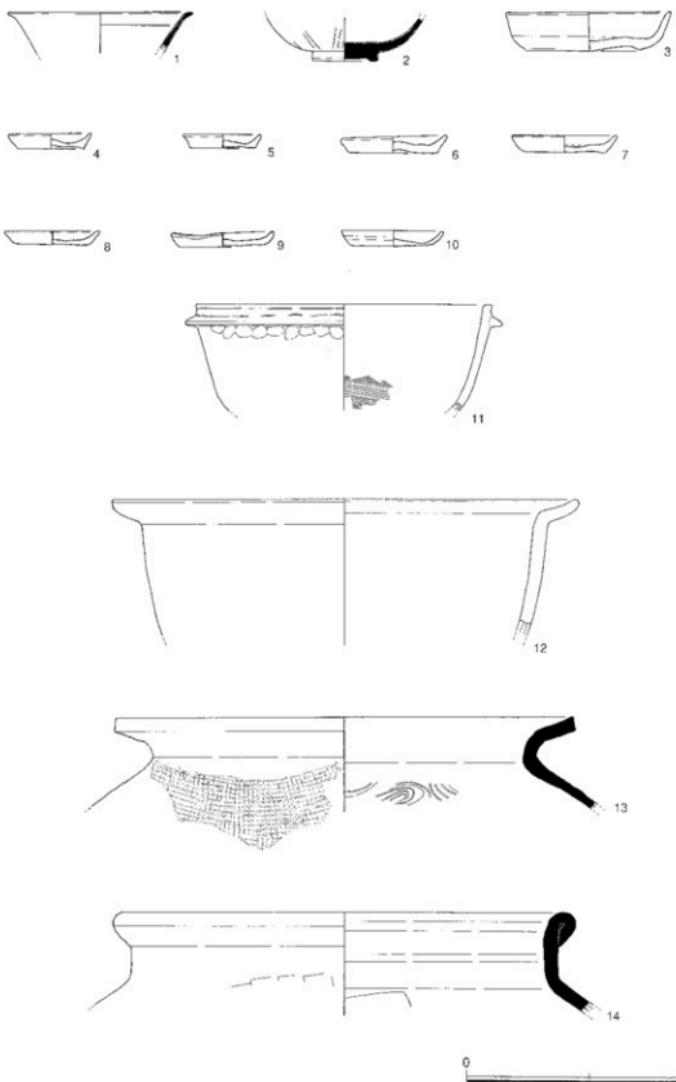
第331図 第4包含層出土遺物



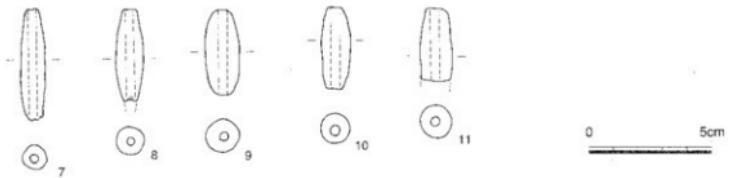
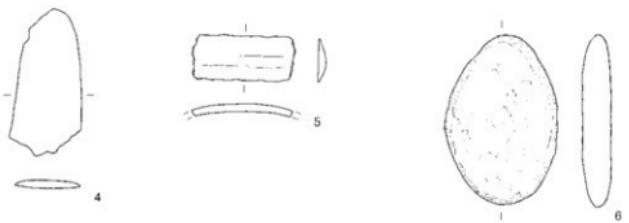
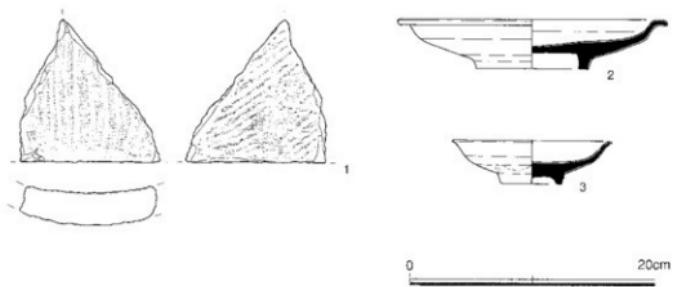
第5包含層



第332図 第5包含層・機械掘削・その他出土遺物1



第333図 第5包含層・機械掘削・その他出土遺物2



第334図 第5包含層・機械掘削・その他出土遺物3

3 自然科学分析成果

- ・有機質分析（繩）
- ・樹種同定（田舟）
- ・金属成分分析（和鏡）

寺山遺跡出土の埋納錢付着有機質の調査

奈良文化財研究所 高妻洋成・佐藤昌憲

1. はじめに

寺山遺跡より出土した埋納錢には、錢を通して錢縁をつくる際に用いられた「さし」と錢を包んでいたと思われる有機質が付着している。今回、この付着有機質に対して顕微鏡観察ならびに顕微赤外分光分析（顕微FT-IR分析）をおこない、埋納様式についての情報を得ることを試みた。

2. 顕微鏡観察

埋納錢に付着している有機物を実体顕微鏡を用いて観察したところ、次のような所見を得た。

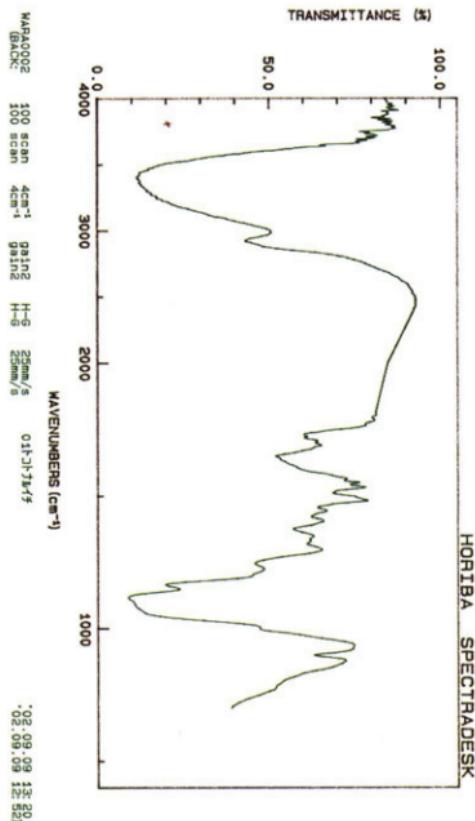
- 1) 一連の錢縁に存在する「ずれ」の部分には、錢縁を束ねるようにしてくくったと思われる植物繊維が観察される。
- 2) 埋納錢の表面に残る有機質の中には、整然と並ぶ植物繊維が観察されることから、埋納錢を「茎」状のもので包んでいたものと考えられる。
- 3) 1) の植物繊維は錢に直接付着している。
- 4) 1) と 2) の両方の重なりは、1) が 2) よりも下、すなわち錢側である。

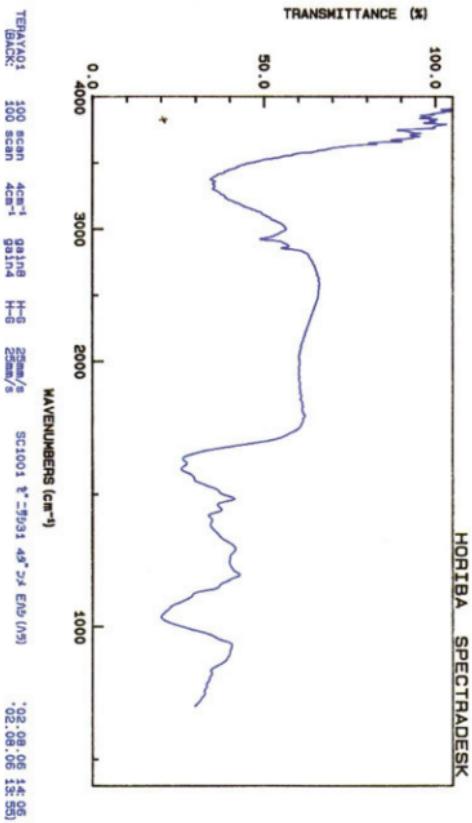
これらの所見から、埋納錢は錢縁を繩状の植物繊維で束ねた上で「茎」状のもので包んだものと思われる。しかしながら、この包んだものをさらに繩状のものでくくっていたかどうかについては、明らかとならなかった。

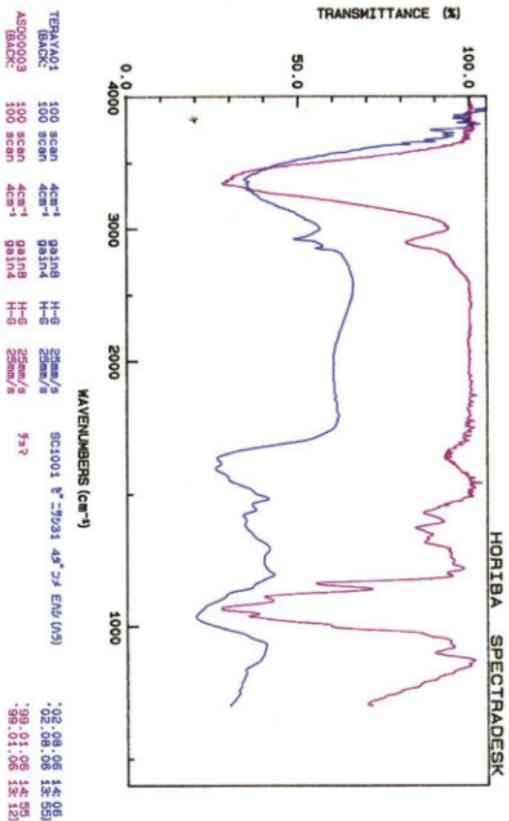
3. 顕微FT-IR分析

錢縁をつくる際に用いられた「さし」と錢を包んでいたと思われる「茎」状の有機質に対して顕微FT-IR分析をおこなったところ、植物性の繊維に特徴的に現れるセルロースの吸収スペクトルを検出したことから、当該試料が植物性の繊維であることは明らかである。しかしながら、スペクトル全体のプロフィールを学麻や稻藁などの標準試料のスペクトルと比較したところ、いずれのスペクトルとも一致しなかった。これは、当該試料がかなり劣化を受けていることに起因するのか、あるいは学麻や稻藁とは異なる植物種であるのかといった可能性がある。

現時点でいえることは、当該埋納錢に付着している有機質は植物性の繊維であるということである。さらに詳細な検討をおこなうためには、プラントオパール分析などをおこなう必要があるであろう。







埋納鉄付着有機物の植物珪酸体

鈴木 茂（パレオ・ラボ）

イネ科植物は別名珪酸植物とも言われ、根より大量の珪酸分を吸収することが知られている。こうして吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積され植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）が形成される。そのうち機動細胞珪酸体についてはイネを中心とした形態分類の研究が藤原によって進められている（藤原 1978など）。こうしたことから得られた植物遺体について、その植物珪酸体（機動細胞珪酸体）の検出を図り形態を観察することによってその母植物（イネ科植物）についてある程度検討ができると考える。

守山遺跡の発掘調査で埋納鉄が出土し、イネ科植物とみられるさしなわ（縛繩）も検出されている。このさしなわについて上記したことから植物珪酸体分析を行い、観察される植物珪酸体の形態から採取されたさしなわの母植物について検討した。またこれらの表面に付着した植物遺体についても同様に検討した。

1. 試料と分析方法

試料はE-10区SC1001遺構の埋納庫内4段目より出土した埋納鉄のさしなわ5試料と表面付着物5試料の計10試料である。これら10試料について便宜的に番号を付した。すなわち試料1、2はさしなわ31と表面付着物、試料3、4はさしなわ32と表面付着物、試料5、6はさしなわ35と表面付着物、試料7、8はさしなわ36と表面付着物、試料9、10はさしなわ39と表面付着物である。これら10試料にはいずれも灰色の粘土が付着していたため、できる限りこの粘土を削り取り分析に供した。

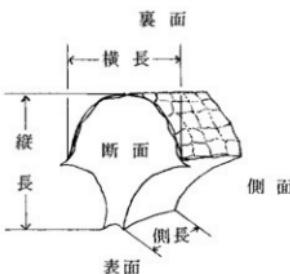
分析は現生植物の標本作製と同様の方法を用いて植物珪酸体の検出を図った。すなわち、乾燥させた植物遺体を管瓶にとり、電気炉を用いて灰化するのであるが、灰化する行程は藤原（1976）にほぼしたがって行った。その行程は、はじめ毎分 5°C の割合で温度を上げ、 100°C において15分ほどその温度を保ち、その後毎分 2°C の割合で 550°C まで温度を上げ、5時間その温度を保持して、試料の灰化を行う。灰化した試料についてその一部を取り出し、グリセリンを浸液としてプレパラートを作製し、検鏡した。

2. 観察結果

砂時計様に胴の中央部がくびれた単細胞珪酸体が2、4の2試料を除く8試料において違った状態で認められ、いずれも細胞の成長方向とは直角に配列している（写真図版の写真番号4～8）。また、試料1や10では機動細胞珪酸体も観察され、試料10には一部違った状態のものも観察された。その他全試料において同様のものと思われる長細胞珪酸体（棒状珪酸体）が認められる。以下に試料10で観察された機動細胞珪酸体の記載を示すが、各部の名称については図1を参照されたい。

断面がイチョウの葉形（写真番号1-a、2-a）をしている機動細胞珪酸体で、側面部分に突起があり、表面部分にくぼみが、また裏面部分には浅い亀甲状紋様が一部認められる。大きさは、縦長が $35.7\mu\text{m}$

~56.1 μm (10個体平均47.43 μm)、横長が20.4 μm ~58.65 μm (平均38.76 μm)である。側面形態は長方形で、側長が長い個体(写真番号1)や反対に側長よりも縦長のほうが長い個体(写真番号2)も観察される。なお側長は22.95 μm ~56.1 μm (平均36.72 μm)である。以上のようないかたからこの機動細胞珪酸体についてイネと判断される。



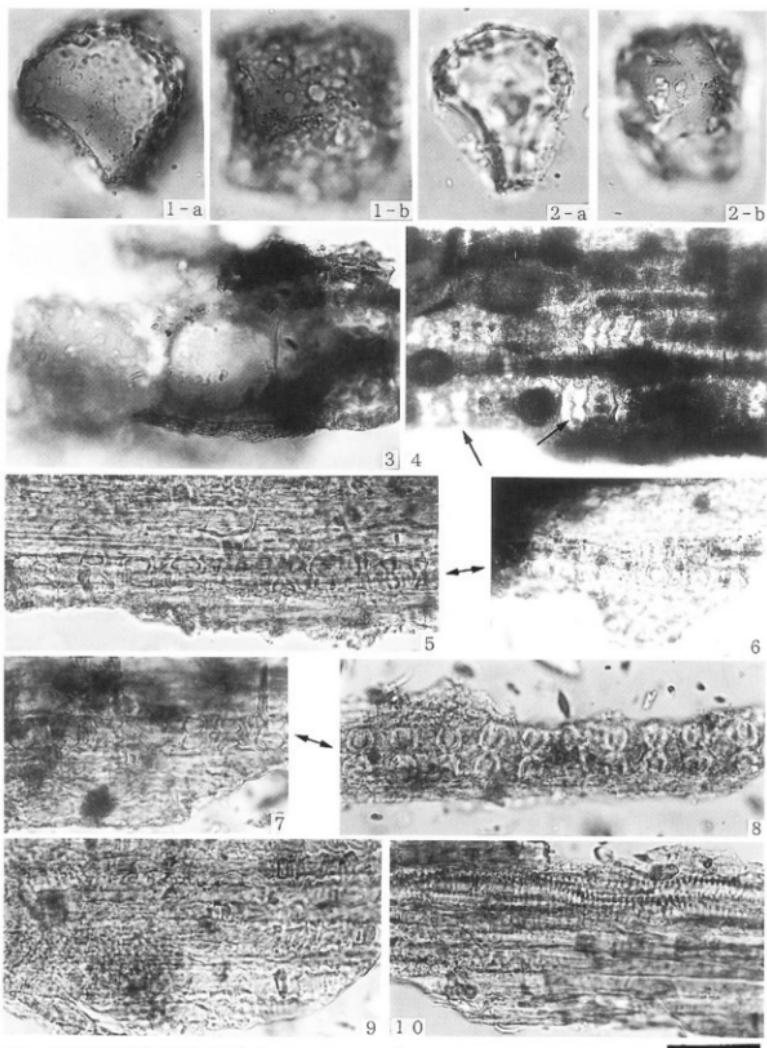
3. さしなわおよび表面付着物の母植物

上記したように試料10で観察された機動細胞珪酸体はイネと同定され、これは試料1についても同様である。よって試料1や10で認められたさしなわの母植物はイネと判断される。またこれらと同様のイネ型單細胞珪酸体(イネやヨシ属など)が観察された他のさしなわ試料3、5、7、9や表面付着物試料6、8の植物遺体もイネと判断してもよいと考える。他の試料2、4からは特徴的な植物珪酸体が認められず、その母植物については不明であるが、イネと判断される他の試料と同様の長細胞が観察されていることからこれらもイネと判断しても良いように思われる。

このように植物珪酸体分析を行ったさしなわ(縊繩)は全てイネと判断される。またそれらの表面付着物についても全てイネと判断して良いであろう。

引用文献

- 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) -数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-、考古学と自然科学、9、p.15-29。
藤原宏志・佐々木 勅(1978) プラント・オパール分析法の基礎的研究(2) -イネ(Oryza)属植物における機動細胞珪酸体の形状-、考古学と自然科学、11、p.9-20。



図版 さしなわ試料の植物珪酸体 (scale bar : 30 μ m)

- 1, 2 : イネ機動細胞珪酸体 (a : 断面, b : 側面) 1 : 31さしなわ, 2 : 39表面付着有機物
- 3 : イネ機動細胞珪酸体列 (側面) 39表面付着有機物
- 4 ~ 8 : イネ型単細胞珪酸体列 (↓) 4 : 39表面付着有機物, 5 : 35表面付着有機物,
- 6 : 36さしなわ, 7 : 36表面付着有機物, 8 : 39さしなわ
- 9, 10 : 長細胞 (棒状) 硅酸体 31さしなわ

寺山遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

寺山遺跡は、園瀬川右岸の沖積地に位置する。発掘調査により、鎌倉時代後半～末の生活面に大量の鐵が埋納されている様子が確認された他、中世の和鏡や建築部材と考えられる木製品も出土している。

今回の分析調査では、木材利用状況を確認するために木製品の樹種同定を実施する。また、中世の和鏡の成分を明らかにするために蛍光X線分析による非破壊分析を実施する。

1. 木製品の樹種

1-1. 試料

試料は、田舟の部材と判断される木製品1点である。

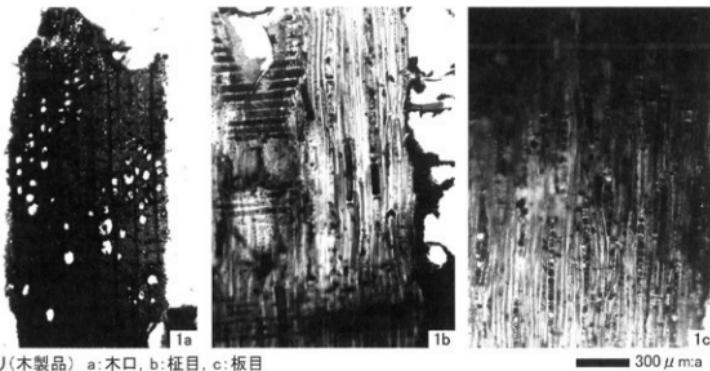
1-2. 分析方法

破損部を利用して小片をブロック状に採取する。剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、現生表標本と特徴を比較して種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)およびWheeler他(1998)を参考にする。

1-3. 結果

木製品は、落葉広葉樹のクリに同定された。解剖学的特徴等を記す。



図版1 木村

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、年輪界に向かって径を漸減させながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-10細胞高。

1-4. 考察

同定を実施した木製品は、比較的大型の部材であり、山舟の一部と考えられている。樹種はクリに同定された。クリは冷温帯下部から暖温帯にかけて広く生育する落葉高木となる樹種であり、人為的擾乱が及んだ二次林において普通に生育する種類である。また、クリの木材は、重硬で強度・耐朽性に優れた材質を有しており、建築材や上木材などとして有用な材である。今回の場合、山舟の機能用途を考えると、クリは適材といえ選択的に利用されていた可能性がある。この点については、今後山舟に関する樹種同定事例の蓄積を待って検討していきたい課題である。なお、徳島県内では、木製品にクリが利用された例は、新蔵町3丁目遺跡および徳島城下町遺跡中前川町2丁目地点から出土した近世の漆器（椀・板物）で確認された例がある（井上、2000；北野、2005）。

2. 中世和鏡の蛍光X線分析

2-1. 測定資料

試料は、中世のSP1215から出土した菊花双鳥鏡1点である。

2-2. 分析方法

蛍光X線分析は、サンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であるが、ごく表面層を測定対象としているため、出土遺物表面が風化の影響を受けている場合、遺物本来の化学組成を導くことは難しく、本来の化学組成を知るためにには風化層を除去しなければならない。ただし、遺物保存の観点から考えれば、外観上の変化を伴わない本分析法は概略の化学組成を知るためには極めて有効な手法となる。

本報告では、非破壊を前提とした材質調査を目的とすることから、試料はクリーニング処理や錆の除去を行わず、調査に用いる。材質調査に用いた装置はセイコーインスツルメンツ（株）製エネルギー分散型蛍光X線分析装置(SEA2120L)である。なお、本装置は下面照射型の照射径10mmφの装置であることから、試料の測定は錆などの目立たない箇所を計6箇所選定し、測定を実施する（図1）。

得られた特性X線スペクトルは元素定性を実施した後、ノンスタンダードによるFP法（ファンデルメンタルパラメーター法）により、定量演算を行い、相対含有率（質量%）を算出する。なお、本装置による定量可能元素は11Naから92Uの範囲にある元素であり、これら範囲外の元素についてはFP法による定量演算に利用することが出来ないこと、また半定量的に相対含有率を算出しているが、実際にはど

表1 測定条件

測定装置	SEA2120L
管球ターゲット元素	Rb
コリメータ	φ10.0mm
フィルター	なし
マイラー	OFF
雰囲気	大気
励起電圧 (kV)	50
管電流 (μA)	自動設定
測定時間 (秒)	300

の程度の深さまで X 線が進入しているのか不確実な部分もあり（例えば表面の風化層のみから発生した特性 X 線を検出しているのか、あるいは風化層より内部の新鮮部分の材質も含めた特性 X 線を検出しているのか）、結果の評価には注意する必要がある。本調査における測定条件の詳細については、表 1 に示す。

2-3. 結果・考察



図 1 測定値位置

和鏡の蛍光 X 線スペクトルを図 2、元素分析結果を表 2 に掲げる。和鏡の元素分析によって得られた主要元素は Cu（銅）と Pb（鉛）であり、他に Fe（鉄）、Ag（銀）、Sn（錫）、Sb（アンチモン）が検出されている。これら検出元素の相対含有率によれば、測定位置により変動があるものの、鉛が最も多く、次に銅が多い傾向にある。なお、青銅のもう一つの構成元素である錫は 1 % 未満と極めて少ないと特徴として認識される。

ところで、今回の調査では表側（測定位置 1・2）と裏側（測定位置 3～6）では、銅と鉛の組成比が大きく変動しており、表側で銅が多い傾向が見られている。この違いは、遺物表面の風化程度の違いに起因する可能性がある。遺物表面の元素情報が必ずしも遺物本来の材質を正確に反映した結果とはなりえないため、青銅製の材質であることは指摘できるものの、材質の本質を評価するにはやはり地金の分析が不可欠であり、今後の課題と思われる。

引用文献

- 井上 美知子、2000、漆椀の樹種と塗膜の構造、「徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第31集 新蔵町3丁目遺跡徳島保健所地点 徳島保健所改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」、徳島県教育委員会・財团法人徳島県埋蔵文化財センター、399-402。
- 北野 信彦、2005、中前川町2丁目地点出土漆器の材質・技法、「徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第56集 徳島城下町遺跡 中前川町2丁目地点 徳島県立文学書道館整備事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書」、徳島県教育委員会・財团法人徳島県埋蔵文化財センター、299-309。
- 島地 謙・伊東 隆夫、1982、図説木材組織、地球社、176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編)、1998、広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト、伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修)、海青社、122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

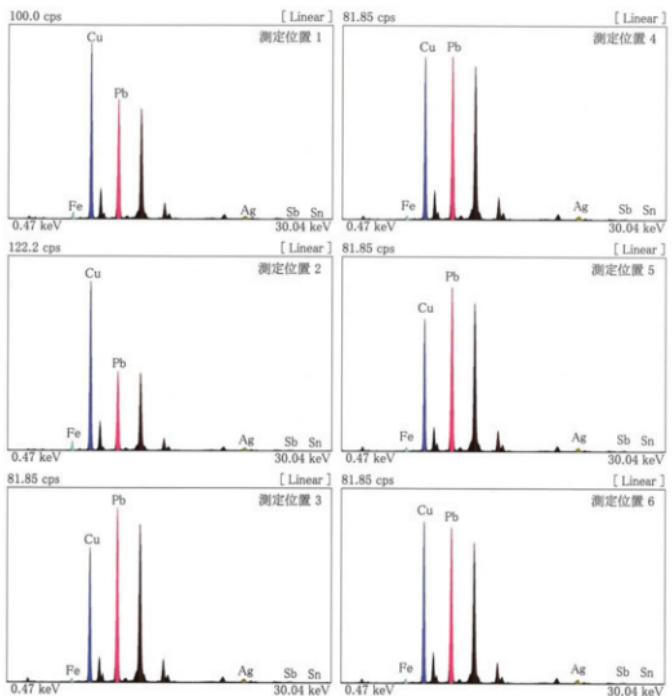


図2 萤光X線スペクトル(測定位置1～6)

表2 和鏡の元素分析結果

(単位:wt%)

測定位置	Fe	Cu	Ag	Sn	Sb	Pb
1	1.67	34.41	1.7	0.34	1.02	60.86
2	2.7	41.61	2.16	0.06	1.14	52.34
3	0.66	23.18	1.96	0.16	1.07	72.97
4	0.72	27.41	2.22	0.02	0.97	68.65
5	0.86	23.81	2.24	0.04	1.16	71.89
6	0.82	28.17	2.13	0.05	1.06	67.77

4 まとめ

1 SC1001（埋納銭遺構）……括大量出土銭について

はじめに

中世においては銭貨流通が浸透し、銭を基準とする税や地代などの收取方式である貫高制がとられ、経済活動の秩序の中心となっていた。

宋銭や明銭など、渡来銭の大量出土の銭貨（1,000枚以上）を総称して一括出土銭・大量出土銭あるいは埋蔵銭といい、大量の銭貨を埋蔵・備蓄することは中世に顕著な行為である。備蓄銭とは「*万*」に備えて蓄えておく銭のことである。備蓄の可能性が高い場合は「*備蓄銭*」と呼ぶが、それ以外の場合、大量に出土したからといって「*備蓄*」という目的に限定できないため、一般的には「*大量出土銭・埋蔵銭*」という表現に留めている。

特定の意図によって埋められた銭貨という意味では「*埋納銭*」であるが、呪術的埋納銭を指すものと混同を避けるために、ここでは一括大量出土銭あるいは単に「*出土銭*」と呼ぶこととした。

(1) 出土銭（埋納銭）の検出状況

調査地点の現況は水田であり、海拔約L=4.5mを測る。大量出土銭検出面までの調査区の基本層序は、①表土（水田）②～④灰オリーブ色粘質土、⑤暗灰黄色粘質土（遺物包含層）、⑥灰オリーブ粘質土である。⑥層は鎌倉時代後半～末にかかる造構面で、出土銭は⑤の遺物包含層を切り込んだ土坑に収められていた。出土銭（埋納銭）の検出面は現地表面から約1m下にあたる。

(2) 出土銭の埋納状況

埋納坑は長軸36.6cm、短軸22cm、深さ6cmで長方形の平面形を呈し、上坑掘り方いっぱいに繒線の状態になった銭が置かれていた。

検出時に上面の一部が遮離したが、見かけ上は2縫1対で5列4段に並べ重ねた状態が観察された。精査の結果、縫と縫間にズレや空間があり、各段にも不整列部がみられた。また上面、下底面の縫には凹凸があり、縫を束ねたと思われる植物性纖維が銭に付着していた。さらに縫表面全体にも植物性纖維が確認できた。

この植物性纖維は、材質分析の結果、稻藁の紐と蓮であった可能性が高いことが指摘されている（自然科学分析参照）。

これらのことから、10縫（一貫縫）を一縫ごとに両端を結び目にして折り返し、2ないし3列4段にまとめた錢縫・10縫（一貫縫）をつくる。これを糞紐で固定し、計4単位の小口を揃え、全体を蓮状のもので梶包して糞紐で束ねた埋納方法が採られたと復元される。

(3) 埋納坑土層の観察

土坑内はオリーブ黒色粘質上で充填されていたが、銭の周囲の土は銅イオンの流出による黒灰色化・固結化がみられた。出土銭（埋納銭）上部への被覆粘土等は認められなかった。

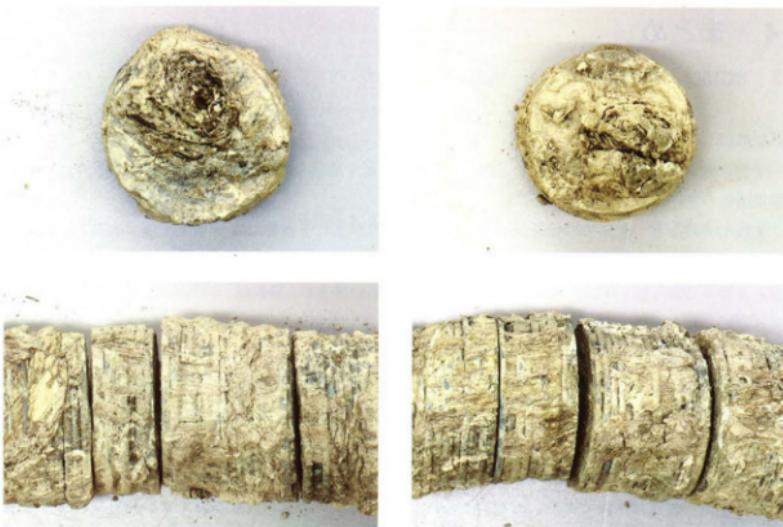


写真1 繕および縕表面の付着有機物（植物性繊維質）

(4) 錢種と枚数

53種3,715枚（調査時）を数える。最古銭は五銖（後漢 初鑄年24年）、最新銭は至大通寶（元 初鑄年1310年）である。最多銭は皇宋通寶（北宋 初鑄年1038年）である。総重量は13.21kgである。

約40縕のうち1縕の枚数が確定した20縕が97枚（文）、99・96枚（文）が3縕、94枚（文）が2縕、98枚（文）が1縕あり、百文に満たない銭貨を百文に通用させる省百法が追認された（表1）。

銭の種類と枚数（表2）

銭種……53種

最古銭……五銖（後漢 24年）

最新銭……至大通寶（元 1310年）

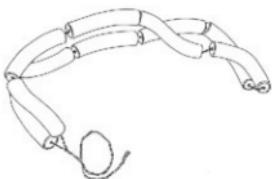
総枚数……3,715枚

総重量……13.021kg

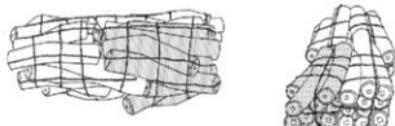
(5) 埋納された時期

鎌倉時代後半～末の遺物包含層・遺構面を切り込んで埋納されている。最新銭に至大通寶が含まれている。

これまで1貫文（1,000枚）を越える大量銭の出土例は全国で210余例・約350万枚、徳島県では8カ所・約251千枚ある（寺山遺跡を除く：表6）。



1. 10巻（一貫丈・1,000）をたばねる。



2. 1を4つまとめて、直状のもので包んで埋める。



図1 寺山遺跡出土銭 緒銭の復元（案）

表1 出土錢錢緝別枚數表

埋納時期が古い海南町（現・海陽町）大里出土銭（海南町教育委員会「阿波海南 大里出土銭—中世期人量埋納銭の調査報告書一」1994）、徳島市一宮出土銭には最新銭に至大通寶が含まれ、大里では14世紀の備前系大毫に収納されていた。

銭種別では①京宋通寶から⑦紹聖通寶まで上位7種の構成比が共通し、以下の銭種も若干の差異はあるものの、大里・一宮・寺山ともに上位20種の構成比が近似値を示しており、当時の流通銭種を反映しているものと考えられる（表3～5）。

以上の点から寺山遺跡の銭貨が埋納された時期は一括出土銭時期区分の2期（14世紀第2四半期から同第3四半期）に収まるとみられ、大里・一宮出土銭と併せて本県では最も古い段階の埋納例と考えられる。

発掘調査で確認され、埋納方法の詳細が判明した例としては本県では初めてである。

No.	銭貨名	国名	初鑄年	本銭数	枚鑄銭
1	五铢	後漢	24	7	
2	開元通寶	唐	621	307	
3	乾元重寶	唐	758	12	
4	開元通寶	唐	845	17	
5	天祐元寶	前蜀	917	1	
6	唐國通寶	南唐	959	3	
7	開元通寶	南唐	960	1	
8	宋通元寶	北宋	960	25	
9	太平通寶	北宋	976	32	
10	淳化元寶	北宋	990	31	
11	景德元寶	北宋	995	59	
12	咸平元寶	北宋	998	64	
13	景德元寶	北宋	1004	89	
14	祥符元寶	北宋	1009	88	
15	祥符通寶	北宋	1009	42	
16	天禧通寶	北宋	1017	84	
17	大聖元寶	北宋	1023	199	
18	明道元寶	北宋	1032	18	
19	景德元寶	北宋	1034	58	
20	崇寧通寶	北宋	1038	497	
21	聖和元寶	北宋	1054	46	
22	聖和通寶	北宋	1054	14	
23	嘉祐元寶	北宋	1056	36	
24	嘉祐通寶	北宋	1056	90	
25	治平元寶	北宋	1064	61	
26	治平通寶	北宋	1064	14	
27	熙寧元寶	北宋	1068	360	
28	元豐通寶	北宋	1078	447	
29	元祐通寶	北宋	1086	323	
30	紹聖元寶	北宋	1094	163	
31	元符通寶	北宋	1098	55	
32	聖宋元寶	北宋	1101	131	
33	大觀通寶	北宋	1107	60	
34	政和通寶	北宋	1111	126	
35	宣祐元寶	北宋	1119	1	
36	宣和通寶	北宋	1119	16	
37	建炎通寶	南宋	1127	1	
38	绍兴元寶	南宋	1131	3	
39	正隆通寶	金	1157	2	
40	淳熙元寶	南宋	1174	25	
41	紹熙元寶	南宋	1190	6	
42	慶元通寶	南宋	1195	8	
43	嘉泰通寶	南宋	1201	6	
44	開禧通寶	南宋	1205	5	
45	嘉定通寶	南宋	1208	28	
46	大宋元寶	南宋	1225	2	
47	紹定通寶	南宋	1228	9	
48	嘉熙通寶	南宋	1237	2	
49	淳祐元寶	南宋	1241	5	
50	皇宋元寶	南宋	1253	2	
51	景定元寶	南宋	1260	2	
52	咸淳元寶	南宋	1265	5	
53	聖宋通寶	元	1310	1	
54	不明			26	
総計				3,715	

表2 寺山遺跡出土銭一覧

No.	錢貨名	国名	初鑄年	本錢数	比率(%)
1	皇宋通寶	北宋	1038	497	13.38
2	元豐通寶	北宋	1078	447	12.03
3	熙寧通寶	北宋	1068	360	9.69
4	元祐通寶	北宋	1086	323	8.69
5	開元通寶	唐	621	307	8.26
6	天聖元寶	北宋	1023	199	5.36
7	紹聖元寶	北宋	1094	163	4.39
8	聖宋元寶	北宋	1101	131	3.53
9	政和通寶	北宋	1111	126	3.39
10	嘉祐通寶	北宋	1056	90	2.42
11	景德元寶	北宋	1004	89	2.4
12	祥符元寶	北宋	1009	88	2.37
13	天禧通寶	北宋	1017	84	2.26
14	咸平元寶	北宋	998	64	1.72
15	治平元寶	北宋	1064	61	1.64
16	大觀通寶	北宋	1107	60	1.62
17	至道元寶	北宋	995	59	1.59
18	景祐元寶	北宋	1034	58	1.56
19	元符通寶	北宋	1098	55	1.48
20	至和元寶	北宋	1054	46	1.24
21	その他			408	10.98
総計				3,715	100

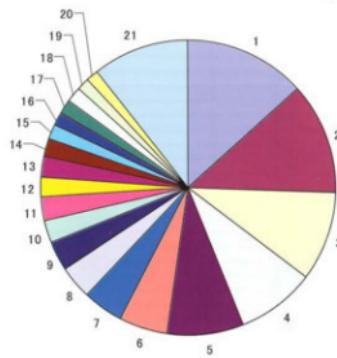


表3 寺山遺跡出土銭錢種別割合一覧（上位20種）

No.	錢貨名	国名	初鑄年	本錢数	比率 (%)
1	皇宋通寶	北宋	1038	2,218	12.91
2	元豐通寶	北宋	1078	2,026	11.79
3	熙寧元寶	北宋	1068	1,667	9.7
4	元祐通寶	北宋	1086	1,606	9.35
5	開元通宝	唐	621	1,536	8.94
6	天聖元寶	北宋	1023	816	4.75
7	紹聖通寶	北宋	1094	812	4.73
8	政和通寶	北宋	1111	714	4.16
9	聖宋元寶	北宋	1101	612	3.56
10	祥符元寶	北宋	1009	450	2.62
11	嘉祐通寶	北宋	1056	446	2.6
12	景德元寶	北宋	1004	406	2.36
13	天禧通寶	北宋	1017	339	1.97
14	咸平元寶	北宋	998	316	1.84
15	治平元寶	北宋	1064	276	1.61
16	元符通寶	北宋	1098	257	1.5
17	景祐元寶	北宋	1034	255	1.48
18	至道元寶	北宋	995	251	1.46
19	大觀通寶	北宋	1107	226	1.32
20	嘉祐元寶	北宋	1056	225	1.31
21	その他			1,724	10.04
総計				17,178	100

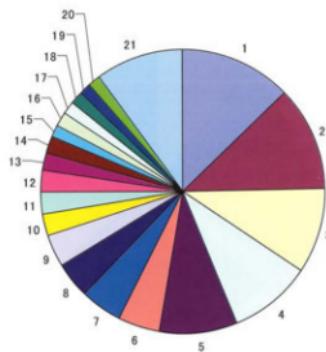


表4 一宮出土銭種別割合一覧表（上位20種）

No.	錢貨名	国名	初鑄年	本錢数	比率(%)
1	皇宋通寶	北宋	1038	9,677	13.81
2	元豐通寶	北宋	1078	8,490	12.11
3	熙寧元寶	北宋	1068	6,918	9.87
4	元祐通寶	北宋	1086	6,529	9.32
5	開元通寶	唐	621	5,809	8.29
6	天聖元寶	北宋	1023	3538	5.05
7	紹聖元寶	北宋	1094	3,007	4.29
8	政和通寶	北宋	1111	2796	3.99
9	聖宋元寶	北宋	1101	2,501	3.57
10	祥符元寶	北宋	1009	1,791	2.56
11	嘉祐通寶	北宋	1056	1,783	2.54
12	景德元寶	北宋	1004	1,475	2.11
13	天禧通寶	北宋	1017	1463	2.09
14	咸平元寶	北宋	998	1207	1.72
15	治平元寶	北宋	1064	1,166	1.66
16	至道元寶	北宋	995	1,109	1.58
17	祥符通寶	北宋	1009	1061	1.51
18	元符通寶	北宋	1098	1053	1.5
19	景祐元寶	北宋	1034	1,033	1.47
20	その他			7,682	10.96
	総計			70,088	100

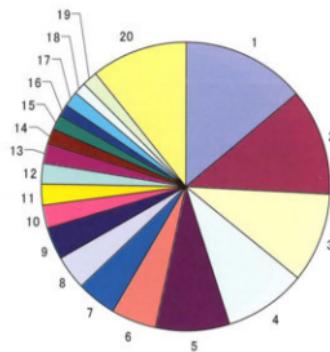


表5 大里出土銭錢種別割合一覧表（上位20種）

出土銭名	所在地	枚数	発見年	埋納時期
寺山遺跡出土銭	徳島市八万町寺山	3,699枚	2002年	14世紀前～後半
大里出土銭	海部郡海南町大里	70,088枚	1979年	14世紀後半
一宮出土銭	徳島市一宮町東丁	17,178枚	1959年	14世紀後半
根井出土銭	小松島市中出町根井	1,607枚	1951年	15世紀前半
長井出土銭	阿南市長生町上荒井	26,338枚	1954年	15世紀後半
重清城名出土銭	美馬郡美馬町城	約1,000枚	1964年	15世紀後半
北河内出土銭	海部郡日和佐町北河内字久望	約100,000枚	1976年	19世紀以降
船津出土銭	海部郡宍喰町船津	約20,000枚	1929年	不明
神領出土銭	名西郡神山町神領	約15,000枚	1930年	不明

表6 徳島県の大量出土銭一覧（1,000枚以上）

(6) 寺山遺跡出土銭の性格

大量の銭貨が埋納される理由については、現在（a）備蓄銭論と（b）埋納銭論の2説がある。

（a）は万一に備えて地中に備蓄し、必要時に掘り返して使用する経済的銭貨

（b）は各種の祈願や開発行為を行う際に土地の神仏に捧げる呪術的銭貨

（a・b）説に問わらず、出土銭貨の検出状態は一貫文（1,000枚）以上の銭貨が壺・甕・木箱・布袋に収納されたもの、むき出しのまま土中に埋藏されたものなどバリエーションがあるが、100文（97文）を紐で通して両端を結び目にする縄で固定した当時の流通銭の状態を示すものが多い。寺山遺跡でも同様な状態が確認された。

大量銭貨を所有・管轄し、埋蔵することが可能な主体には次のようなものが想定されている（峰岸純夫「中世の『埋蔵銭』についての覚書」「越境する貨幣」1999）。

- ① 幕府・国衙などの役所
- ② 荘園領主・各地の莊園・公領の政所
- ③ 在地領主・地頭・代官
- ④ 神堂銭（金融貸し付け銭）を備蓄・運用する寺社や堂宇
- ⑤ 銭貨の流通や高利貸しに携わる土倉・酒屋・問丸
- ⑥ 町や市の商工業者
- ⑦ 土豪（有力農民）
- ⑧ 馬借・車借などの輸送従事者
- ⑨ 戦乱における避難民
- ⑩ 戦乱時の略奪者や平時の盜賊

寺山遺跡は金剛光寺と伝えられる地点に位置しているが、遺跡の性格については現在精査中である。埋蔵主体では④の他、⑤⑥⑦の「有徳人」などが想定される。

埋納状態に目立った特徴はないが、蓮状のもので梱包された大きさに合わせた土坑に収められており、丁寧な埋納法が採られている。埋納の意味については、どのような地点に埋納され、遺跡の中でどのような意味を持つかなど、課題は残るが今後の類例の増加により明らかにしていきたい。



写真2 埋納銭 出土状況（北より）

引用・参考文献

- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅱ 一北部地域南半部の調査—』
広島考古学研究会 1994
永井久美男編『阿波海南 大里出土銭 一海南町中世期埋蔵銭の報告書』海南町教育委員会 1994

2 遺構・遺物の検討

第1遺構面と第2遺構面の時期差は微妙である。特に調査区西側においては微妙。寺山遺跡では5面にわたって遺構が検出された。調査区西側における第1面および第2面の両遺構面の間には出土遺物による明確な時期差を識別すること困難である。調査区西側における多量の土師質土器を含む盛上整地層（包含層）出土遺物と遺構内出土遺物との差、遺構内か否かを識別することは極めて困難である。

遺構（第12～14図）

平成14年度の調査では、1～5区の調査区を対象に、1～5面の遺構面を検出した。平成15年度は、未完了の遺構面および6区の調査を実施した。各年代の遺構・遺物に関して、中世・古代・古墳後期・古墳前期の各年代の成果を整理する。

調査の結果、調査区内において東側で1面（室町～近世）、中央部で2面（鎌倉前～後半）、西側で5面（鎌倉～奈良・平安～古墳～弥生終末）の遺構面を確認した。

第1遺構面においては、調査区東側では地鉄ピットから銅鏡が出上した以外は、特に目立つ遺構は検出されなかつた。中世では、平成14年度5区第1遺構面で検出されたSC1001における一括大量出土銭（埋納銭）がもっとも注目された。調査区西側、鎌倉時代後半～末の遺物包含層・遺構面を切り込んで埋納銭遺構が検出された。発掘調査で確認され、埋納方法の詳細が判明した例としては本県では初めてである。一括大量出土銭は約3,700枚の中通銭を約100枚ごとに紐で刺し通したもので、14世紀当時の銭貨の流通状況を示す資料が確認された意義が大きく報道された。

銭種と枚数は53種3,715枚を数える。最古銭は五銖（後漢 初鑄年21年）、最新銭は至大通寶（元 初鑄年1310年）である。総重量は約13kgである。これまで1貫文（1,000枚）を越える大量銭の出土例は全国で210余例・約350万枚、徳島県では8カ所・約251,000枚ある（寺山遺跡を除く）。

埋納時期が古い海南町（現・海陽町）大串出土銭、徳島市一宮出土銭には最新銭に至大通寶が含まれ、大里では14世紀の備前系大甕に収納されていた。

銭種別では朧宋通寶を主体として構成比がほぼ共通し、若干の差異はあるものの、大里・一宮・寺山とともに近似値を示しており、当時の流通銭種を反映している。

以上の点から寺山遺跡の銭貨が埋納された時期は一括出土銭時期区分の2期（14世紀第2四半期から同第3四半期）に収まるとみられ、大里・一宮出土銭と併せて本県では最も古い段階の埋納例と考えられる。

大量の銭貨が埋納される理由については、現在（a）備蓄銭論と（b）埋納銭論の2説がある。

（a）は万に備えて地中に備蓄し、必要時に搬り返して使用する経済的銭貨

（b）は各種の祈願や開発行為を行う際に土地の神仏に捧げる呪術的銭貨

（a・b）説に関わらず、出土銭貨の検出状態は一貫文（1,000枚）以上の銭貨が壺・甕・木箱・布袋に収納されたもの、むき出しのまま土中に埋蔵されたものなどバリエーションがあるが、100文（97文）を紐で通して両端を結び目にする縒で固定した当時の流通銭の状態を示すものが多い。寺山遺跡でも同様な状態が確認された。

しかし、埋納銭の埋納者が誰であるか、あるいはどのような背景で埋めたか、という点に関しては未だ課題として残された。

第2遺構面では、金剛光寺が所在したとされる寺山の東麓に位置する調査区西側の地点において区画

目的と考えられる幅3~8m、深さ1mの溝に埋まれた中に多数の柱穴（掘立柱建物跡）・土坑などの遺構が検出された。数棟の掘立柱建物があったものと考えられ、遺構の性格としては、寺の施設の一部あるいは門前に開かれた市に觸れる建物と考えられる。また調査区中央部では大量の土師質土器の出土がみられた他、盛上整地層の上面に石敷遺構や石組遺構などが出土した。これらの遺構は遺存状態が悪く、全体の様相を把握することは困難である。石組遺構は40cm程度の長方形の片岩板石を小口に1辺2m程度の方形にならべ、上面を3cm前後の円錐で覆うように敷き詰められていた。円錐下および石組周辺からは上師質土器皿・小皿などが敷き並べられたように出土した。また石敷遺構は片岩板石の長辺をあわせて並べ、石組遺構と同様に上面を円錐で覆っていた。現段階では、石敷遺構は暗渠などの水利施設あるいは何らかの構造物の基礎と想われる。石組遺構については地鎮などの祭祀を行った遺構と考えられるが、詳細は今後の検討課題である。これらの遺構などから第2遺構面は一般的な集落とは異なった様相をみており、寺あるいは寺に隣接する遺構の存在が示唆される。

守山遺跡の中世の様相は第1~第2遺構面での成果に相当する。ここでは当初予想された金剛光寺の存在を直接示すような遺構は確認されなかったが、掘立柱建物や溝などをはじめ基壇状の施設などの非常に多くの遺構が確認され、またこれらに伴う遺物も膨大な量に達する。これらの遺構は寺を核として発達した屋敷地と評価することができよう。こうした屋敷地内では、各種の商工業者が活発な動きをしていたであろうことは想定可能であるが、この時代には僧侶もまた経済活動に従事する。埋納された錢の種類や束の作り方からみると、呪術的な側面よりも実利的な面を積極的に取り上げておきたい。

また、中世期を通じて屋敷地はより大きく東側に発展しその規模が拡大する。室町段階では、現在にもその機能が引き継がれる水路の開削も行われるなど、もっとも広く発展している様子が見受けられ、多量の錢貨の埋納も屋敷地の発展を背景にして行われたと想定される。

古代の遺構面では、金剛光寺が創建されたと伝えられる時期であり、第3遺構面の成果がこの年代に相当する。奈良・平安時代にあたるの第3遺構面では、金剛光寺が創建されたと伝えられる時期にあたるため、創建時の様相がうかがえられるものと期待された。しかしながら、遺構面は調査範囲の西半分に限定され、東半分では河道に浸食されるなど安定した状況ではなかった。当該期の遺物の出土がみられたものの、遺構の出土は希薄であったため、創建時の様相を明らかにすることはできなかった。しかしながら、集中的に8世紀の遺物をもつ遺構が点在する状況などからは、寺院の建立とリンクした動きがあることも確認された。

古墳時代の遺構が検出された第4・第5遺構面は、試掘調査の段階で把握されていなかった。これは試掘調査のポイントがこれら遺構面をはさむ旧流路に当たっていたためである。平成14年度調査において第3遺構面の下層の掘削の際に住居跡に伴う焼土や須恵器などの遺物が確認されたため、既知ではない遺構面の確認であることから事業主体者の協力も得て、下層の旧流路部分と合わせて平成15年度に持ち越して調査を実施した。

古墳時代の遺構面は、2条の旧流路に挟まれた狭小な微高地状に築かれるムラの様子を明らかにした。住居のそれぞれは隣接するそれ以前の住居を切って築かれており、その密集の度合いからみて立地上の制約を大きく受けていることが想定される。古墳時代の遺構面は年代からみて大きく二つに分けられ、第4遺構面（古墳時代後期）と第5遺構面（弥生時代後期終末～古墳時代前期）からなる。二つの遺構面のレベル差は20~40cmであるが、遺構の分布範囲は共通する部分が多く、遺構によってはその帰属年代を決定し切れていないものもある。徳島市上八万町から八万町にかけての一帯では前期古墳ある

いは後期古墳が多く知られていたが、その基盤となる集落遺跡については全く実態が判明しておらず、貴重な成果となつた。また、旧流路内にはしがらみ状の施設を設けており、水田経営に際しても画期があったことが分かる。田舎もその状況証拠の一つとみることができる。

寺山遺跡は金剛光寺と伝えられる地点に位置している。遺跡の性格については寺の存在を直接的に裏付ける遺構・遺物を得るには至らなかつた。中世段階の遺構は広範囲に広がつており、またそこから出土した遺物も膨大なものである。今後の詳細な検討により、各々の遺構が遺跡の中でどのような意味を持つかなど、総合的に改めて寺院を核として発展したと思われる屋敷地の性格を明らかにしていく必要がある。

集落の発展

弥生時代以降の各年代の流路と遺構面が検出されたことにより、集落の発展状況が判明した。弥生時代終末期～古墳時代後期にかけては、流路に挟まれた狭い範囲で集落が営まれる。住居の建て替えが繰り返される。

奈良～平安時代にかけては、遺構・遺物ともに密度がやや粗で、この段階に建立が想定される金剛光寺に直接的に結びつく成果は特に得られなかつた。

鎌倉～室町時代にはさらに生活面が拡大し、13～14世紀代の遺構が最も多く、銭貨の一括埋納や基壇状の遺構がみられる他、圧倒的多数の土師質土器や多数の柱穴群（掘立柱建物跡）も出土している。これらのことからも商工業的にも発展がみられ、寺院などを核に発展を遂げたものと考えられる。

圧倒的多数の土師質土器の数量が示すものは、近接して窯の存在をうかがわせる。そのことは窯堂やスラグ、自然釉の付着した土器もみられることからも推測されるが、直接的な生産遺構は見つかっていない。

中世期後半以降、遺構数が激減する。近世初頭には、園瀬川を「寺山」の南側から北側へ付け替えたとされており、それに伴い集落もまた北側へと移動したとされる。遺跡の状況と一致する。

また弥生時代終末期～古墳時代前期と古墳時代後期の2時期の集落および自然流路が確認された。狭小地での集落の連続や流路内の堰状の施設が注目される。

寺山遺跡では、古墳時代前期から集落が形成されていたことが確認された。寺山遺跡の南部、県道を挟んで位置する広田遺跡など周辺の遺跡においても古墳時代の集落が展開しており、古墳時代後期には、園瀬川下流域地域において広範囲に集落域を形成していたことが明らかになっている。従来、眉山北麓や鯖喰川流域の古墳群・遺跡群は注目されてきた。徳島市上八万町から八万町にかけての一帯では前期古墳あるいは後期古墳が多く知られていたが、その基盤となる集落遺跡については全く実態が判明しておらず、不明であった。今回の調査で集落域を示す成果が得られ、貴重な資料を提示することができた。また眉山・向寺山・氣延山周辺に所在する古墳の築造集団との関連についても注目される。

遺物

出土した遺物の全体量は以下の通りである。

遺物総点数	420,000点
コンテナ総数	480箱

内訳は、土師器・須恵器・陶器・磁器のほか、金属製品・木製品・石製品である。金属製品には、銅

製品として銭貨が、鉄製品には斧・鎌・釘などがある。木製品には農具が、石製品には砥石・台石・硯・温石などがある。

出土遺物として多かったのは、第2遺構面の各遺構・第4遺構面の堅穴住居および2カ所の自然流路である。遺物の出土点数は出土遺構の量・密度的とも連動している。

中世遺物

土器・土製品類

寺山遺跡で出土している遺物の中で、最も量の多いのは土器・陶磁器である。その中には弥生時代終末～古墳時代中・後期～平安時代～鎌倉・室町時代～江戸時代、近現代にいたるまで様々な時代のものが含まれているが、圧倒的に出土量の中心を占めているのが、鎌倉～室町時代の中世土器である。ここでは遺構出土の一括性の高い中世土器資料について紹介をすすめる。

土師質土器

釉薬をかけない素焼きの上器。概して底部に回転台からの切り離し痕が残る。寺山遺跡出土の土師質土器の杯・皿類の底部切り離し技法は、ほぼ回転糸切りである。出土した土師質土器は在地生産のものと考えられるが、生産場所は特定されていない。また客観的に「吉備系土師質土器」や「畿内系土師質土器」が散見する。

椀

体部を丸く成形した、内彎する体部をもつ供膳容器。寺山遺跡出土の土師質土器の皿類は内彎する体部をもつものが多く、口縁部や体部だけでは分類が困難なため、原則として高台のつくものを椀として分類した。体部の調整はナデであり、外面はナデによる弱い稜がみられるが、内面はヘラ状工具などで丁寧に調整が施される傾向がみられる。

高台のつくもの

杯

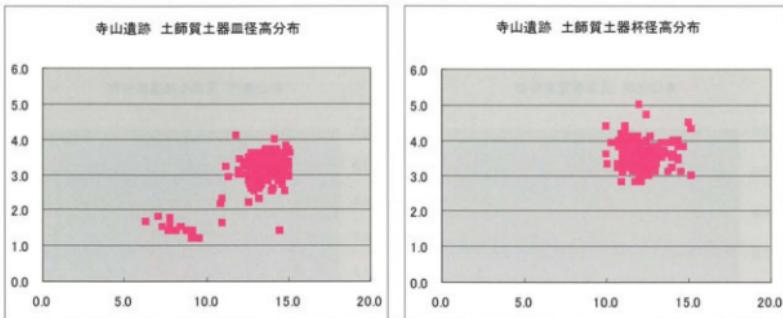
直線的な体部をもつ供膳容器。体部内外面はナデ調整であり、内外面に弱い稜をもつものが多い。底部外面には回転糸切りによる底部切り離しの痕跡が明瞭に残る。県内においては12世紀代に回転ヘラ切りから回転糸切りへの転換がみられ、12世紀後半から13世紀代にかけては土師質土器の杯・皿類の底部切り離し技法は、ほぼ回転糸切りで占められる。

皿

杯に類似する形態をもつ供膳容器。やや内彎する体部をもち、杯と比較して口径に対する器高の比率が小さいものを皿とした。杯と同様に底部の切り離し技法は、ほぼ回転糸切りである。皿には口径10cm前後、器高2cm前後の小型のものを小皿として呼び分けている。

皿はやや内彎する体部をもつものと直線的な体部をもつもの、および直立気味に立ち上がる体部をもつものに大別される。小皿の中には器高が低く体部が直線的に短く外上方に延びるものと、器高が高く体部がやや直立気味に立ち上がるものに大別できる。皿・小皿ともに直立気味に立ち上がるものはやや

口径が小さい。



鍋

丸底を呈する煮沸具である。内面は横方向のハケ、外面は縦方向のハケが施される。内面はヘラ状工具によるナデ調整のものもみられる。また外面にはユビオサエが明瞭に残るものもある。完形のものではなく、口縁部のみのものがほとんどである。口縁部が「く」の字状に外反するものと、外反して内擣するものとに分けられる。

釜

口縁部直下に鋸をもつ煮沸具である。口縁部が直立するものと内傾するものとがある。内面は横方向のハケ、外面は縦方向のハケが施される。内面はヘラ状工具によるナデ調整のものもみられる。また外面にはユビオサエが明瞭に残るものもある。

畿内系土師器

搬入品と考えられる杯・皿類。底部に切り離し痕をもたず、丸みをもつ底部を呈する。底部はナデで仕上げるが、ユビオサエが残るものもみられる。これらは畿内およびその周辺で生産されたものと思われる。すべての土器の生産地の確定は困難であるが、これらの土器を畿内系土師器として扱った。

吉備系土師質土器

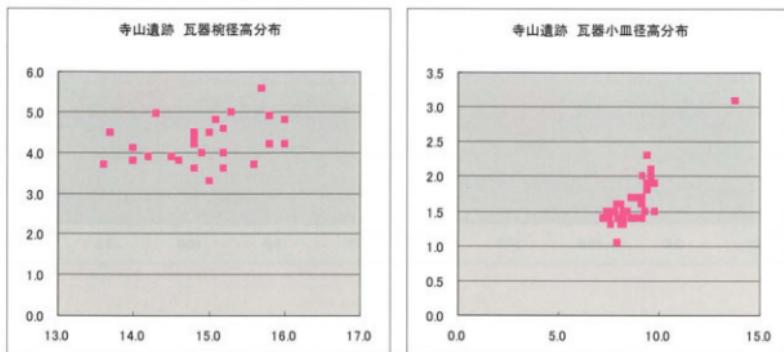
搬入品と考えられる杯・皿類。直線的に外上方に延びる体部をもち、硬質で白色系の胎土を呈する。体部内外面は強いヨコナデで調整され、稜が目立つ。底部まで残るもののが少ないと、底部の切り離し技法の詳細は不明であるが、判別可能な資料については、底部切り離し技法は回転ヘラ切りである。

瓦器

器表面に炭素を吸着させた灰黒色を呈する土器。器表面の調整は基本的には、ナデののちヘラミガキが施される。寺山遺跡で出土しているものはほとんどが椀・皿の小型品である。産地の判別しないものもあるが、椀・皿などの供膳具については畿内産だと考えられる。

椀

内彎する体部と丸味をもつ底部を有する供膳容器。輪高台が貼り付けられる。出土した椀の大部分は、和泉型と呼ばれる搬入品で占められる。少量ながら楠葉型も出土している。



杯

直線的な体部をもつ無高台の供膳容器。出土点数は皿に比べて少ない。体部内外面はナデ・ヘラミガキ調整であり、内外面に弱い稜をもつものが多い。底部外面には底部切り離しの痕跡が残る。

皿

器高の低い無高台の供膳容器。大部分は和泉型である。底部は丸味をもち、外底面はユビオサエののちナデで仕上げる。内面にはヘラミガキあるいはナデのみで調整が施される。底部に切り離し痕を持たない。概ねの法量は、口径10cm前後、器高2cm前後を呈し、小皿として分類している。

瓦質土器

瓦器と同様に炭素を吸着させた灰黒色を呈する土器。ヘラミガキは施されずナデで器面調整される。

鉢

直線的またはやや内彎しながら外方に延びる体部をもつ。底部は平底。

釜

口縁部直下に鈎をもつ煮沸具である。口縁部が内傾するものがみられる。

国産陶磁器

その多くが唐津・伊万里の肥前系で占められる。その他、瀬戸・備前・常滑等もみられるが、いずれも破片である。備前には擂鉢・甕、常滑は甕、瀬戸・美濃は碗等がある。

須恵質上器

東播系須恵器

壺や（片口）鉢がみられる。壺は体部外面に格子目タタキのある亀山系と体部外面に樹枝状のタタキのある魚住系のものがみられる。鉢は内外面ナデで調整される。

西村系須恵器

楕形がみられる。外面はユビオサエ・ナデ・ヘラミガキによる調整、内面はナデあるいは板状工具によるナデ（ハケ）がみられる。体部は腰が張り、外面下半にユビオサエがみられ、杯形から楕形への成形過程を留めるものと思われる。体部を歪め、片口状を呈するものもある。

輸入陶磁器

生産地については不明のものもあるが、概ね中国産のものである。出土土器全体に占める割合は1%に満たない。また出土した輸入陶磁器はいずれも破片である。そのため、寺山遺跡のみでの分類基準を設定することは困難であるため、太宰府における分類を利用し記述をすすめる。

青磁

完形出土ではなく、いずれも破片である。產地の判別するものは龍泉窯および同安窯のものがあり、碗・皿類の供膳具が出土している。碗は外面に蓮弁文が施され、大部分が龍泉窯であると思われる。皿はみこみに柳描文が施され、大部分が同安窯であると思われる。

白磁

白磁についても完形出土ではなく、その多くは破片での出土である。碗・合子・壺・水注が出土している。碗は玉縁の口縁で森田分類のⅣ類にあたる。

金属器

鉄製品

釘類と思われるものが多数出土しているが、小片のため、全体が判明するものは少なく、大部分は実測に至らない。その他としては、刀子、鎌（鉋）、鑿、笄などがみられる。

鋳造・鍛冶関連

輪羽口・鉄滓・不明鉄製品

廐棄土坑と思われる不定形土坑より楕形の鉄滓も出土している。原位置は不明である。近接して製鉄跡の存在がうかがわれる。

銅製品

和鏡（菊花散双鳥文）の他、仏具の一部と思われる不明銅製品がみられる。

錢貨

ほとんどが北宋錢で占められる。單発的に明銭もみられる。

石製品

石鍋・湯石などの滑石製品が出土している。

まとめ

寺山遺跡における中世出土遺物を概観した。

土器の製作技法や法量は縦年のが根拠の一つとなるが、寺山遺跡においては量的には不足はないものの、層位的あるいは一括性のある出土事例に乏しく、残念ながら土器組成・法量による遺構の変遷過程を区分するには至らない。

数十万点に及ぶ大量の土師質土器の出土は、消費地としてはその様相は異質である。何らかの祭祀に伴う儀式に使用したとしてもあまりにも大量であると思われる。器種としては杯・皿がみられるが、皿の方が出土点数が多い。杯・皿とともに底部の切り離し技法は回転糸切りであり、時期的には12世紀後半～13世紀前半頃の所産と考えられる。

中世段階の第2遺構面においては、錢貨の一括埋納や基壇状の遺構がみられる他、圧倒的多数の土師質土器や多数の柱穴群などからも商工業的にも発展がみられ、歴史的・立地環境から伝承される古代寺院の「金剛光寺」などを核に発展を遂げた門前町あるいは門前市とも思われるが、可能性としては指摘できるものの、盛土整地あるいは廃棄に近い遺物出土の状況や出土量からは合理的な説明、妥当性のある解釈として疑問が残る。

また圧倒的多数の土師質土器の数量が示すものは、窯の存在をうかがわせる。そのことは窯壁やスラグ、自然釉の付着した土器もみられることからも、近接して窯などの在地生産の場の存在が推測される。しかしながら、直接的な生産遺構は調査区の中では確認できていない。

吉野川下流域にみられる和泉型瓦器碗の搬入分布が寺山遺跡においても顕著である。楕円形の土器はほぼ和泉型で占められる。西村型や楠葉型あるいは吉備系といった土器碗も散見するが、出土点数は極微量であり、安定的な搬入の様相は示さない。和泉型瓦器碗はII・2期頃から散見し、IV～1期頃まで継続するが、概ねIII期全般を通じてが出土量のピークとなる。これは集落の展開（遺構数の増加）と符号しており、併せて畿内との連続的かつ活発な流通が展開していたことが想定される。

遺物や遺構の出土状況などをめぐる様々な現象は、それぞれ単独で考察している間は、いくつかの可能性は指摘できるが、決定的な解釈を位置付けることは困難である。しかし、それらの事象を相互に関連させながら考察することによって、合理的な説明も可能になると思われる。今回触れることのできなかった多くの問題も今後総合的に考察し、妥当性のある解釈を示していくなければならない。

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第70集

寺山遺跡

広域集幹河川改修（園瀬川）事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書
《第1分冊 本文編》

発行日 平成20(2008)年3月31日

編集 財團法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒779-0108 徳島県板野郡板野町大伏字平山86番2
TEL (088) 672-4545 FAX (088) 672-4550

発行 徳島県教育委員会
財團法人 徳島県埋蔵文化財センター

印刷 徳島県教育印刷株式会社